

信 （俗 信 を 含 む）

今井善一郎

六合村は上毛でも山地に属する。従つて昔は人煙稀薄な土地であったから、こゝに芽生えた信仰もやゝブリミティップなものが多い。煩瑣な思考や形式を要する宗教は見られない。それにしても信仰の大部分は人間相互の関連から起り、外来者から伝えられたと解すべきものが普通である。たゞ山中の恐ろしい寂寥感とか、自然の威圧に従つて自然発生的に感得せられた信仰への傾向は強い。

一、村落の信仰

1 神社信仰

村落の信仰としては当然神社の信仰が一番基礎になっている。その神社はどのようにして発生したかは現在では不明であるが、土地本来の神としてはやはり白根の神であろうが、それを産土にする村は別掲神社一覽によると引沼と小倉だけである。諏訪神社が多いのは信州から移住して來た人々の原籍を物語るものであろう。神明と伊勢と二宮がやゝ多いのは旧時の伊勢御師の活動の名残かとも思われる。それにもしても神明は内宮の、伊勢は外宮の信仰の土着したものと見られるのは、こんな山の中でもと考へても興味のある事である。御師活動の今一つの名残りは熊野の信仰であろう。碓氷峠の熊野様の頌札は最近迄続けられて居り、そ

の村々の信仰拠点が神社になったものであろう。琴平や八幡の神はある時代の一時の流行によつて入来信仰されたものであろうし、十二（大山）基や稻荷、或は飯綱の神はその神の御利益の故に祀られたものにちがいない。赤城神社や、末社ではあるが櫻名神社がこの地にあるのは、やはり特殊の山の信仰の余波であつたかもしれない。

神社信仰で注目すべきは「張屋（チヨウヤ）」の事である。之は他の地方の社務所に相当するのであるが、信仰のための斎戒場、おこもり場、村の公会堂等の役目を果して、村落の重要な精神的共同作業の会場であった。祭の前夜の張屋における楽しい生活は淋しい山奥の村の大きな交歓であった。

こゝに県厅蔵神社名細帳から本村の神社一覧をそえておく。これは明治十二年の姿であつて、今の神社は合併が多く行われている事、論をまたない。

2 現在の神社信仰の有様

現在の神社信仰の有り方を示す報告二三を掲げておく。

赤岩神社

赤岩・広池両部落に、いくつもあった神社を明治四十三年ごろ合祀してできたもので、もとは飯綱様と呼んでいた。それより前の村社は諏訪神社だったが、飯綱神社の社殿が立派なのでこちらを村社にした飯綱様は山根の別当教學院が主力で造つたものである。

六合村神社一覽

(明治十一年 神社明細帳原簿より)

祭日は二月二十四日（もとは旧一月二十四日）でダシも出るし、酒一石もタメでかつぎ出して、ひしゃくで汲んでくるほどのにぎやかな祭りだったが、明治三十九年にやつて以後止めたのでダシは残っていない。

(赤岩)

ケイヤクで決められていて、祭りの指図をした。（赤岩）
田代神社
祭神は天照大神、三月十五日が祭日、京塚の大神宮さんを、京塚の人にも承知してもらって、昭和二年分祀した。（田代原）

神様は白根様、大神宮様のほかはまつっていない。もとは部落の稻荷様があつた。

屋敷稻荷は各家にない。

もとは赤岩の村社だった。祭日は八月二十七日（もとは旧七月二十七日）で、朝ゲにうどんをこしらえて青ガヤのはしを作つて進せてから食べる。山のかやはこれ以後使用していいという。カヤの魂を神棚に供えよう。またムラサキソ（ムラサキフサ）を進せると腹をこわさない、赤痢にかかるないといわれ、岩島からもかついで來た。祭りには各戸で甘酒を供え、作つて、ヨシを二本切つそいで結んだヨシダルに入れて神社に供えよう。祭り世話人は上下の組から一人ずつ出たが、もとは若い頭頭が二人

原指書社

小倉にはもと山口一家だけであった。白根山のふもとの白根様をまつた。草津の白根より小倉の白根様の方が古いので、小倉の方が本家だという。

里芋とこまは白根さんの氏子はつくってはならないという。白根さんが里芋のからですべつてころんで、こまのからで目をついて、目がびっこになつたのだという。白根さんの氏子は目がびっこだという。今でも部落では里芋とこまはつくらない。

一、家及び屋敷の神

1 屋内の神

これは六合村一般に変りはなかつたが、今小倉の例を上る。



便所内に張られた女の絵姿

チヨウズバ神サマという（小雨）

今井善一郎撮影

皇太神宮……オヤ
ガミとしておが
む。

カマド神……お正
月にしめを張
る。

オソーデンサマ……
：既にある神様。

便所神（これは便
所が独立してい
る場合は屋敷内
の神となる）

便所には女神の絵
がはつてあるが、

これは入山地区の
地神様はたけの神様である。

地神様は春の社日におくだけになつて、百姓をみていて、秋の社日に

子供が元日の朝、
初絵と一緒に売り

を買っておくれ」といって売りに来る。昔は日影から売りに来たが今は長野原から来る。この売り上げが子供のキューになつた。（小倉）

2 屋敷内の神

家によって稲荷様がある。

便所神、井戸神等がある。（小倉）

屋敷稲荷

初午の日、オカシラッキ、赤飯を供える。然し屋敷神はある家とない家とある。（田代原）

三、産業神

産業関係の信仰を一括しておく。

農神信仰

1 かゝし神

畠の守り神である。きつくなればよくできたという。これをどんどんやきの時に焼く。一月の十三日か十四日につくる。お正月かかし神は、鳥でもけだものでも作物をあらさぬためにつくる。お正月がすむとはたけぎわにつれて行く人もある。大概は一年（翌年新しいのをつくるまで）神棚へあげておく。（京塚）

2 地神様

に来るもの、「初絵買ってくれよ」とか「おめでとう」ざいます。初絵

長さんのところへよって、おがんでから雑談をした。場合によつては、この日に、ほしくさの山の口を何日頃にするかなどといふことはなしもした。

社日の日には地神様のぼり下りの日なので土をうごかさない方がいいといつた。(品木)

3 収穫祭(山本茂平氏報)

甘酒祭は部落の農業収穫祭である。古くはお頭(部落の長)は麻の布を織つて着用してお祭りしたとの事である。農業に従事する者が風除の神(熊野様)や、豊作を祈る地神様其の他の神仏に豊年萬作を祈り、且つ感謝して夏麦の収穫の後と、秋の収納の後に行う。

甘酒は夏で一夜、秋は二昼夜で醸造される。甘い、酸いは糲の良否、作る時の湯水の加減、多少共にもより、又昔から之に参加した老婆の説明等も重要である。

甘酒祭の当日は、お頭の主婦が若い娘、娘共を集め(月経の者、不幸等家にあつた娘、娘は不淨で参加しない)。朝、神社や仏堂を廻つて甘酒を供えて歩く。子供等は午前中に行くが、大人は正午からお頭の家が神社の張屋に行って飲む。

行商、旅行等で祭りの当日不在の者の家には一升入りの大柄杓で一杯ずつ配達する。夕方になり残った甘酒は、量をよく考えて人数に応じて分配する。造る時の耗代、穀物は昔は毎戸平等だったが、明治末頃頭割(人數割)になった。

今は入山でも京塚、世立位になり、他の村ではこのなつかしい収穫祭も大概なくなってしまった。

山神信仰

1 山の神(十二様一一講)

十二様といふ、山仕事をする人が祀る。祭日は十二日。

十二講は毎月十一日、お酒、小豆の赤い御飯を供える程度で、この日は木伐りをしない。嘗てマナバシを某氏の父親が伐つて死んだことがある。これは十二様の木なのである。

呪術・深山などで霧がまくと梅干をもつて行くと晴れるという。鉄砲

ブチは梅干をもつて行つてはいけない。(下太子)

炭焼きする人、木を伐採する人しか祭らない。祭日は五月八日。

十二様に御神酒をあげて飲みくいする。オカシラツキ、小豆飯をたいてあげる程度。

場所は木戸馬場のお宮で京塚、品木、田代原の部落が共同でやる。

この日山の木を伐つてはならない。普段でも十二様の木であるマド木は切るなど。(田代原)

山の神・十二様といふ。女の神様で十二日が祭日。

十二様は木の神様で、十二講をする。十二講は十二日ごとに酒一升買つて男衆がする。とくに、十二月と一月の十二日は重くまつる。(品木)

十二様

十二様は女の神様だといふ。十二様は、以前は鎮守の森にあつたが、今はこわしてない。まつりは月々の十二日。山へ出る人がおまつりをする。この日は心ゆわいをする程度。十二様には十二人の子供があつたといふ。(小倉)

十二講

炭をやく人は月の十二日に十二講をする。火入れ、とりこみに山へでるのに十二日をさけた。日をきめて山へ行くときと、かえってきてからも十二講をした。

山仕事をする人たちにとって、十二様が一番ありがたい、おつかない神様であった。

山へ出るのは危険な仕事なので、十二様を信仰した。朝、山へ出るとき、山の神様に向つておかんから出かけた。(小倉)

今はしていないが、三月十一日は、とくに十二様の村の祭典だったといふ。(小倉)
十二様は石宮になっている。祭日は毎月十一日であるが、山仕事をする人が晩しやくを交す程度である。(広池)

四、子供の祭り

1 道祖神祭

一月十五日にした。青年頭が寄附を集め、子供が小作作りをした。
附は少ない人が百円位、多い人は五百円位する。子供が菓子やみかんを
買って、楽しんだ。(入山)



長平の道祖神
近藤義雄撮影

旧十月十日、餅をついて酒をのむ。子供は村を歩いて薬鉄砲をたまう
てまる。十日夜の晩は魔物の来る時のように考えられていた。(引沼)

五、其他村内の信仰

1 庚申様

品木部落の愛宕様のところに庚申塔がたっているので、地震がして、
上の村では大地震がしたなどといつても、下の村ではゆれないといわれ
た。
庚申様が、地をしっかりとふんづけているので、下の村は地震のときに
もゆれないのだとむかしの人はいっていたという。(品木)

2 京塚の子守様

子守様は京塚の山口榮司さんのところでもっている。今から四代前の
山口伝兵衛という人が、よそからもってきてまつたものという。
おまつりは旧の一月十八日、赤岩から法印さんがきた。今はこない。
まつりは昼間。おまいりに来るのは、子を守る神様なので、子たちの女
の人。むかしはおまいりにきた人に全部、酒をくれたり、赤飯などをく
れだが、今はしていない。今はおまいりにくる人もすくなつた。以
前は、長野原からみの人はよくおまいりにきた。納めものじや、部落
の人より、赤岩辺の人の方がよく納めた。
お札は、法印さんが参詣者の希望によってこしらえてやった(筆でか
いた)。法印はおぼえてからは赤岩からきたが、わきからきたこともあ
つた。和光原からきたこともあった。
子守さまに納めたものは、布でつくったのぼりであった。
お札は神棚へはつておいた。

3 天神祭
3 十日夜
4 旧正月二十五日に子供が行つた。昭和三十五年から新暦を用いるよ
うになつた。

で、よその人だった。

子守さまは大塚からしゃってきただとい。山口伝兵衛といふ人は、人より少し異風だった。この人は川でよく寒行をしていた。

子守さんといふ神様は、十八人だとも二十人ともいはが、それだけ子をこしらえて、みんな育てた人なので、近所の人が、子を守る神にしよらとまつたとい。山口伝兵衛といふ人は今から四代前の人だが、この人に男二人、女一人の子供があつたが、若死したので、子守さまをまつるようになつたとい。



子守神社（京塚）

医者がいないのでお産も神仏にたよる。

井田安雄撮影

なお、京塚で子育ての神としているのは、子安さま、産泰さま。

安産の神は子安さま。

産泰さま（勢多郡城南村）へおまいりに行つた人もあつた。ここには講はなかつた。（京塚）

3 子安さま

和光原の下の堂の所に赤ん坊を抱いた女神の石塔がある。別に祭らないうが、子供が具合の悪い時に願をかけてまめに育つようにお参りする。安産の神にもなつてゐる。（和光原）

附 願かけ

願をかけた人の話はよく聞く。あるおばあさんは二十六才から後家を通し、お願ばたしに神社に一人で泊つておこもりした。また三人で大岩の不動様におこもりしたこともある。

村のあるおじいさんは寒中三十日間、雪の中を諏訪様にはだし参りをして願をかけ、金を残した。（小雨）

4 京塚由来（山口輝視氏報）

昔此の京塚の村は山崩れが余り多いのでお經を石に一つ一つ記して山崩れのないよう願をかけ、そのお經を埋めて御經塚を作つた。部落の名も経塚であつたが、いつか京塚といふ文字に改つた。此の塚は今も部落の川の畔にある。

5 お行様

崩塔に延宝八年申ノ三月

□海後婆塞観位

のようく判読できる文字あり。

子守さまは、子供をまもつて育ててくれる神様として信仰している。乳がでないとき、子守さまにためめば乳が出るとい。そのときはちぶくろをぬつてあげる。子守さまは死んだはなしをいやがる。

子守さまは女の神様だとい。伝兵衛さんは上世立の人と二人でこの神様をつれてきたとい。

子守さまは、子供をまもつて育ててくれる神様として信仰している。

乳がでないとき、子守さまにためめば乳が出るとい。そのときはちぶくろをぬつてあげる。

子守さまは死んだはなしをいやがる。



お行人さま（品木）

行人が生きうめにされたという墓

井田 安雄 撮影

いこづかいをも
らうと、たべき
れないほどお菓
子が買えたもの
だった。

（品木）

附 お行様の

伝説探訪記

品木にあるお行
様のおなしをお
飼いたいともおも
いますが

むかしの故人
の人にきいたの
ですが、生きた
まま中へ入って

て、けむりができるうちはお茶とつけ木をあげるといわれて、お茶とつけ

木をそなえて信仰していることを承っています。

そのいきうめになつた人はどういう人ですか。
行人ですが、さてどこからわたってきたかわからぬわけ
です。

お行さんという人が、穴をほつて鉛のなつているうちはお茶とつけ木
で水をながしてくれろつて、その坊さんがあん中で、鉛の音のするう
ちはお茶とつけ木で、水をながしこんでくれろつて、その坊さんがあな
へ入つていわねたいわねがあるのそうだ。

つけ木はなんにつかったわけですか。

つけ木で火をもしつけてお茶をわかしてのむといわぬらしい。食う
ものもねえで、この村に絶対に風邪はひかせねえから、毎朝交代できて

みて、中で風鉛の音がしなかつたら死んだものとおもえ、そうすりや絶
対にこの村の人風邪をひかせねえ。そのあと幾人が交代で見に行
つたが、一軒風鉛の音がしねえ、三月十日に行つたりや、その音がしね
え、そんときを死んだ日としてまつたということを、聞くにやきいて
いるけど。

何日間ぐらいい鉛がなつていたといいますか。

それはどうもきいとかねえ。

竹箆の節をぬいて、お茶をまけてくれると下で行人さんが飲んで、鉛
をならしていたというだよ。

三月十日に風鉛の音がしねえで、死んだだんべえといつて、それから
こちちへ、お茶とつけ木をもつて、いつちや参拝するらしいよ。

三月十日にお参りに行くときに、お茶はどういう風にするんですか。

お茶の葉をつぶんでもつて、そのままあげちゃおいて、そのままあらつてきて、それを手前の家でわかしてのめば風邪を
ひかねえといふ。

つけ木はたゞあげるだけですか。

今はつけ木はねえからマツチだ。マツチをあげるだ。むかしはお茶と
つけ木をあげたたげで、そこで火はつけねえだよ。

お茶を紙につぶんでもつてばかもって行くだ。そのうちからもらつて
きて自分の家で本格的にわかして家中のむわけだ。

おまいりにきた人ほんんな人ですか。

今のところじや一月十日と十二月十日のはじめとしめえにおまいりに
行くだけだな。むかしは三月十日におまいりがあつて、そのほかに十日
におまいりに行きてえ人がおまいりにいったわけだ。

お行さんは必ず分速くから参詣にきただね。病氣でいる人はお願をか
けておいて、よくなつたからお参りにきたといって、いまでもちょいち
ょいくらあ。

子供の風つびきや虫にさくという。渋川あたりから、麻とほんでんをもつてお参りにくるよ。

渋川あたりからくる人は坊さんとか行者みたいな人ですか。

そうじゃねえ。素人ですよ。子供が病氣でいるとか、何とかそういうのを、代々神業をかけていくということになつていて、それでくるらしいや。

くるときにや棒に麻とほんでんをつけてきたといだね。

六、遠地の神々の信仰

1 三峯信仰

以前は、三峯さんをかりてきて、十五日ごとにおつきあげをした。このときは、米を流でついでからだで、台の上へのせて、それにおかしらつきて（いわし）二本そえてした。

これは部落の若い衆が中心になつてしまつた。岩山の頂上にはくらをつく三峯さまは毎月とまりこみでかりに行つた。お大きさまをかりてきた。これは、厄難除けとも、作神様ともいつた。（京塚）

2 熊野信仰

峠さん（熊野さん）がくれば、荒れるとか、寒いとかいった。峠さんは五月と十一月に来た。

峠の神主がお札をくぱりにきた。お札とひきかえに金をとつて、お札は、むかしはそばをもつて行ったという。お札は、千羽鳥・家内安全・三宝荒神など。

峠様の講は五人一講で、毎年五月五日に代参が行つた。講はくじ引きでつくつた。小倉から峠までは十二里あり、歩いて行つた。



峠様（熊野權現）の牛王を張つた家（小雨）

今井善一郎 撮影

3 産泰信仰

お産の神様は産泰さま、おまいりに行つた人は、この辺にもときどきあつた。男も女も行つた。（小倉）

七、寺院について

寺院については今度、殆ど調査をしなかつた。村当局提供の関係資料だけ掲げておく。これを見ても判明する事は、昔は死者の葬送は殆ど竜沢

なにかのがなくなつて、犯人がわからないとき、解決がつかないときは、千羽鳥の一羽を引きとつて、水にいたるむと、とつた人は血をはくという。

熊野のそばた

くはつ

熊野の神主

が

る頃お札をもつて一軒一軒まわつて、そばを一升ずつあつめた。宿はおかしら（駐在員）の家。お札は、あらしょけ・家内安全・虫よけ・千羽鳥・火難よけ。（長

寺(日影)一寺の任務であり、村々には觀音・薬師・地藏・不動・毘沙門等の小堂があり、死者の回向の時のたよりとなつたにすぎなかつたのである。後掲山本茂平翁の報告はこの点大いに参考になると思う。

1 寺堂関係資料

○日影村 寺院関係資料(明治十二年寺院明細帳より)

1 岩景山 竜沢寺(字合烟)

宗派……曹洞宗

檀徒二、三八七人

○太子村 1毘沙門堂(字太子)

信徒二二人

○赤岩村 1毘沙門堂(字太子)

信徒二二人

1 薬師堂(字中室)

信徒六〇人

2 観音堂(字鐵治谷戸)

信徒六〇人

3 光松院(字林檎の木)

四〇人

○生須村 1観音堂(字東平)

信徒一八人(人は戸)

○小雨村 2地蔵堂(字東平)

信徒一八人(人は戸)

○光泉寺(字金蔵沢)

宗派 真言宗

信徒一八人(人は戸)

○入山村 1月洲庵(字根広)

宗派 曹洞宗

龍沢寺(字根広)

○寺院明細帳に書き上げてないもの
赤岩村

1鏡学院 2地蔵堂 3毘沙門堂(この節焼失してなかつた。)

小雨村 1毘沙門堂(字沼尾 山田氏個人持)

太子村 1不動堂

入山村 1薬師堂(花敷温泉) 2堂(字荷付場)

三原三十三番札所

2 お寺と葬儀(山本茂平氏報)

竜沢寺は曹洞宗であるが、昔は念仏の道場であつたらしい。彼岸などには村の者が集つて、お堂で南無阿弥陀仏と念仏を唱え、最後に主婦達が団子など沢山に持参して皆で食べた。後に糸が切れて子供の玩具になつてしまつたが、以前は大きな玉(百八ヶ)の数珠があり、念仏を唱える人の膝の上に円形の輪にして上げ、房のある玉の所を音頭とりの処にして一つ申せば玉一個ずつ摺かみながら廻し、百八回で終つたといふ。今でも葬儀の終つた後、その家では村中一組に円形となつて交互に念佛を唱える。

根広は老人が一人初めて次に村中一緒になつてやはり百八つ唱える。引説では次のようにいふ。「南無光明遍照、十方世界、念仏至上、攝取不捨、はあ、南無阿弥陀。」こへ「はん」とチヨンを入れて「仏」と申し、何だがはんが余分の様だが古代からの習慣で別におかしく感する者もいない。

この文句は念佛宗のものと思われる。そのためか今の住職の父が曹洞宗の経をおいて書いて置き、若い村の嘱託などが二、三回の葬儀にやつてみたが、又元通り、光明遍照になつて昔通りにやつてゐる。

れのため流失してしまった。今は座像の釈迦如来が安置してある。

古代は阿弥陀仏の軸が花敷の奥の部落にあり、葬儀には此の軸を先頭に念佛唱えつゝ奉送したとの事（今井曰、「秋山紀行」の黒駒太子像の如く、僧侶不參のため引導代りに用いられたものと思う）。他に仏像もあり、寺の代りに信心した由、ある年熱病流行して仏の崇りだとて、丁寧な箱を作り元のお寺へ返す心算で川へ流したのが入山字見寄の河原に上り、同村の者が拾い上げ、今の見寄の大日堂へ祭つたとの老人からの云い伝えがある。見寄の大日如来は矢倉から背負つて来たという説（山本三郎次氏報）もある。

昔は川へ流すと自分の思う死へ流れ行くと信じられていて、口中の悪いには隱岐の国アグナシ地蔵尊へ祈願して、全快すれば六七尺位の長さ四寸角位の角材に「奉納隱岐國無地蔵尊、祈願大願成就」と記し、年月日と所姓名を記し川に流した。此の材木が海に入り次第に隱岐の島へ漂着して寺院の普請材になるのだと父から聞かされ、私など感心したものであった。

お寺の遠い入山村へも根広へ月洲寺を建立して旅僧なども昔から這入った由、中にはなかなかの名僧もあったとの事である。

仏教の盛んな頃には入山の各部落にお堂が二つも三つもあり、又旅僧の墓も各部落にあった。食事は悪くも住みよいので昔から旅の和尚が駐つて学問や仏教を導いたのである。

附 倍心の話（山本茂平氏報）

私の子供の時、古い家の表には五寸四方位の四分厚さ程の板に中央に赤い日の丸が書いてあり、その下に「丸山教会」と記してあった。

日清戦争がすんだ直後、当地方の表の戸或は戸袋などに、日清戦争の勇将樺山大将の名が次のように記してはつてあった。

「海軍大将 樺山大将之住居（或は家）」

次には天理教の布教があったが余り振わなかつた。

昔から六合村にも法印が居たが、只今は赤岩の鏡学院だけになつた。

昔は和光原に和光院と天正院 赤岩に鏡学院今一つ忘れたが光松院であったか、入山では名を呼んで菊法印といふのがあった。

族の芸人達は各々の口すごしで入って来たのであるが、元来は多少共信仰心を村の人々に誘い、それに応じて、種々の事を語つて聞かせていく。阿法陀羅經・虚無僧・口寄せ・左衛門語り・越後のゴゼ等である。

3 死後の靈

○ある人がノイローゼ氣味で世をはかんで自殺した。その母が非常に悲しんでいると、神社の裏の山で、その男が上つたり下つたりしている姿が見えた。妹にも見えたという。

○子供がなくなった時は善光寺の裏の蓮池にゆくと、池の底に死んだ子が見えるという。

又、越中の立山の嶺でも死んだ人に会えるという。

○死後三十三年たつと、神様になる。トモライアゲとかトリアゲとかの事をいふ、楊（シナ）などの二又の三四尺の生の木（葉はない）の塔婆を作り、お寺で紙に供養の文句を書いて貰つて来てこの生木の塔婆にはる。（引道）

八、余録（行者事件）

魚沼川の奥に長野県出身の行者がいた。魚とりに行つた人が見つけ、それから村の人に信仰され多くの人々が金品をもつて尊敬したが、明治十五年頃巡査を木にしばりつけて殺したことがあつたので、村中大きくなつたことがあつた。（長平）

行者事件

長平の獣師鉄砲榮作といふ男が、明治十六年に岩スゴ山へ狩に行き行者をみつけた。これは生神様といふので部落の鎮守へつれて来て、御祈

禱などした。それがすんで向うの山へ送つてゆき、行者の家を作つてやつた。ところが、これが国有林の盜伐したという事になり、警官が一人登つてゆき取調べをしたが、行者が頭として応じない。警察では一人残つて一人が里へ帰つた。その晩、行者と、残つた警官が格斗して、警官は木へしばりつけられ半殺しにされてしまった。その人は岐阜の出身で富永金太郎という人であった。

行者は入山へ出て来て一晩とまつた。そして又、岩すご山へ帰つた。六月十日にはまだ巡査は生きていたといふ、水をくれといったがくれず、行者は発吐温泉へ逃げた。

入山の村では盜伐事件が問題になり、代表で小倉の人が一人監獄に入つた。その金の負担について、家を作つてやつた人達と、家作りに行かぬ人達との間で仲間わざがもめだ。二年位して京塚の山本金三郎といふ人の仲裁で仲直りが出来た。

行者は発吐で捕えられ、死刑になつた。行者の名は佐藤安蔵、行名梅光正運といふ、新潟県北魚沼郡東中村の人だったという。(引沼にて採話)

九、禁

禁忌のいろ／＼をこゝにまとめておく。

作れない作物

赤岩は白根様の氏子なので、ゴマとサトイモは作るなという。白根様がイモがらですべつて、ゴマで目を突いたからで、この村の人は目が片つ方小さいといわれる。今でも作らないし、作つても取れないでの、買って食べるが、代りにイグサを作るからゴマはあまりいらない。もしも作ると目がぶれるといわれ、実際に作った家にはいいことがないので止めてしまう。(赤岩)

和光原・小雨でも白根様の見える所ではゴマとハタケイモ(サトイモ)を作つてはいけないといわれる。(和光原・小雨)

梨木・荷付場ではキュウウリを作らない。作れば病人が出る。たゞしきユウリのかわりに遠いウリをつくつて間に合わせている。(梨木)

白根さんの氏子は、ゴマといもがラをつくつてはならないという。理由は、むかし白根さんが、いもがらですべつてころんで、ゴマの木で目をついたためという。(品木)

いろいろの禁忌

イロリにカキをくべれば、子供がやけどをする。(赤岩)

特殊な木

もとが二本で、うらが一本にまとまつてある木は切るのはではないといつた。

木を切らない日

二月十七日…木、かやのはらむ日という。

十一月十七日…山の神が狩りに出かける日で、狩先で出あうとよくなといわれた。(小倉)

十、呪い

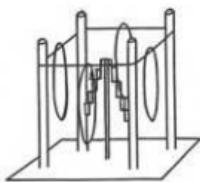
まじないも種々ある。採集の重複したのもあるが、そのまま掲げておいた。

ホーソー神

疱瘡の時(昔)にした事を今は種痘の後にしている。植え疱瘡の後十二日目に赤飯をふかして隣近所へ配る。ホーソー神様を屋根の中途へ投げる。四角な台に四本柱立て注連縄を張り、その縄に糸に赤い紙を書いた物を四所かけ、中央に赤い紙の幣束を立てる。これが疱瘡病ともホーソー神ともよぶものである。

この十二日間に近所ではホーソー見舞といってその子の家を訪問したものである。

・昔本当の疱瘡の時は体を洗ってやつた水を流すのをユナガシといつた。



麦バナが大変いよと、その上に寝かされた人もある。麦バナの团子がいよとてたべたものである。麦バナにねせるとかサブタが一つになってとれた。

麦バナの湯で洗つた時の釜の葉をやはり屋根の上に投げあげておいたものである。

(小雨)

流れ瀧頭

産婦が死ぬと、赤い布切れにお絆をかき流れの中に張つておき柄杓子をおいておき、通行人に水をかけて貰う。

(小雨)

治病の祈り

オセンガソ：般若心經を千度よむ。(小雨)

百度詣り：神様に鳥居の外から百度出たり入つたりして祈る。一度に一本ずつ織の小さいのを上げる。(小雨)

千本轍：紙で小さな轍を千本作り、神様の社の周囲にさして祈願する。(小雨)

オニキライ

よしをおりまげて△形におりまげてつくつた。これを節分の豆をいふとき、ほうろくをかきまわすときにつかつた。

これをいろいろの上につるしておくと、鬼がいやがつて来ないという。

(十三頁参照) (京塚)

オセンガン

大病人が出た時は念仏ばあさんを頼んでオセンガンを上げてもらう。赤岩の飯綱様にお百度参りし、赤い一尺ぐらいのぼり旗を一回お参りすることに一本ずつ立てる。千本のぼりは版本で押して、女の子が大病の時にお願ショウかけて明神様に上げたことがある。(小雨)

天氣祭り

京塚衆が鎮守へお参りに行くと天気になる。草津の白根神社までお参りに行くこともある。(和光原)

野反の弁天様にお酒を上げてさわいだり、野反の池をさわがすと雨が降る。そこで池を荒らして魚を釣つたり氷いだりすると、弁天様のお酒を上げて拝むと天気になる。(長平)

雨乞い

野反の弁天様にお酒を上げてさわいだり、野反の池をさわがすと雨が降る。そこで池を荒らして魚を釣つたり氷いだりすると、弁天様のお酒にさわるので必ず雨が降つた。(和光原)

風除け

大風の時嫌をさおに結んで立てると治まる。(赤岩)

六三除け

身体の具合の悪い時は法印様にシメを切つてもらい、神棚に上げて三日三晩ろうそくを上げるとなおる。

茶飲み茶わんのいとじりに水を少し入れてえびす様に供え、なおしてくれればいっぽい上げますというと治る。(小雨)

火災除け

火事が燃え広がつて来ないよう女性の腰巻をふると防げる。(赤岩)

ヤク子

両親が厄年に生まれた子は「ヤク子」といって、一旦すて子にしてすぐ自分の家ものが拾つて来る。(小雨)

カマド清め

葬式で出棺した時にはチョウバシ(さん俵)の上にカマドの灰とオキ

を三つぐらいのせて三本辻に置いてくる。(小雨)

危除け

正月十四日の晩に男二十五、四十二才、女十九、三十三才の人は北向き觀音の所か、三本辻でミカンや落花生をまいて危除けをする。(和光原)

耳ツブタゲ

同じ年の人が死んだ時には、まんじゅうやムギバナだんご(大麥粉のだんご)を二つ作って両耳に當て「いいことは聞け、悪いことは聞くな」と唱える。まんじゅうはあとで便所の屋根に上げる。(小雨)

呪

○ヤケドのまじない
「水が九つ、火が一つ、ついには火がまける。アビラウンケンソワカ」(三回)(引説)

耳ダレナオシ

椀の底をぬいて紐でつるす。耳だれがなおる。(引説)

なり果物の呪い

一月十四日、マニ玉団子のウデ水を、柿、桃、李等のなり果物にかける。(引説)

となえこと

○蛇に出会った時、又かじられた時、

「チガヤの針金、ボテラの恩を忘れたか、アビラウンケン、アビラウンケン」

これは昔蛇が昼寝していて茅葺に身体をつきぬかれてしまったとき、ボテラが下から体を持ち上げて助けてくれたといふ話を意味しているのである。ボテラというのはワラビの開いたものをいう方言。(引説)

○フキのとうを見付ける時、いうことば
「ジャオー・ゴンケン・ホゴンケン」

今出なければ出られまい。

夏になつたら焼けしむばい。」(引説)

ゆながし

ほうそらの子にちょうどべしをかぶせて、ささのはっぱにお湯をかけて、それをあたまの上にふりかける。ちょうどべしの上におがら(麻のから)の四本柱をたてて、芯へ赤いごへいを立てて、赤飯をのせて屋根の高いところへあげた。

ゆながしを早くしないと、こせがきになるという。ゆながしはほうそ

うがついてから、十二日目にする。赤飯は母親の親元へおくる程度。

(小倉)

十一、兆

○夢に一つ鳥見るとわるい。

○夢見がわるいと、翌日、つけ(死のしらせ)とか手紙が来る。

○光玉(青くて、大、小さまんくある)を見ると、不幸がある。

○火の柱(山に赤い火の柱が立つ、空へまつすぐ立つ)を見るとよくな

い事があるという。

○鳥啼 人の死ぬ前にある。

○虫が出る。葬式の坐敷に沢山出る事がある。(以上引説)

十二、怪

1 怪異

火柱…夜山に赤い火柱が立つ。

光玉…夜空をふわ／＼とぶ、青い。

ムジナ火…提灯の火の様だが離れたりついたり、増えたり減ったりする。一人でも、五、六人でも見える。(引説)

2 山の怪

天狗の太鼓の音は、一本バチでポンポンとなる。

岩菅山で大夕立の時、山小舎にこもっていると、何か羽音がした。穴からぞいて見ると、目の光る七、八才の子供位に見える天狗がいた。非常にこわかったという。（引説）（後記 山本茂平氏報参照）

3 妖 怪

火の玉 光り物などある。

狐にばかされた人もあつた。年寄りや子供にあつた。

ムジナ これは人につくと中々離れない。つかれた人は馬鹿になる。

狐は大部分ついても離れる。

河童 中の瀬橋を医者が馬に乗って通った処、河童が馬の足をおさえ

て引き込もうとした。医者がその手を切り落して家へもって帰つた。河

童が夜来て、宝珠の玉と手をとりかえて戻つた。この玉はケズルと粉薬

になり、よく焼れた。命宝散という。（赤岩）

4 異 獣

山 大

ある時、沢渡から母と子供一人で山を越えて来たら、峠で山犬に出会つた。あまりの恐ろしさに子供は「見マイ・聞タマイ」母は「語ルマイ」とそれぞれ、目・耳・口を押さえて黙つていたので無事に助かつた。昔は山犬がよく出て人の後をついて歩いたといふ。（小雨）

ムジナ

ムジナはばかだから、人間に取つつくと離れない。だからムジナに取つられた人はばかになる。この辺でもマミムジナはよく取れた。（小雨）

オサキ

おばあさんが赤痢で寝ている時、はりからひやりと胸に落ちたものがあるので、ひょいと払つたらバタリと戸に当つたという。（小雨）

まだ娘だったころ股にやき筋ぐらゐのおでしができて苦しんでいたが、夜中に急に「アイタタタタタ」といつてから「子を連れて来りやよかつたに、子を連れて来りやよかつたに」と口ばつた。家のおばあさんが「ウヌがどこに子がある」とどなつたら、目をさましておばあさんの顔をきょとんとして見てから、「犬の子さあ」といった。その目つきがとてもおつかなかつた。それからあしたにもけろりとはれがひけて治つてしまつた。（小雨）

ウルシ沢の○○院というもと法印の商い屋でオサキを飼つていた。ハゾギリ（高さ一尺直徑三尺の大きな桶でみそたきや麻をくる時に水を入れる物）にいっぱい飯をくれて養つていていた。オサキはばかりの玉に吊り下るので、百匁のものは八十匁しかないといわれた。（小雨）

5 怪異のはなし

岩菅山の天狗（山本茂平氏報）

今から五十年前、当地の山師が、ある夏岩スゴ山で小屋を建て曲物の原材料を取つて居ると五十才位の山伏が来て、自分は日本中の靈山を登拝している者だが、今日午後に大雷雨がありそうなので一泊させてほしいとしたんだ。山師一同は笠小屋でうまい物もないがといって泊めた処、言葉の通り大雷雨と暴風になり、小屋の中は洪水の如く槽の火は消え、夜のように暗く電光と雷鳴が響きわたつた。その中にバタ／＼、キユウ／＼と大鷹の舞うような音がしたので、山師一同、驚か鷹が来たのかと語り合つたが、山伏が小舎の隙間からのぞくと矢らしい伐りの中絶三尺もある大木の九大橋に、山伏の装束に似た服装をして羽天狗が、ビタ／＼大木を搔つたり、また飛び廻つたりしてるので、山師共は青くなつて小舎の隅にかたまつてゐた。

そこで山伏が草の戸を開いて読經して、小舎の周囲を廻つて七回も歩

くと風がおさまり雨も止んで晴天になった。

翌日は午前中仕事を休み、万代餅（ウルチの米をコワク煮て鍋の中で摺小木でつぎ、その後大丸太に移して斧の頭で揚ぐ）と姫餅（毎の大葉に米をよく磨いたのを包み湯で煮ると毎の大葉の煮りがしてうまい。）を作り、山伏に御馳走して沢山持たせて出発させてやったという。

雪入道（山本茂平氏報）

山の魔物には雪入道、一つ目小僧、マドウなどがある。一つ目小僧は片足だと云う話がある。雪に片足の跡があつたという。魔童といふのは年寄りか子供が夜泣くと「魔童がくる」といつてすかすこわいものである。

雪入道は雪男ともいふ、大変大きな足跡で爪の跡がないから熊ではないという。昔入山の奥の川浦で、山師が陰曆十月八日頃迄働いて下山して、十日夜の餅を揚げ十一月も休んで楽しく遊んだ。山師の中に一人変人がいて、朋友と一緒に下山しないで、十二三日頃帰るといつて小舎に残つた者があつたが、その頃になつても帰宅しないので、家人も村人も心配つたとして十日夜にあつた雪を踏みわけて山へ登つて見ると、その男が何物かに害されて死んでいた。小屋の附近は大雪の上に魔物の足跡があつたという。

今でも入山辺では十日夜の晩は淋しく思つている人が多い。

附 記

山本茂平氏の報告は今回の調査後のもので未完のものであるがその中信仰関係のものを適宜本章に加えさせていた（今井記）

天狗様の休み木

これは入山の鍛冶屋敷にある。むかし、中村三三郎さんの家が現在の道の端にあった。同家では病人がたえなかつたので易者にみてもらつたところ、お天狗さんの通る道に家をたてて、いるのがわかったといわれた。そこで家を現在地へ移したという。それからは病人もなくなつたという。

栗の木は写真にみるような大木で、天狗がここを通るときに休む木と



子守神社縁起（京塚）

相業伸仲撮影

天狗様の休み木

これは入山の鍛冶屋敷にある。むかし、中村三三郎さんの家が現在の道の端にあった。同家では病人がたえなかつたので易者にみてもらつたところ、お天狗さんの通る道に家をたてて、いるのがわかったといわれた。そこで家を現在地へ移したという。それからは病人もなくなつたという。

栗の木は写真にみるような大木で、天狗がここを通るときに休む木と



天狗の休み木（鍛冶屋敷）

井田安雄撮影

いい、絶対にきつてはいけない
とされ、少しだ
もきるとたより
がくるといつて
いる。

なお、鍛冶屋敷と幕坂部落（合わせて鍛治坂といい、現在十一軒）

で天狗様をまつっている。

この天狗様は石宮でもとは天狗山の頂上にあつたものだが、それを現在地へ移したといつてます

るのこと。おまつりは四月十七日で、この日赤岩から法印さんがきておがむ。まつりの宿は順番で、宿では一日中飲んだり食べたりして解散する。

△参考資料▽

子守神社縁起

上毛音妻郡

京塚村

山口伝兵衛

当代発願若名

伝蔵ト申者

當年三十五才

一則大峯山より諸造立乃節

拝領の略縁記有増

越誌末世に残さん為

写左之通り

子守宮署縁記

抑当社子守大明神ハ大峯の鎮

守山上隨一乃唱所也仍レ之。金剛杖にも

子守三十八社と申崇奉之子守卅八社

と申奉事ハ御子三十六神、生玉故也

則子守と書ハ子をまわると調免利

其往古太閤秀吉公既、初老至セ給ふ

と雖御子なし事を欲セ賜ふに神主一七日

乃間御祈禱申奉、不思儀秀頼公

儲、玉ふゆへに秀頼公御再建之御社

不知三災七難不犯咒咀
毒氣一度帰依直遇國得

子孫福智

右の御詫宣の文字ハ早馬御符の内ニ
あり此御符腰中に奉ハ諸の難を誦す

女人別して因縁を求産の時御詫宣

の文字を一字切抜東に当る井の水ヲ汲

御影を移し頂戴せしむる時ハ難産

乃恵なし男子ハ左女子ハ右の手之内に

擇て生るゝ事妙なり亦当社の御神

の内に少名彦名の御神ハ疱瘡を

守護し給ふ此神に祈誓掛け此守ヲ奉

セハ疱瘡輕さしめんとの御神則神

秘の守なり若宮大明神万物出生の

御神にして五穀成就海上安全ヲ守セ給ふ

若海河にて危き事有ハ此御影の守ヲ

水中へ放し其時明神米光まし／＼守護

なさせ賜ふ風波の難をのかれし当社

と丑寅向の御社にて鬼門金神除

乃御神故方達の祭礼あり亦牛馬の

頭ハ当社乃御宝物にて御神作なり

每歲正月十八日に御田植の神事とて

奈里故人なき人へ此守を頂戴せしむる
三年の内ニ勝胎成、事うたがいなし
常信心帰依乃者にハ子孫与へ海上守
護と舞産の愁、教安産いたさしめとの
御誓願則当社御詫宣曰

是則五穀成熟牛馬息災御祈禱

奈里信心男女此御神常に帰依する
輩ハ子孫繁栄諸願成就叶わせ給ふ

委細署縁記に阿らわし難^シと云々

吉野山子守宮神主

前坊修理亮

抑子守三拾八社大明神大

峯山より勸請し奉る草創ハ

頃者萬延元年申八月和光原

天台宗山本坊和光院と申修

驗入奉砌勸請いたし因縁

此尊神を乞請早速社

地ヲ極免木ヲ伐草ヲ刈石ヲ

鑿て山を平免小社を造立

いたし爰に安置まし満得玉

御垣且ハ本山の側ニ志たがい

毎年正月十八旦末世ニ至迄

是祭日之定例也建立六年

經て元治二癸丑年鳥居を立

八年至て宮殿造立此時慶応二年

卯三月是迄之大工方見寄

元右衛門と申職人折申候九年過て

同慶応三辰年石階石燈籠

造立仕候石工方ハ梨子木安右衛門と

申者抱持申候勸請之進免ハ決而不仕

候得とも難^シ有哉尊神の威徳にや

おのづから遠近御寄附の
誓志の重ある所の信心

を爰に誌して後世伝へ
のみ

明治二年己巳立春記之

從建立十年目
本社寄附

一屋根板 村久之丞

一同板 タ金三郎

一金二朱 幸左衛門

一人足二人 同人

一三十疋 清藏

一二十疋 草津新菊屋

元治二丑藏 一金一朱タ二百文

一鳥居立 一二百文

一金二朱

信心寄進之御方

慶応四年卯月吉辰

一石階石燈籠造立各々志

一八百文 応徳湯茂大郎

一四百文 応徳与五右衛門

一金一分 ヒカケ易者藤原佐内

一金一朱 引沼庄左衛門

一四百文 丁平孫兵衛

一金一分 見ヨリ元右衛門

一五百文 丁平茂右衛門

一七百文 タ十郎衛門

一二百文 タ金七

一金朱

一二百文 タ伊左衛門娘上

し

一金朱

幸左衛門

新兵衛

一金朱 小倉市郎

一金一分 ヨタテ安右衛門

一金一分 ヨタテ太郎右衛門

一金一分 草津伊野右衛門

一武百文 丁平茂左衛門妻

一武百文 于き

一五百文 当村

一五百文 市右衛門

一五百文 おはな

一五百文 由兵衛

一五百文

下間

同人妻

市右衛門

新兵衛

一百文 石ヅ 茂市郎
二百文 小倉 庄吉
一金一朱 引沼 善兵衛
一二百文 草津 金子屋
一金二朱 根広月洲寺
無学僧

記

一抑当江江幅奉致之志願ニ而上世立村開旁三
シ末代ニ御幅ヲ残ス諸人志し之 桁左之通り

龍顏世話人

三才圖會

同村
藤清甚平庄金五久
兵兵右衛三兵之
衛藏衛藏門郎衛丞

補足資料(八)

子守りうた

○ねんねんこもりはつらいもの

四三二

かあさんにや叱られ、子にやなかれ
三一七

三月三日の出がわりに

風呂敷づつ

とおさんお世話になりました（世立）

○ねんねんこもりはつらいもの

友だち子供しゅうにお馬鹿にされ

雨脚早いでも宿はなし

早く三月来るばよい

三月一日の朝がれり

またまた来年ねがいします

○れんれんごもりはどこへ行つた
他の山こえて里に行つた

お里のおみやげにもらつた

たたいてきかしようか、ねんねしな

二百四十文 庄三郎 五百文

元
藏

言語伝承

上野勇

六合村の言語伝承は、都丸氏の童唄の収穫を始めとし、他の部に於ても見るべきものが多いが、中にはその露頭を見出したに止まり、全貌は更に後日の採集を待つべきものもある。

方言の部は、〔1〕に引沼の山本茂平氏報のものを、〔2〕に「秋山紀行」中の入山の方言対照表を、〔3〕に採集のものを集録した。

方言の部に、さみじといわれている露のとうが、童唄の中には、ジャオー・ジャオージとなつて現われて来る。早藏の崩え出るのに春の喜びを見出した古人の思いは、露のとうを見出す子どもの小さい胸にも湧いて来て、童唄を口すさせるのである。

童唄の最初の「チュウバカンジヨー」の唄といい、いずれも山のさちと山の子どもとの深いつながりを示している。カンジヨーは都丸氏の説のように勧請であろう。見つかれといったって、おれには半かけも見つかりやしねえ、（しかしその半かけでも見つかれば、おれにとつてはもう充分といって）いくらいだ。発見の喜びをおさえている表現に思われるがどうだろうか。

童唄の豊富さに比べると、集まつて頂いた方にとっては、すでに遠い昔のことと、とっさには思ひ浮ばなかつたためか、誰はまことに少いが、少いながらもどれも郷土色を現わしている。

最初の謡は地名は省略したが、裸馬とくとくとすく思ひ浮ぶほど、馬が多かつたのだろうし、この土地までも、なぞとき坊主が徘徊したことと思わせたり、名産のお玉杓子を使うなどしている。

謡をかけられて解き得なかつた場合、降参してその謡を返上する場合

にも、一定の作法がある。それを「上げる」というのが、最も広い地域で行われている言い方であるといわれている。山梨県では、「あげ申す」といつてかぶとをぬぎ、栃木県では「上げてききましょ」という。越後の三面村では、「あげて聞きましょう」といつてきくというが、このあたりでは、「モンジアゲタ」「モンジアゲマス」という。モンジは判明しないが、新しい資料を加えたことになる。

昔話の部の中の引沼へは、最初今井氏が行き、次の日に上野が行き、山本さかさん（70）と、山本貞次郎さん（63）の兄弟から聞いた。兩人の採集を比べてみると、今井氏のは、「昔々あるそうで」と、一定の型で始まっているのに對して、後者の場合は不定であつたり、ままいいじめの話も「スカボゴとコメボコ」と聞かれる話し方であるのに、一方は「スカボゴとコメボコ」と聞きとれる話し方であるのは、聞き手の差も勿論であろうが、その時により、また相手により、話し方にも幾分の差がありはしないかと思い、どちらを取り、どちらを捨てるということをせず、両方とものせるることとした。

さかさんの話の中に出で来る、

そのうちに、とんぼり暗くなっちゃつたの。

それからこうして、向うの山を眺めると、火の明りがテコテコした

んです。

という時の語り方や、しぐさ、それに貞次郎さんが、

これは立派なへだ。もう一回引いてみるというと、キミゴイワイ、ゴヨノサカヅキ……

と、一段と声をはりあげるあたり、今も鮮かに印象に残っている。素朴な中にも、あたたかいうま味のある話し手であると感銘深い。

一、方言

1 入山の言葉(一)
(山本茂平氏報)

入山の山本茂平事から沂山の報告を受けている。いすれも立派な報告であるが、これは別に他日を期して印刷報告したいと思うが、こゝには方言、訛言等を翁の報告のまゝ記録しておく。(順序不同)

今井善一郎詩

ノホウモネイ	アコトモない	入山の言葉
ゴウガ	アコトモない	アコトモない
ゴタカラ	アコトモない	アコトモない
イシイ	アコトモない	アコトモない
ズディ	アコトモない	アコトモない
ダダ	アコトモない	アコトモない
アスキ	アコトモない	アコトモない
ミシ	アコトモない	アコトモない
コゲイタン	アコトモない	アコトモない
ナアロ	アコトモない	アコトモない
ズライミズレイ	アコトモない	アコトモない
ドウシン	アコトモない	アコトモない
ネバ	アコトモない	アコトモない
イズミ難	アコトモない	アコトモない
カルウト	アコトモない	アコトモない
ユビ	アコトモない	アコトモない
ケヤジ	アコトモない	アコトモない
大変	当事もない、大変	大變
エライ、大変	エライ、大變	大變
悪い	悪い	意
ドオセ	ドオセ	用
ですよ	ですよ	例
小豆	米がいい。腹がいい	ノホウもねい裏たものだ
沢山	それで、駄目でした	アコトモもなく負つて来たものだ
なさい	おらの方も祭で遊んでるだだ	ゴウガなことだ
……しにくい……	栗ミシ。アスキミシ	ゴタカラ女め
乞食	コゲイタン持つて行きナアロ	ゴタカラ女め
祐士	言いズライ	ノホウもねい裏たものだ
要児籠	コゲイタン持つて行きナアロ	アコトモもなく負つて来たものだ
木のヅブラ	言いズライ	アコトモもなく負つて来たものだ
山葡萄	言いズライ	アコトモもなく負つて来たものだ
早ク雪ラ酒スタメ煙	言いズライ	アコトモもなく負つて来たものだ
ヒ土ヲ(菊花ノ形ニ烟)	言いズライ	アコトモもなく負つて来たものだ
粒の小さいのは小ユビ	言いズライ	アコトモもなく負つて来たものだ

スゴウギ
ニスマレル
ヨウスモナイ

大變に
盗まれる
類もない

(現在使用しなくなつた言葉も右の中には多い)

2 入山の言葉(二)

入山の言葉	意味
御座れ	居ル、来るとも
ゲタ	オロシ
ソナタ	目下の女が云う
アヌエシ アトリシヨウ	縁の事
イブセイ ヨウジヨウ	縁の事
コナツチヨウ	アブナイ
ダボウ ウズメ	用心
カノ一	コナタ衆
ミボシイ	粗末に物をつかう
ボケ	女の子
焼きもち	鹿の事
	タノシミナ

スゴウキもなくたべた
入山の内一部落でつかう

には、たゞのものと云ふ。

う落の人々は発音が違

う！
お前
吾
なね
ら
中複
。ごて
全国方言辭典

皆様コレにゴザりました	は多い)
ヨウジョウして行つて下され	たもの
云を父を且 かか ア那と云、 さま と母	たもの 小麦粉、 ソバ粉をこねてうすくやい
人より物質、お いたましいと申。	子供のくねれんこう と申。かくねつこう
あ立たと氏。(父) 。とさ子(お つつ供のと (母)あんこう。 おんとろ。 へいは一 か世つ、一衛	今はつけわなない。 ごいたことかわん。 つおさん。 聞

秋山記行

（注）秋山では「はーえんさま」。

文獻
中吾

（二）入山の言葉「秋山記行」

う下の上上の内しょ内 との内申は、うと云申 を。中と云申を。 下しょ申を。 下しょ申を。	祖父のことをちつ さまと云。	人な慕の事もう云が。此 他
う上中の内しょ内 の内申は、うえしょ を。中と云申を。 下しょ申を。 下しょ申を。	じいさん、じっさま (世立)	立こんな あめし(世立)

（注）秋山では「じさ」

たぶ沢
く、山の事を
と云。 てで
いい

んと（世立）

（沢山）さんざ（吾）さだけねい・どうど
と・うまい・たま・さだけねい・どうど

大久保

20

〔つ（注の）あ〕一秋は
名全山へ國で中
の方は「言」
也辭げ
典に。・
に。・
二「げ
が」とに
一・
①さ

「こなたの郡①あなた(長)にいふ。
近畿②(自下)に言う辞③。○宮城県登米郡・福島
県大沼郡④。「こななちよ」四皆守
さまがた。群馬県吾妻郡⑤。
全国方言辞典に「ててわん
確・老岐」とある。飯茶

郡県 芦郡分神業大郡
「西城」・奈「分大」
と萬三・川宮「新・²」
原原重崎、島常
る。邑島。
郡都³・野「群子山」
・分大・愛馬「群子山」
頑群「知知浦」
國馬⁴、「知知浦」
縣強「長野多州」
塙佐「長野多州」
玉波「野設都」
都郡「野設都」
縣、荒北都山古
秩新「安・梨葉路」
父渴「養大」
くつ谷「至酒」と次親
つまつま「不云去乞」
と云「不」を
云「の祝」
野「小して」と云
果「にになてどんに拘
果を「し合に拘」

安せ全国
芸い。②方
（秋氣言辭典
長悪くに恐
・島根。広島。山

二二

(注)秋山では「地炉、じろ。地炉

の上座は、ていしゆざしき（亭主座）

八内郡・丈宮崎・石川県能美郡・福井県大野郡・鹿児島県

種子島・宮島

104

(お前) こなちょー (吾)。 (貴方)

の岡全人山國注。県方出上言秋葉房辭山一郡典て。には鳥根県姫川①郡あるた。こなさん西川②おまえさ

し。長野県上水内郡・新潟県越智郡

〔訪問の応答〕
（客）はーごめん、へーごめん。
「橋本田方吉賀典一」とある。そら
「玉県入間郡・長野
県上田」とある。

(主) はいらつせー(音)。

でい…デイ

さみじ…ジャオウ

みすばらし…ミボンシイ

てつき…テツビ

轟々…ハルカ。「ハルカダッタン」久しぶりだったね。

じこう…ゴゴ

ぼち…ボチ

3 その他

この地方では「アチャ、ムジ、ダンベ、ガニ、ゲーロ」を方言の代表としてあげている。例えば「アチャ、ソーカイ」「アチャ、ミセテミナ」「ソーダムシ」など、そして入山では「ムシ」を「モショ」というといい、「ソーダーン」という。「コントア」はあなたの意。「イタカーン」というのは「いたかい」という意「サツソクニ使う」とは簡単に使うの意である。（広池）

夫が妻の尻にしかれることをオクサンにザブトンしかれているといい、またネジツカワレティルとかベズキンかぶつていてもいる。こうした男をズキンカブリともいい、妻にツナヒカレるような男をイクジナシという。（広池）

トトクビ・トトツカビ…とくい毛。子どものオボゲをそりのこして

おく。

ヒヨーヒヨーマキ…つむじ

カワリツベ…乳歯。「鬼の歯より、おれの方が先に生えれ」と唱えて、ウワツベは縁の下に、シタツベは屋根へ投げる。

オボエナシ…気絶。かみなりが落ちて、子どもが、オボエナシになつた。ナナツキゴ…七ヶ月で生れた子。「ナナツキゴは投げても育つ。」ハナブクチ…黒いけばみたいなもの。胸乱に、火打ちがけと、ハナブ

クチを入れておいた。

アイマコーマ…眼。「葉煙草をアイマコーマに切つておく。

ショツカラ 普通の蚊より小さくて、痛くかじる。（生須）

ソソメ…わらびの根の外側、繩の代りにした。庭木をしばるのに使つた。

ナナツボーズ こもりさんでも、どこの神さんにでも、おがんしょをかけ、女の子でも坊主になる。

マーン…牛の鳴き声。

フラギ…獸の面の皮。

ドンガラサ…雷様。「ドンガラ、ドンガラ、ビヒン」と鳴る。

シブシブアメ…しづぼしづぼ降る雨。

ヒソード…かわいい。

ヘシ…やたらに。「ヘシにかける。」

ジシンゲール…がま。

マンバチゲール…がま。

トチマンゲール…がま。（京塚）

接 握

朝「お早うございました」

昼間「よい御天氣で」

夕方「おばんです」

夕方の訪問「こんばんは」（日影）

おはよう…ざんす…おひるまで。

午後は天候のことをいう。大体四時頃まで。

今日はあつくいいあんぱいだ。

今日はこまつたお天氣だ。

日没以後は。

おつかれです。

ばんになりやした。

ばんでがんす。

人の家からかえるときは、

さあ、ごつおになりました。

早くやすんでおくれ。

あいさつのことばは、女衆でも子供に對しても區別はない。

目上のものに對しては、ことばの終りに、むしをつける。

人が死んだときのあいさつ。

このおばあさんも長くかげんがわるくて、えらいお世話してくれたそ

うだが、ついおまちげえ（きのどく）でがんす。

これに對して家の人の答礼。

えれえお世話になつたが、今後はやみとれねえで、みんなに世話にな

るだが、おたのみ申しやんす。

むかしは、數え十五才をこせばあいさつをさせた。十五才をこせば、

一人前とされた。（小倉）

小倉のことば

「ハンドナシ」とぼけた、馬鹿なことをいうと、「ハンドナシ」いうなどい

う。でたらめいうなということ。

アテコトモネエ：くれるものたんとの場合にいう。

コロハテモネエ：加減もしないということ。（小倉）

グルワ：家屋敷、烟のめぐりをいう。

普通の蚊はビーピーとなく、細かい蚊はシーン、シーンと、足の長

い蚊はキーンとなく。

牛はメエー、男牛はモーとなく。

シビビ：山あずき

ソーマ：水すまし（下太子）

動物の啼声

馬：ヒイン

牛：モーン（仔牛も）

蚊：キーン

蜂：ブーン（引説）

一、命名（地形名）

山頂：ヤマノミネ、テツベノ、テンミネ

峰：トウゲ（人の通る一番高いところをいう。）

連嶺：オネツヅキ（人が通りなければ、こうは呼ばない。）

山腹：チユウダン（山のマンナカゴロともいう。）

傾斜面：ヒラ。

山腹の台地または山中の平坦地：大きいところはヒラというが、小さいところは別にいわない。

崖：ガケ

岩山：（どこどこ）イワという。

石がおちかさなつてあるところ：ゴーヤ

禿地：ハゲヤマ

岩穴：イワナ

日向：ヒナタ、ヒナタツカワ

日陰：ヒカゲ、ヒカゲツカワ

山に通する道の名称：ヤマミチ、（〇〇の）ヤマミチ、〇〇坂、〇〇

ヒラ。

山麓：コシネ

谷地…ヤチ、ヤチツタレ（じぶじぶしたところをいう。）

渓谷…タニ（流れのあるところをいう。）

湿地…ヤチツタレ

沼地…イケ

蘇苔地…ヤチ、水草のことをモーレンという。

草地…ハラ、クサツバラ

滝…タキ、ゼン

漁…カワセ

支流…エダツサワ、オマタ

合流点…オチアイ、オチエ

渡渉点…コイゼ（越す瀬のいみという。）

山中の砂石の多い湿地…イシヂ、スナジ

山中の乾燥地帯…ハツカララ（砂石の多いところをいう。）

高原…ハラ

なんにもつかえない土地…ソツビヤーラー

原野…木のないかぎりはハラという。木があればシバという。（林の

ことをシバという。）

山林地帯…ヤマ

砂砾地の呼称…イシツカワラ

天狗の遊び場…ガケのところで人間の通行もできず、木の生えていない、けわしいところをいう。

神の休み場…木の枝の先にこまくほや（玉になっている。）のよう

になっている枝のことを、十二様のこしかけという。

若木の多い山地…あのシバはワカツキバフカリでいいシバだという。

動物の生息する土地…岩山がつゞいているところが、動物のすむのに

都合がいいという。

小屋がけに適した地域…かざくば、日向に面したあつたかいところを

みたてる。方向は出入口が鬼門（北東）にむかないようにみたてる。
燒烟…今はやつてないが、ヤキマとことばがのこっている。
熊笹の山に火をつけてやきはらい。そのすぐあとは種子（あわ、ひえなど）をまいた。

共同の田…よりいのはたという。

共同でもつてることをヨリイといふ。

山中の境界線…むかしの人はうつぎを植えた。うつぎは大きくなら

ず、強い木であった。大体はうつぎを植えたが、石をならべたり、くぼ

をつくつたりした。（底く掘つた）

刈り草用の場所…採草地（以上小倉）

ホツバ、ウルイノ、ショウセンツカ、ホリグチ、カシワギツカ、ユサ

カ、コイテムコウ、ブナギ、ユタボ、ナカイ、大久保、ショケイノク

ボ、タケノクボ、ドウシヤミチ、トリガオネ、サケノクボ、ヨシハタ、

シモヤケ、一本木、ガンケイ山。（以上が湯久保の小地名、

ホツバは、ホツバ、ゴンベエ、あれっぽとよばれ、下がほうづきばた

けで、權兵衛という人がいた。（湯久保）

謎、

○「なんぞ、かけて遊ぼう」といつてかける。判らない時は、「モンジアゲタ」（日影）「モンジアゲマス」（引招）といふ。

○△△とかけて何ととく。裸馬ととく。そのところはくら（倉・鞍）が

ねえ。（日影）

○なんぞ坊主糞喰えとかけて何ととく。浅間のえーだち（夕立）ととく。

く。そのところは、にし（汝・西）がくれえ（喰え・暗え）（京塙）

○お玉杓子とかけて何ととく。佐倉宗五郎ととく。そのところは、我が

身を沈めて、下のみ（実・身）をすくう。（掬う・救う）（京極）

○白河原をちよろちよろ参つて、都へ行つて、物語りするものなに。
手紙。（引退）

四、諺・となえごと

○スゲガワ（山の名）からふつてくる雨は止まない。

○ハツコウ（カツコウドリ）がなければ種蒔け（これは春蒔きで、小豆、
大豆、栗、稗、キミ等の種蒔きの事）

○夕焼けは翌日晴天。朝やはその日降るか風が出る。

○朝蜘蛛福の神、夜ぐもマヌシトグモ。（引退）

アキヨガミジカイ：雷の早いこと。
アキヨガナガイ：霖がおそいこと。

天気の悪いときにトンビが輪を画くと雨が降る。（下太子）

まむしにかじられたときのとなえごと。
ちがやの山に昼寝して、ちがやの根しめられて、わらびの恩をわすれ
たか。

これは、かじられた人がやつてもよいが、沢田村のホンダウメキチさ
んの家でこのまじないをするといふ。

このことばの意味は、蛇が昼寝をしていたところが、ちがやの根が蛇
をしめて動けなくした、それをわらびが下からはいだして、ちがやの根
を切つてくれたので、蛇は助かつたといふのはなしにもとづいている。
(小倉)

民謡の方面においては、収穫がまことに少なかつたといふ。しかしそ
れは、後天的なもの——労働の激しさ、生活の厳しさといった——によ
つて、歌を忘
れたカナリヤ
となつてしま
つたものであ
ろう。天真爛
漫な子供たち
は、本来詩心
を持つて生れ
て来たもの
だ。それを放
擲する必要
が、何である
う。むしろ、
豊富に伝承さ
れている一地
域と呼んでよ
かる。

こゝに掲げたものは、六合村立南小学校六年生（担任湯浅秀夫先生）
入山小学校六年生（担任小校勇先生）同校品木分校児童（富岡今朝次先
生）の協力によって採集され、担任の先生・校長先生方、教育長湯本貞
司氏の教示を得て、私がまとめたものである。（都九十九一）



小雨の子供たち 撮影 藤義堆

五、童唄

【植物】

○きのこ チュウブカンジョウ チュウブカンジョウ メツカーレ オレニヤア

一つ半カケモ メツカアリヤシネー エーグレ、エーグレ（世立）

チュウウブカンビヨウ メツカーレ

オレゲン半カケデモ メツカリヤシネー

イイグレ、イイグレ（見寄）

チーボ チーボ メツカーレ

一つ半カケデモイカラ、メツカーレ（和光原）

チュウウブもチーボもきのこ、乳芽のこと。正しくはチュウウボといううら

しい。カンジョウは勘詠だろう。神仏を請じ迎えるといふ古いことはが

出てくるが、「きのこよ、出てこい。」程度に解したらよかろうか。こ

れに対応するようメツカーレといふ願望となって表われる。古いこと

ばがわからぬまゝにカンジョウになつたりする。イイグレ、イイグレは

何を意味するのであるか。

まことに歴史的表現であるが、わらべ唄は、このように、元来散文と

して面白され、それがくり返し唱えられるうちに、次第に固定して唄となつたものであろう。

○落のとう

ジャオウジゴンゲン 水ゴンゲン

今出ジャ 出一メ 夏ンナリヤ焼ヶ死ムゾ（日影・引沼・世立）

終りの句 春ンナツタラ出テコイ（赤岩）

霜ニヤケテ焼ヶシムゾ（根広・田代原）

落のとうをジャオウジゴンゲンということ、同じものを片品村古仲においてフウキモウジということと共に珍しいが、何から出でているか不明。東条操氏の『分類方言辞典』を検しても、類似のものすら見当らない。古仲では、フウキモウジ、カアモウジ、川ン中ノ水クメ、水ガナケリヤ、タメヲ汲メ、と頃っている。两者ともに水と関係があることは歌詞によつて明かだから、無縁に生れたものではない。とすれば、

今のところ、分布はこの二ヵ所以外には知られていない。とすれば、雪にとざされた山村の子供たちが、いち早く春に先がけて黒い土の中か

ら頭をもたげる落のとうに、こう呼びかける気持には、春を待つて切なるものがあるようである。

○えのころ草

エノコロ エノコロ チンボウ出セ

ニシガ出シヤ オレモ出ス（引沼・広池）

他の地区ではニシがオレになつてゐる。えのころ草の穂からチンボを連想して、ふざけて呼びかけているのだろう。

○あけび

ジジイババア寝テロ 嫁ハ起キテ機織レ（赤岩）

ジジイババア寝テロ 嫁ハ起キテ米ラツケ

ムコハ起キテ戸ラアケロ（品木）

ジイサンバサン寝テロ 嫁ハ起キテ餅ラツケ ベツタソコ ベツタ

ンコ（田代原）

あけびの花の形からの連想であろう。これをジジイババアと呼びかけるのは、各地の山村にある。

○竹のこ

竹ノコ 竹ノコ チヨイトノケロ（根広）

竹のこといつても、これはシノ竹。子供たちはこれをぬきとつて遊ぶ。これは、その抜きとる時に、たやすく抜きとれるようかる唄。

○ほおづき

根モ出口 種モ出口 向ウノ山ノ コロコロボウズ（赤岩）

ネロウ 出ロ 種モ出口 奥ノ奥ノ コンコンサマガ出タカネ（日影）

根はほおづきの中の種についている。コロコロボウズはほおづ

きのものであろう。実のはおづきの、中みを出して、皮だけ残す時に

唱える。

○麦 箕

コリヤ誰ノ麦ダ テントウサンノ麦ダ

オン（俺）ニ一本 クンナンシヨ

ビービット ナルヨウニ (日影)

オテントサン オテンントサン

コノ麦オクレ ソシテビートナーレ (広池)

子供たちの間に広

く行なわれている麦

笛をつくる時の唄。

子供たちがコン

ビラサン (世立) 七

ンタ (赤岩) となっ

ていたり、音が、ビ

ーントンサン (品

木) ビーンビーン

(引沼) となつてい

たり、若干の変化は

ある。誰もしない麦

煙から、たとえ黒穂

病の麦でも、黙つて

一本引き抜くことに

は気がひける。そこ

を「誰の麦だ」と問



品木の子供たち
井田安雄撮影

ササラは笛原。遠くに牛の姿が見え、その笛原の牛がモウツと叫ぶ。
そんなとき、子供たちは、こんな風にはやして、牛をからかう。

これが転化して、

ナキンベー コマ (駒) ンベー

ササー本 クレテ

ササヤブ ツナイダ

と唱える部落もある。

牛ノシヨベン 十八丁

コレモズイブン 長イナ

アア 長イナ (見寄)

牛ノクソ ベータベタ

馬ノクソ ベータベタ (引沼)

鳥 ヨタガラス

ニシノウチャ ドコダ

松ガ三本アル アスコダ

早クエッテ 水カケロ

オクモ シャークモ カサネーゾ (京塚)

鳥 ヨタガラス

ニシノウチャ ドコダ

松ガ三本アル アスコダ

早クエッテ 水カケロ

オクモ シャークモ カサネーゾ (京塚)

いかけ、オテントウサンから頂くところがおもしろい。

【動物】

○牛・馬

鳴キンペー 牛ンペー

牛ハドコヘ ツウナイダ

ササラヘ ツナイダ

何クレテ ツナイダ

ササクレテ ツナイダ (赤岩)

鳥 鳥 ウチハドコダ

三角山ノ峯ダ

オ前ノウチガ モエテルゾ

早ク行ツテ

水カケロ

シャアクモ

オゲモ 借サナイゾ (赤岩)

盆マデ許セ 盆マデ許セ (日影)
オ盆ガ来ルカラ許セ

○おけら

テツコ シャコ オ茶飲ミオイデ (広池)

テツコウ バツコウ オ茶飲ミオイデ (赤岩)

ふつうテツコハツコは蠍地獄。おけらといふのはまちがいであろう

か。

○蛙 ゲーロ ゲーロ

鳴カネージヤー 親トル子トル (世立)

ゲーロ ゲーロ

鳴カネキヤー 子ヲトルゾ (引沼・根広)

始めはやさしいよびかけ。次は飛んでいるとんびをはやしたもの。
○とんぼ
オオクマカエリ クマカエリ
三時ニナツカラ マタカエリ (広池)
シヨウガタカイ シヨウガタカイ (日影・広池・赤岩)
トンボ トンボ コノ指 トマレ (引沼)
各地に伝承。第二首は、他人がとんぼを捕える時、このようにはやし
て、邪魔する。他も、とんぼとり、あるいはとんぼをかまう時の唄。

○あ ぶ

第一首は県内各地で伝承されているものだ。それを、單なる呼びかけ
だけでなく、問い合わせて家を確かめて、火事を知らせるところに、この
地の唄の発展がある。火事は夕焼けであろう。
ニシ (お前) エッテ (行って) シャーク (病杓)などの方言が生きて
いるし、とくにシャークとオケは、曲げ物の产地らしい。
なお柄杓も種も借さないというの子供たちの意地悪でなしに、反
対表示なのである。それが証拠には、シャーガナキヤー カスゾ (日
影・赤岩) がある。

鳥 鳥 ウシロラムキヤ

鉄砲ブチガ ネラウゾ (根広)

各地に伝承されている。こんな風にはやして、とんで行く鳥の関心を
ひこうとする。

○とんび

トンビ トンビ 輪ラカキナ (日影)

トンダ トンダ トンビガトンダ (和光原)

始めはやさしいよびかけ。次は飛んでいるとんびをはやしたもの。

○とんぼ

オオクマカエリ クマカエリ

三時ニナツカラ マタカエリ (広池)

シヨウガタカイ シヨウガタカイ (日影・広池・赤岩)

トンボ トンボ コノ指 トマレ (引沼)

各地に伝承。第二首は、他人がとんぼを捕える時、このようにはやし
て、邪魔する。他も、とんぼとり、あるいはとんぼをかまう時の唄。

○あ ぶ

【天象】

○太 陽

オテントサン オテントサン

ショウジアケロ (日影・広池)

水泳などしている時、雲間に入った太陽に呼びかける。県下各地に広
く伝承されている。

○日向ぼっこ

オレーカゲニスルモノハ

正 正 正月ヤミダシテ

盆ニボツクリ死ヌヨウニ (根広)

人ノ影ニナルモノハ

正月少々ヤミダシテ
益ニボツクリ死ムヨウニ（村内各地）
冬、日向ぼっこをしている時、その邪魔をし、あるいは知らずに日影
にする者に対して面当てにはやす時の唄。

【歳時】

○正月

正月アタルクル オラアボロズルズル（赤岩）

オン正、正、正月ハ

松ヲ立テ、竹ヲ立テ

カザリノ下カラ 出タ島ハ

羽ガ十六、目ガハツ（赤岩）

県下各地に伝承。第二首は遊び唄に使用されたものであろう。

○鳥追い

鳥追イダ 鳥イダ

道陸神屋ノ 鳥追イダ

出一シャレ 出シャレ

稗ノ団子ハ イーヤダ

米ノ団子ヲ 出シャレ 出シャレ（品木—古態）

鳥追イダ 鳥追イダ

米ノ団子ヲ エレトクレ（品木—新態）

鳥イダ 鳥追イダ

道陸神ノ 鳥追イダ

カシラ切ツテ シリ切ツテ

サンドノンマ ホーイ ホイ（京塚）

鳥追い行事の行なわれている各地には、大同小異の唄がある。その中

で「道陸神屋の鳥追い」と言っているのは、太郎どんや次郎どんの鳥追

いと唱えているところの原流をなすことばとして注目される。稗はこの村の常食だったもの。これを焼がって、米を望んでいたところにも、この唄の地域性が出ている。なお、品木の古態の方は大人たちの記憶に残り、子供たちは新態を唄っているが、なお「米ノ団子ヲエレトクレ」と古態の重要な部分だけは忘れていない。

○道陸神

豊年ダ 満作ダ（和光原）

三百六十五日ノ 豊年ダ 豊年ダ（世立）

右二首は並べて続けられるものであろう。もつとも第二首の方は省かれて、第一首だけが唱えられるのが普通のようだ。燃えかかる道陸神の火に、興奮した子供たちは、この唄をもって盛んにはやしたのである。小正月は予祝行事でもあるので、この唄が生じたのであろう。

○盆

ジイサン バアサン

コノ火ノアカリデ ゴザレ ゴザレ

（ケーラツシエー ケーラツシエー）（世立）

オジイサン オバアサン

コノ火ノアカリデ

ササニトツカマツテ

オイデ オイデ（イガツンエー イガツンエー）（小倉）

入山では、部落ごとに共同で、盆の迎え火・送り火をする。その時の唄。

ジイサンバアサンはもちろん盆に迎えられる祖祖たち。「姫ニトツヅカマツテ」は、本来無かったものを後に入れたのであらうが、この土地の実感であろう。なお今の子供たちは、オイデオイデとか、キートクレキトクレなどと唱えている。

オラアノシリニモ 火ガツイタ（広池）

これも迎え火・送り火の時、はしゃいだ子供たちが、調子に乗って唱

えるのである。

○十日夜

十日夜 十日夜

朝メシ食フチャア シエダンゴ
ヨウメシ食フチャア シエダンゴ (見寄)

十日夜 十日夜

オーパー餅食フチャア 腹ダイコ
ボーン ポーレント ナルヨウニ

モウーツオマケニ サーベンヨ (引沼)

朝ソバカリニ 星ダンゴ タメシ食フチャハラダイコに統一されてい

る県下の十日夜の童唄の中には、第一首の神団子は、この地域の特
殊性を出しているし、第二首も、わら鉄砲を打つ子供たちのものとし
て、適切だ。

○ビッキ他

ビッキ クンナ

タンネージャー 通サネー 通サネー (世立・見寄)

ビッキは、婚礼行列が通る時、待ち伏せしていく強請する錢のこと。
これも他地方にはあまり見られなくなつた。

【習 慣】

○ゆびきり

デンジュウ マンジュウ シツキツタ (日影)

デンジュウ 錐、針千万 米千俵 (升) (広池・赤岩)

ユビキリ ゲンマン ウソツクナ (日影)

ユビキリ コキリ ウソユツタモノハ 針千本 釘千本ノマセルゾ (品木)

ユビキリ マンジュウ ウソユヤア 百円トルゾ (和光原)

ゆびきりの際の唄を各種並べてみた。デンジュウはうそを言うなという

はどの意味らしい。デンジュウとの語呂あわせにマンジュウが生れたの
であろうが、それがなお最終のもつとも新しい形式の中に、顔を出し
ているのがおもしろい。第四首の針千本、釘千本は各地にあるが、米千
本はあまり聞かない。

○比 較

ダイコク ドレトル
ワシナ コレトルヨ (品木)

ドレガイイカナ神様ノ言ウ通り (根広)

第二首の方が普通。ドレはドチラとなつたり、ドツチとなつたりす
る。神様は天神様といつてる部落もある。これが都市に近いところに行
くほどトナリノオバサンなどになるが、山間部では、神仏が多い。第一
首は始めてお目にかかる形式。

二者採一の場合、子供たちは、このように唱えながら、交互に指さし
してゆき、決める。

○別 れ

オミヤゲ三ツニ タコ三ツ
父サン 母サンニ ヤットタレ (広池)

さよならで済むところを、相手の背中などをたたきながら唱える。

【悪戯・徒事・邪擲・惡口】

トンビ トンビ 遠クテ見エナイネ (日影)

タカ タカ 高クテ見エナイネ (広池・赤岩)

タカノとかトンビノとか叫んでおいて、相手がふり仰ぐのを待つて、
からかう。

エタケリヤア エタチクソフ
三文買ツテ 三年ツケロ (品木)

相手を叩いたり、つねったりしたあとで、このようにからかう。

バカ カバ チンドンヤ

オ前モヤツバリ 大デベソ

ウチ中ソロツテ 大デベソ（広池・日影）

テブ デブ シャ（百）貫デブ

電車ニシカレテ ベツチヤンコ（各地）

右二首、広く言われる。新しく入って来たものであろう。

ニマ（今）泣イタノハ カン鳥

オ墓ノダンゴ 十タクツテ

ダマツタ ダマツタ（根広）

これは泣いてる児に、追いうちをかけてからかうのだ。次のようなものもある。

泣キ虫 コ虫 ハサンデ捨テロ（各地）

次は男女一しょに遊んでいる場合、よそからは次のようにはやす。

女の中マニ 男ガ一人

豆、ホウロク アブナイトコロ（各地）

部落相互の対立もあつたのだろう。次はその一つ。

矢倉三軒 モジナガ三四（引沼）

矢倉は事実三軒の部落。しかしこれだけではなかつたと思われる。

人の世界でも「和光原ショウ（衆）はダダーはよしゃあいダダー。」とも言つた。

豆、ホウロク アブナイトコロ（各地）

部落相互の対立もあつたのだろう。次はその一つ。

矢倉三軒 モジナガ三四（引沼）

矢倉は事実三軒の部落。しかしこれだけではなかつたと思われる。

人の世界でも「和光原ショウ（衆）はダダーはよしゃあいダダー。」とも言つた。

豆、ホウロク アブナイトコロ（各地）

部落相互の対立もあつたのだろう。次はその一つ。

矢倉三軒 モジナガ三四（引沼）

上道通ル オジョウサン（広池）

上方の道を通る子供たちが、下方の道を通る子供たちにはやす明。も

ちろん恩意はない。

次は単なることば遊び。相手の名を呼んで、ハイでも、ヘイでも、ウ

ンでも、返事をしようものなら、それに難くせつけることばが県下各地

にある。

秋チヤンタラ 返事ガネー

ユウベノ夜中ニ 締トツテ

障子ノ穴カラ ツツコンダ（広池）

○○サンタラ 返事ガナイ

ユウベノバンニ ムコトツテ

向ウノ山ヘ ニゲテツタ（赤岩）

また

シ（火）バシのヨウナ 子ヲ生ンデ

ゾノ子ガ死ンダラ 泣イタンベーヤ（赤岩）

相手が「知らねー」とでも言おうものなら、

シラン マラン ケツノドウラン（品木）

「勝手にしろ」とでも言えば

カツテニカーバレ 日向ノ野糞（品木）

「馬鹿」と言えば

バカヤロウノ ノロマハゲ（広池）

次は、内緒話を耳にした時は

イイコト聞イタ 十聞イタ

下道通ル ○○○○○○○○

消防署ガ トンデツテ
アツト言ウマニ 消シチヤツタ（品木）

次は悪くたれ

ベツチヨウ ベツチヨウ

コメケエ（米を食え）
ハガネーカラ クイエーネ

ツイダケスッテ オブチヤツタ（世立）

オツカサン オツカサン
錢オクレ 何スルノ

針金買ツテ 糸買ツテ
オツカサンノ ベツチヨウ

ツリ上ゲル（和光原）

【遊び唄】

まりつき、羽子板、なわとびその他の遊戯に伴なう唄は非常に多いはずである。しかし、こゝには、今回採集できた素朴なもののみ掲げてみる。

○鬼ごっこ

鬼ゴッコスルモノハ コノユビトマレ（根広）
鬼ガ来ルマデ センタクデモ ゴシゴシ（見寄）

○にらめっこ

達磨サン 達磨サン

ニラメッコ シマショ

笑エバスカス アップアップ（世立）

○おしくらまんじゅう

オシクラマンジュウ オサレテ泣クナ（日影）

○竹の子

竹ノ子一本壳ツトクレ
マダトシャワケーブ

竹ノ子二本壳ツトクレ
マダトシャワケーブ

竹ノ子三本壳ツトクレ
モウイイヨ

ワツシヨイ ワツシヨイ（田代原）

類似の遊びが『音楽遊び』（ボブラ社刊）に出ているが、歌詞にちがいがある。第二、四句が同書では「まだめが出ないよ。」、また「壳ツトクレ」が「おくれ」、「モウイイヨ」が、「もうめが出たよ。」となつてゐるから、たとえ、他所からの伝播であるとしても、この方が古い形を保つてゐるよう見受けられる。

遊びは、一人（一）が太い木につかまり、そのつかまつた一に数人（二、三、四……）が胴体にだきついて、二以下が第一、三、五句を歌う。一は、第二、四、六を歌う。第六句が終ると、二以下は後へ引っぱる。一の手が離れたところで終り、一の交代となる。

月カイ ヤミカイ 石塔カイ

月…………

ヤミ…………

板倉町では、「ひるか、夜か、電線か。」と歌っていた。数人の子どもたちの人あて遊び。一人が鬼になり、目かくし。他の子がこう歌つて、ヤミならゆつくり動き、石塔ならじと動かず立つてゐる。月は忘れた。それを鬼がとらえて、その者と交替する。

○かごめ

カゴメ カゴメ

夜中ノバンニ

鶴ト鬼ト スペツタ
ウシロノショウベン ダーレ（田代原）

○坊さん坊さん

坊サン 坊サン ドコイクノ
ワタン タンボヘイネカリニ
ワタンモタンボヘイネカリニ
ワタンモーションニフレテツテ

オ前ガイケバ ジャニナル
コノカソカソ坊主 クソ坊主
ウシロノショウベン ダーレ（和光原）

○後の猫

アートノネーコハ プチネコダ（世立）

数人が猫になり一列に並ぶ。その前に猫の買ひ手が立って、この唄を歌う。歌い終ると猫は思い思いの声でニャーーンとなく。このなき声によつて、気に入つたものを、買ひ手は買って、交代する。

【数え唄】

一年ガエモ掘ツテ 二年ガ煮テ食ツテ

三年ガ酒呑ンデ 四年ガヨツバラツテ

五年ガゴボウ掘ツテ 六年ガ牢屋ニ入レラレタ（根広）

一デ一郎ガ嫁トツテ

二デ二階ヘツレテツテ

三デサツサト戸 ランメテ

四デシツカリ抱キシメテ

五デゴロリトネコロンド

六ツムクムタヤリダシテ

七ツナカナカヌケナイデ
八ツヤツバリヌケナイデ
九ツコドモニミツカツテ
十デトウトウ子ガデキタ（引沼・京塚）

【子守唄】

子守リハラクナヨウデ ツライモノ
雨風フイテモ ヤドハナジ
人ノ軒バデ 日ヲクラス
オカミサンニヤ シカラレ

子ニヤナカレ
ダンナサンニヤ 横目デニラマレル
早ク三月 タレバヨイ

三月一日ハ デカワリデ
フロシキズツミニ 下駄ソエテ

茶ワンニオマメデ ハシアベヨ
ボヤモナカズニ ヨク遊ベ（根広）

貧困な山間のこの地域の人々は、幼時からよく懲かされた。その最初は子守り。家の弟妹を見るだけでなく、中之条長野原方面にも子守りとして出された。この唄は、よそにやられた唄だ。老人たちが多く伝承しているのは、かつて子守りとして他出した証拠であるといえるだろう。

歌詞の前段は、他地方にも伝承されているが、後半にこの地方の特色が見られる。デカワリは、年季奉公人の切り替え日で、継続奉公人であつても、一旦帰宅できるのである。私物を風呂敷に包み、シキセにもらつた下駄を持って、主家から奉公始めに借し与えられた茶碗や箸にまでさよならして、自分の家に帰れるデカワリの日を、待ちこれがながら、泣く子を子守っている子守りの境界の、限りない哀愁がただよつていて

唄といえる。

ネン ネン

ネコノケツイ ガニガハイコンデ
オ母サンガ タマゲテ オ茶カケタ

熱カロ カヤカロ カキ出シテヤロ (赤岩)

【補 足】

○春らんの実を掌の上に乗せて

ジジババーネてろ

嫁は起きて米をつけ

婿は起きて市へ行け

○麦笛の歌

大麦 小麦

これは誰の麦だ
ジンベーサンの妻だ

よくなる妻だ
ビーピーとなれ なれ
ビンタボ わかれ

○おきなぐさ

チゴ チゴ わかれ
二つにわかれ

ビンタボ わかれ

○お正月

ショウサンがくるくる
おらーぼろづーるずる
○鬼じっこ

おにこっこするもの
おにこっこするもの

「てつこはっこ おちやのみおいで」と繰返しながら振る。

○子守歌

こもりっこは樂のようでつらいもの

人には樂だと思われて

雨風吹いても宿はない

ひとのぬきば(軒端)でひをくらす

○ひとつうた

ねんねんねるこは ほんのこ

おきてなくのは ロシヤのこ

ねんねんねてけつへガニがはいりこんだ。

おつかさんがたまげて おんだした。(下太子)

童戯・童謡

まりつきうた(中心部に縄を入れ周囲を糸で巻いたマリをつく)

おんさかさかさかさかやれどん

よつやれどん

あすはあかさかこうじまち

さらさらおちるは お茶の水

お茶の水の真中で

十七八なる姫さんが
でんしゃに乗ろうとまごついて

シーヤフ ミーヤフ
イツムナナヤコノトオ

トオから下(くだ)ったおいもやさん
おいもは一俵いくらだね

三百三十三匁

いまちとまければ

おちやらかポイ

そんなにまければそんがたつ

おまえのことならまけてやる

ありやうれしい こりやうれしい

となりのおばさん お茶のみおいで

となりのおじさん お茶のみおいで

そこで一かんかしました

あんたがたどこさ

ひじさ くまもとさ

くまもとどこさ せんばさ

せんばやまにも 猿がおつてさ

それを猿師が鉄砲で打つてさ

煮てさ やいてさ くつてさ

それを木の葉でちょいと

はつかぶし

アヤトリ（昔はアヤダマといったた）

（紐によるアヤトリはアジトリ）

（いう）

一ぱんはじめの一の宮

二また日光中禅寺

三また佐倉の宗五郎

四は信濃の善光寺

五つはいつもの大やしろ

六つは村の鎮守様

七つは成田の不動様
八つは八幡の八幡様

九つこうやの弘法様

十でとうきゅうしんがんじ（広池）

○子守うた

ねんねんこもりはつらいもの

雨風吹いても宿はなく

人の軒場で日を暮らす

おかみさんにやおこられ、子にやなけれ

早く三月くればよい

三月一日の出がわりで

風呂敷づゝみに 下駄そえて

茶わんおまめで 箸あばよ

坊やもおまめに よくそだて

小倉の山口みちさん（品木の生まれで、おばあさんからよきいた

という。）

○子守うた

ねすねんこもりはつらいもの

人ののきばやかどにたつ

おやにやしかられ 子にやなけれ

二月二日の朝はんたべて

ちゃわんまめでろ はしあばよ（品木）

六、昔 話

ママツ子いじめ

昔々、あるところで、ヌカボコとコメボコという二人の娘があつた。

と。米ボクは今のおつかさんの子だけど、スカボクは死んだお母さんの子で繼つ子でした。お母さんが二人に米の種拾いにやりました。一人し出かけたけれどもスカボクには底なし籠、自分の子には底あり籠をもたせてやりました。米ボクが沢山拾つて暗くなるから帰るうと云つたけどスカボクはまだ少しもたまらないから、帰ると怒られるからといって一人で拾つていました。

暗くなつて山を見たら灯の明りが見えるので、そこをたずねて上つてゆくと一軒家に婆が一人いました。とめてくれといふ、ととめたいたけれどこゝは鬼の家で、二郎と太郎という鬼が来ると食べられてしまうから泊められないといふました。無理に泊めて貰うことにして、それではオレの尻へ入つてねといふました。そこへ一人の鬼が帰つて来て、人間の匂ひがする／＼といふので、婆さんが、それはオレのお尻の匂ひだといって無理に臥かしてしまいました。

明日の朝になつて鬼が二人出かけていたので、その留守に御飯を食べさせてかえしてくれました。その時おめは気の毒だから宝物をやると、いって言めこぶくろをもらいました。暇つづけて帰る途中鬼にあつたのでコブクロをかぶつて臥ると馬の草鞋キレになつて見つからずにする。そこで袋をたゝんで家へかえりました。

翌日、お母さんが米ボクをよんで今日は芝居見に行かねかといつて連れてゆき、糠ボクには初うんと出して一日カラ強をつけといつけて出かけました。糠ボクは泣き／＼ついたがつけない。そこで糠ボクは小袋にたのんで男を一人手伝に出してもらつたら、十七八の息子が出て来て手伝つてくれた。糸に水を一寸いれるよく早くつけた。それから二人して麦もついて干してしまつた。そこで芝居見にゆくべとして今度は十二單衣の小袖を出してもらい、大乗掛の白駒も出してもらって、若い衆に馬方させて芝居に行くと、見物人はみんな芝居見ないで立派な娘が来たといつて糠ボクばかり見ついて芝居にならないほどでした。そこで米ボクや母さんの帰らぬ中に家へ帰つてキタナイ着物きていると、そこ

へ母子が帰つて来て芝居で立派な娘を見た話をしました。
その中にお嫁の貰い手が次から次と来るのだがいつも米ボクを見せる
と皆やめて帰つてしまふので、母親はヤケになつて米ボクを臼に入れて
ついてしまつたという事です。

ソレデオワリです。(引招)

ぬかぼこ・こめぼこ

昔ね、ある所にね、あのままでね、ぬかぼことこめぼこという娘が一人あつたそうです。それでね、あのう、おかあさんのいうに、きょうはあんたがたは、米を拾いに行って来うといつてね、それから自分の子供のこめぼこには、新しい籠をあげて、ぬかぼこの方は、ちいさくの下のないのをあすけて、二人をやつてね、それから田んぼに着いて、一生懸命拾つたけれども、ぬかぼこの方は籠に下がないですか、ちつともいっぽいにならない。こめぼこの方は、いっぽいになつて、それからうちへもう夕方になるから、うちに帰らないから、こうにうちに帰るには、あのぬかぼこのいには、おかあさんにおこられる、ちつともお米がないから、帰れないから、お前先に出かけてくれつて、それから先に行くからね、あとからおいでつて、それから出かけたんです。いくら拾つてもいっぽいにならない。そのうちとんぼり暗くなつちやつたの。それからこうして、向うの山を眺めると、火の明りがチコチコしたんです。そんでそこへ尋ねて行こうと思って、けわしい山を登つて、その行つたら、小さい小屋があつたて、そしてその小屋へ行つたら、おばあさんが一人いて、おばあさん泊めて下さい、暗くなつて困るからなんて、泊めてあげたいけれども、ここには鬼が一人来るんだから、次郎太郎という鬼が来るんだから、お前がいれば、食べてしまわれるから、泊めることは出来ないから、どうしても泊めて貰いたいって泣くの。それからおおおばあさん、それじやまあ、わしおばあさんのお尻の下にでも入つて、それからなお、おばあさんのお尻の下に入れて、

寝かして、そうすると、鬼が一人帰ってきて、今夜はどうしても、人の間においが、人間のにおいがするから、人間がいたじゃないかと、おばあさんに尋ねたけれども、なにお、こんな所に来るものだ。早くにお夕飯食べて寝なさい、あの、どうしてもどうも寝ない。人のか、においがするから寝ないっていうので、おばあさんがようやくまあ、しりつめて寝かして、そして朝は早くに二人の鬼たちは出かけて、はしっていった。

お前にこの守護に早くお前は御食を貰へて帰らんかさうて、そのぬかはこにいってね、それから馬は、氣の毒な娘であるから、一生じゅうない宝の袋があるんだにあげるから、それから室をあがめ、一生じゅうあの、道へ帰る途中鬼がいるから、いきあつただら、時にはこの袋をかぶつて、道にころがると、そうすると、のがれるから、命をのがれるから帰れって、それからその袋をだんだん来るといきあうから、それをかぶつてねえ、そこへころんだらにかつぎしきがころぶぢやないかって、それから袋をぬいで帰つて、うちへ帰つて来たら、うちではそのこめぼこのいのうに、ぬかぼこきょうは、芝居があるから、お芝居店を見に行かないかって、難母が出て来て、お芝居なんかとんでもない話をだ。お前は米の穂一つも拾つて来ないから、搗かなくちやんないけれど、唐臼を一生懸命搗きなさい。妻をいっぽい出しておいて、こめぼこのあちゃんはいつちやつて、それから妻をいっぽい搗いてみたら、いくら抜いてみても抜けないから、そのつく唐臼の上に、おつかかって、こう泣いたらね、涙のかかった粒はつけた。水を入れて搗くもんらしいと、それから水を入れて、ひとりで搗いたけれど、この妻はどうしても一人では抜けないから、おばあさんにいい袋を貰つて来て、なんでも出るところおつしやったから、じゃそれを使つてみよう、それを十七八の男出ろつていつて、叫いたら、立派な息子が出てね、息子と二人で、一生懸命麦を搗いて、それから庭いっぱい乾して、あたしもこれじゃ芝居屋で、十二單衣の小袖出ろつて叫いたら、立派な小袖が出て、馬に乗つて

行こうと思つて、大乗りかけの白馬出るって、はいたら、立派な馬が出て、それから馬に乗つて、十二単衣の小袖を着てね、そしてその男に馬方をさせて、そしてあとから行つたらね、芝屋を見るものはみんな娘を、いい娘が来た、いい娘が来たってね、みんな娘の方へ向いて、それからうちへ帰つて来て、着物を着かえていたら、こめぼこが帰つて来て、ぬかぼこ今日行きやよかった。まず立派な娘が、立派な仕度をして、いい馬に乗つて、いい息子に馬方させて、お芝居なんか誰も見ない。みんなその娘をながめていたって、そうして、そうかい、わしゃ麦を抜くだから、行かなかつたって、したらみんなそれを知つてえて、ぬかぼこさんを縁に下さいつて、大変みんな来る。それでこめぼこをくれたという人は一人もない。おつかさんは、ぬかぼこなんか、なんにもならないから、こめぼこつれてつ下さいて頼んでも、こめぼこはいらないって、誰も連れてつてくれない。貰う人がないから、お前のような人は貰う人がないのだから、臼の上でものつかりなさいつて、引き臼の上にのせて、ゴンゴン、ゴンゴンひいちやつて、それでおしまいです。けれど、ぬかぼこさんはね、それでね、りっぱなとこへ行つてね、立派な亭主を持つて、しやわせに暮したと、こういうわけなんですけれど。

引言

猿
ム
コ
(山本サカ氏70才)

昔々あるところで、

お爺さんが山で煙をうなつて、いた。余り煙が広いので、誰かうなつてくれよば、娘が三人あるから一人やるがなあと云つたら、猿が出て来て、たちまちふんでしまつた。爺さんは家へ帰つて、困つて物も食べずにお寝していると、姉娘が爺さん何をふさいでる。お茶でも飲んでくれつんでお茶をもつて來た。お爺さんは今日山の煙で猿に娘をくれる約束をしてお話をしたら、姉娘はおれは猿のオカタはいやだといつてしまつた。お爺さんは仕方なく又寝ていると次の娘がお爺さん何をふさいでる。お

茶でも上んなさい。といってお茶をもって来たので又お爺さんは猿へ娘をやる約束した事を話したら、次の娘も猿のお方はやだといつてきかない。お爺さんが困って寝ていると末の娘が又お茶をもって来たので、山の猿の約束を話したら、そんなら仕方ね、おれが嫁にいってやるべといつて末の娘が猿の娘へお嫁さんになって行つた。

その中に明日が三月節句という日になつて嫁御が、明日はお節句だからお爺さん處へ餅ついて行きましょうというので、猿が餅をついたと。そして餅を丸めてもつてゆこうとしたら嫁御がいうのに家のおじいさんは餅を立曰から離すとたべないといふ。そこで猿は重い臼ごと餅を背負つて出かけたと。そうすると途中に桜の花が一ぱい咲いてるので、嫁が猿に一枝お祖父さんにお土産にとつて下さいといつたと。猿が木へ登らうとして臼を下ろそうとする、娘が、お爺さんは臼を下ろすと餅を食べないといふので、仕方なく臼背負つたまゝ桜の木へ上つた。としたら娘が今少し上へ登るとまだゝ花があるといつてう／＼一番先の枝の先迄猿に木登りさせてしまったので、猿は立曰と一緒にころげ落ちて川へ流れて死んでしまつたと。

そこで娘は家へ帰りましたとき。
ソレデオワリデス。（引説）

さるむこ

昔ある所に娘が三人と、おじいさんとおばあさんが住んでいた。そいつたまね、おじいさんは、大きな畠のとこ、畠うないに行つたんだ。そしたら、この畠は、まあどうしても、いくらふんでも終らない。困ると思つて、おじいさんは、そこに休んでいたんですね。そうしたまね、娘がちょうどそこへ来て、おじいさんがいうに、猿この畠をふんでくれると娘三人持つたから、あんたに、お嫁にどれでもやるからつたんですね。そしたら、わけはないつてわけでね、ついでふんでしまつたんです、たちまちにね。そしたら、おじいさんは困るから、あしたの朝もら

いに来るから、困るからうちに来て寝てたんです。そしたら猿があしたの朝ね、立派な着物を着かせて、おじいさん約束の通りに来るから、おじいさんは困つて、そこに寝てたんですね。そしたら一番大きい娘が来たんですね。おじいさんどんが悪いが知らないが、起きてお湯でも御飯でもおがりなさいって、そしたら、どこでも痛くも、食べたくもなければ、そのあの畠うないに行つたら、猿この畠をふんでくれると、娘三人持つたから、どれでもあげるつたから、お前はいつたい、お前はやらななかつて、こういうわけです。私はお猿さんのおかたになるのはいやだつて、逃げつちやつたですね。それからこんどは、真中の娘が来たの、おじいさんどんが悪いの、湯でも茶でもあがつて下さつてね、そしたらどこでも悪い所はないけれども、畠うないに行つたら、猿畠をふんでくれると、娘三人持つたから、娘をどれでもあげるつて、それからお前はいつてくれないか、わたしは猿のおかたになるのはいやなことって、その人も逃げちゃつて、小さい妹が来て、おじいさんどんが悪いの起きて、湯でもお茶でもあがつて下さつて、どこでも悪いことはないけれど、畠うないに行つたら、娘が来たから、猿どんこの畠をふんでくれると、娘三人持つたから、どれでもやるといつたら、お前行つてくれないかつていうと、わしがそんなことわけはない。喜んで行くから起きてなんでも食べなさい。おじいさん喜んで起きて、御飯を食べたり、お茶のんだりして、それで、それからお約束の通り、お猿が所へそいや黄いに来たから下さつて、小さい娘がお猿の所へ行くんであります。そうして行つたら、ちょうど三月の節供になり、おじいさんの所へお餅揚いで、しょつていくがことになり、これから切つてのして、しょいましょうといつたらね、その娘がいうに、おじいさんは、切つてのしたのなんか食べない。立曰の中から、やらなきや食べない。じゃ立曰ごとしょつていこうと、猿が立曰ごとしょつて出かけたんですね。それから、いいかげん来ると、岩からこうえらい大きな瀧が下に川が大きく流れている所に、こう桜の花が咲いていたんですね。娘がいうのに、おら

がおじいさんは、桜の花がうんと好きだけれど、わけはないから、立白をおろしておいて、それをとりましようつて、おろせば土がたかるって食べない、じゃしゃって登りましよう、しゃって桜の木に登つて、こちらの枝がいいだらうて猿が、さあ娘は下にいてね、もう少し上ならい枝ぶりのがあるけれどね、いますこし登つて下さって、よしなんていつて、その立白しようつたごと、細い所へ行つたもんだから、下へ立白ごと源の中へ、パンナバシヤバシヤン落ちやつたんです。その留守に娘はうち帰つて来て、おじいさんの孝行だけはしたけれど、猿はまあかわいそうだけね、それなんです。（引退）

へっぴりじじ

やつぱり畠うないに行つて、ふんでさ、疲れたから、えんがだね、えんがをおつ立て、おじいさんが休んでた。ともて立派な鳥が来て、えんがの棒の上についたんで、おもしろいので、おじいさんが、ちょうどお茶づけに、きびのぼたもちをしゃつてた。ぼたもちのきなこのところを取つて、ねばるところだけ取つて、きれいな鳥のところげえぶつける。そうすると、その鳥が羽がねばつて、下へぼとぼと落ちて来る。それでおもしろいかつて、拾いあげて、ぼたもちだけ、こうなめて取ろう思つたら、口の中へ、その鳥が、ブツと入つてはつた。こりゃ大変だと、おじいさんがいるうちに、へそのぐるりが、ムズムズとして来た。こりやまあ変だと思つて、もう一回引いてみたら、やつぱしさつきのよう足を出したん。はあこりやこから引き抜いてやろうと思って、足をちよつと引いてみたら、腹の中で鳥が鳴き出した。キミノゴイワイ、ゴヨノサカヅキ、オチャビンチャ、ブーフ、その鳥が鳴いた。こりやまあおもしれえと思つて、もう一回引いてみたら、やつぱしさつきのようことをいう。そいでまあ困るような、嬉しいような、おじいさんは、畠うないをやめて、うちへ帰つて来た。おばあさん、そのことを、まあ話したら、そいじやまあ、あのおじいさんが、へっぴりじじに行つ

て金もうけしたほうがいいじやないか。それでそのあしたは、着物を着がえて、あのよその方へ、へっぴりじじいに杖をついて出かけた。

やあ、へっぴりじじいがまいった、へっぴりじじいがまいったと、あるつてるうちに、向うから立派な人が來た。おもしれえじじいだ、そりだら、それえ、へをひつてみないか、はいはいって、いいながら、そこへ座布団をひいたら、どっこいしゃつて、そこへ坐つて、あのふところへ、腹の中へ手を入れて、やつぱし鳥の足を引いた。そしたら、キミノゴイワイ、ゴヨノサカヅキ、オチャビンチャ、ブーフと、これは立派なへだ、もう一回ひつてみろ、キミノゴイワイ、ゴヨノサカヅキ、オチャビンチャ、ブーフ。まあ立派なへをひるおじいだ。金を持って帰れ、あの褒美は望み次第やるから、それで沢山の金貰つて、うちへ帰つて来て、錢を入れる箱へ、おじいさんが、チャラチャラソント入れたおれも、隣のおじいさんが聞きつけ、うちじゃ何金もうけした、チャラチャラして、別のことじやねえが、へっぴりじじいに、ばかりに昨日行って、あのう立派な方が来て、そのへをひつたら、金を貰つて来て、今錢箱に入れたことだよ。したら隣のおじいさんよーし、そりだらあしたおれもへっぴりじじいに行つて、金もうけして来る。うちへ帰つて、おばあさん、へっぴりあかざを、いっぽい煮させて、それを食うの食うの、腹がほんほんになるほどにさせて、そしてよその方へ、へっぴりじじいがまいったぞ、へっぴりじじいがまいったって、こりやまた昨日の

おじいかな、おもしろいおじいが来た、へをひらしてみろつて、立派な方が、へっぴりあかざを、いっぽい煮させて、それじやひつてみろつて、はいはいって、それじや布団を三枚位ひいて貰わなきやひれないって、悪いおじいさんは、布団を三枚ばかりの布団をしかせて、その上に、どっこいしゃつと、泥足でずりあがつて、ウンウンといながら、うんといきばつたれば、まずうんときたないものをひり出した。それで、向うからいきあつた紳士の方が、怒つたの恐らないのじやない。このおじい、布団をよごしたばかりで、大変なことじやねえ、そんなへつちがあるか、へじやね

え、そりやくそじやねえか、たたかれ、顔だの体だの血だらけになつてうちへ帰つた。うちじやおばあさんが、おじいさんが赤い着物を着て帰つて来たつて、喜んで、ぼろを着ていたのを、みんな炬にくべていた

ら、そうじやねえ、おじいさんは、血だらまつかになつて帰つて来て、悪いおじいさんはそういうめにあつたという話。それでおわり。（引説）

瓜姫

昔々あるそで、

お婆さんは川へ洗濯にいったと。そうすると川上から大きな瓜が流れ来て、家で山へ柴刈りに行つたお爺さんとわけてたべようと、その瓜を綿へくるんで二日三日たつ迄しまつておいた。お爺さんが來たので、割つたらば、中から立派な娘が生れた。瓜の中から生れた瓜姫という名をつけた。

ホドの裏の先に玉になつてゐるのを掘つて来て皮を自分でたべ、中身を瓜姫にたべさせて育てたらん／＼大きくなつて、よく機を織るようになつた。或時お婆さんが家を留守にするのでアマンジャクが来るから戸を締めてあけるなといつて出かけた。そしたらアマンジャクが来て戸を開けてくれといつたがあけなかつた。それで指の入るだけあけてくれといふので、あけたら、今度は腕の入るだけあけてくれといふので、あけたら入つて来て瓜姫を裸にして、自分でその着物をきて、姫は袖の木へ逆さにしばりつけておいた。

その中に今で云えば天子サマの役人が瓜姫をみせてくれとお駕籠をもつて迎えに來た。それにアマンジャクをのせてやつた処、袖の木の瓜姫が、瓜姫の乗る駕籠にアマンジャクが乗つてると云つたので、わかつてしまい、アマンジャクを裸にして引き歩いたら、草や茅を血で赤くした。今でも神様に上の茅の赤い匂はあげない。（引説）

ママツコの袋

昔々ある所に実子とママツコとあつた。いじわるなオッカだからママツコには底のない袋をやり、実子には底のちゃんとした袋を渡して山へ棄捨しにやつた。ママツコはいくら拾つてもいっぱいにならない。とうとう暗くなつたので山の奥へはいつて行くと、向こうの方に明かりが見える。行つて見たら年寄りのばあさんがいた。ママツコが訳を話した

ら、打ち出の小づちというコソコソとたたけば何でも思うものが出来る宝物をくれて、決して人に見せぢやいけないと言われた。

そのあした、家に帰つたら、近所に芝居見に行くことになつた。オッカは実子を連れて行つたが、ママツコは着て行く着物がないので、小づちを取り出してコソソとたいたいたら着物が出て来た。またたいたらおかごが出た。それで芝居を見に行つて、人よりも早く帰つてきて、小づちをコソコソとたたくと着物もおかごも見えなくなつた。ふだんの着物を着ていたらそこへオッカが帰つて來た。そして「きょうは芝居もよかつたが、りっぱなお姫様が通つて來た。そのお姫様はお前によく似ていたからお前も大切にしなけりやいけない」といつて、それからはママツコを大切にしたという。

今でも破けた袋のことをママツコの袋といふ。（和光原）

食わぬ女房

昔々あるそで、

ある男が、食う物もくわざ、着物もきない綱御がほしいもんだといつた。そしたら一人の女が押しがけ女房に来て、俺はめもくわねし、着物もきないと、いうので女房にした。男は始めは喜んで安氣にして、いたが、その中だん／＼おかしいと思うようになつて、或る日外へ出たぶりをしてのぞいたら、女房は土蔵をあけて小指を俵にひつかけて米を持出し釜で飲いてどん／＼食つてしまつた。男は驚いて、知らぬ顔して

家に帰り、娘を追出す事にした。そしたら女房は離縁するなら、いゝから立白をくれるという。立白をくれたら頭の上のせてくれといふ

で、手を貸して白を持ち上げたら、嬢を白の上へのせたまゝ女はどん

＼とんでゆく。

嬢は驚いて川の縁の処で横から出た木につかまつてや

つと逃げた。女は人間をつかまえたといつて白を下ろしたら何も見えぬ。

そこで女が、あしたの晩は蜘蛛になつて、さらつて来るというのを嬢は聞いてしまつた。そこで翌日は仲間をたのんで待伏していたら、蜘蛛が籐竹を伝わつて下りて來た。そこで仲間が大急ぎで籐竹を切つておとしたので蜘蛛はいろいろの火の中へ落ちて焼死んでしまつたと。これで終ります。

(引沼)

しようぶ湯

むかし、欲の深い男があつて、飯を食わない女がいたら、嫁にもらいたいと、つねく言つていた。ある日、どこからともなく、きれいな女がやってきて、「オレは飯を食わないから嫁にしてくれ。」といふ。そこで嫁にした。なるほど飯を食わずに、よく働いた。しかし米の減りようはひどかったので、不思議に思つた男は、そつと家に帰つて、様子をうかがつてみると、女は、大がまで炊いて食つてゐた。しかも驚いたことに、頭が二つにバッタリ割れて、そこから食つていたのだ。びっくりした男が、あわてて逃げだすと、それに気づいた女は、「見付かってしまつた以上は、生かしておけない。」と、追いかけてきた。男は逃げ場に困つて、よもぎとしようぶのヤチににげこんだ。それ等の臭にまぎれて男は命拾いをしたのである。

それ以後五月節供には、よもぎで屋根をふき、しようぶ湯に入る所以ある。(品木)

しようぶとよもぎ

ジャティサンが、若者に化けて、娘をはらませた。それがわかつて、シヨウブの根とよもぎとせんじてのめば、くだることを知つたので、娘はアラシタ。アラスというのは、子を下ろすこと。(世立)

はととぎす

兄弟一人のはととぎすがあった。兄はめくらだったので、弟が食べさしていた。ある日食物がなくなつたので、弟は長いものをほつてきて、自分はアオズばかり食べて、良いところは兄に食べさせていた。にもかかわらず兄は、「自分でばかりよいところを食つて、おれには悪いところばかり食わせる。」といふので、それでは、おれののどを切つてみろと言つた。兄は弟ののどを切りさしてみると、アオズばかりであった。それからほととぎすは、オトートコイシイ ホツチヨ ノドツツキッタとなくようになつた。(世立)

七、伝 説

沼尾の池

沼尾にはでっかい池があつて、覚えていた頃でも三畝ぐらいはあつた。この池の主は大蛇だったが、ある時沼尾の池にみきりをつけて、引沼に引つ越して行つた。その時に大蛇がハナン坂の所をハナをつけつき登つたといふ。(小雨)

引沼の沼神

引沼の学校のある所には、以前カネの手の形におつかないほど大きい池があつた(八十年前)。この池はある家を普請した時にタテジ(建て前)の晩のカニを煮がつたら、翌朝起きてみると池になつてゐたと伝えられる。ここに沼神社という明神様が祭つてある。神主は草津

の常光院？という人だったが、沼神社の別当をしていて、大きな杉の木があつたのを売ってしまった。そこでその息子が十才ばかりのころ、毒石をふんで死んだ時にはバチが当つたといわれた。

～一～ 池

昔、山本氏の娘が山へワラビ取りに行って、池を見つけて水を飲もうとしたら池に沈んでしまった。山本氏の先祖が池の主のしわざを怒つて天皇様のものだからといって掘り始めた。そしたら娘が池の中から姿を表わして、池の主にみこまれて自分がこの池の主になつたのだから許してもらいたいことわりに来た。その時娘の頭にはもう一寸ほどの角が生えていたという。それ以後山本氏は一年に二回お祭りして、オタキダテした赤飯を供えるが、すうつと波が来て上げた物を引いて行くという。

(小雨)

大師様のはなし

赤岩の湯本氏の先祖が馬で行つた時、馬の尻っぽをカツバが押えた。刀でその手を切つたら、カツバが命乞いをして許してくれたお礼にメイホウサンという薬の作り方を教えた。また切られた手とホウシの玉といふ宝と取りかえつこした。この薬は山のトテッキョウという黄花の咲く植物とアマナ・ヨメナ、それに蛇の骨を焼いた粉を混ぜて作り、ねつ打ち身にはるとよくきく。

宵の山本、あけの山本

世立に宵の山本、あけの山本という家がある。前者は正月をするが後者はしない。昔敗戦で逃れて来た時の習からそうなつた。

根広の熊野神社の由来

あるとき山伏が鏡（玉ともいう）をもつてこの部落を通りかかつた。ある人がはだけへ出て、えんがでおこしていた。子供が山伏のもつてゐた鏡（玉）をほしいといつたらし。そしたら、そのおやじは山伏が行くあとからえんがをもつてついて行つたという。そこで、山伏を殺してその鏡（玉）をとつて、そうして子供にくれたそうだ。それがいく年もたつうちに、その家のへたつてきて、それで子供にとつてくれたものを御神体にして、熊野さんになつたということである。

根広には、今でも山伏（やんぶし）という地名がある。殺された山伏は、熊野さんの山伏ではなかつたらし。が、それを熊野大明神としてまつたという。

こここの熊野神社は、今でも、のどのいたむ病気にいいといふ。

これは、山伏が殺されたとき、のどをやられたためといふ。（根広）

(小雨)

大師様には沢山子供がいた（人数ははつきりせず）。十一月二十三日の晩に、沢山いる子供を養うのに困つて、田圃から稲穂をぬすんできて、手でもんで小豆をいれておかゆにて、ならべておいた子供に向いて、箸には別に名称はないが、それをとつておいて、節分の晩に三角におひ立てやしなつてくわせたという。稲穂をぬすんだときの足あとをかくするためにこの晩雪が降るといふ。

(小倉)

箸には別に名称はないが、それをとつておいて、節分の晩に三角におひ立てやしなつてくわせたという。稲穂をぬすんだときの足あとをかくためにこの晩雪が降るといふ。

りまげて、ほうろく豆をいるときにかきまわすのにつかう。そのあと、豆を紙にくるんでそれにその箸をしばりつけて自在かぎのところにしばりつけおいた。その豆を食えば、風邪をひいたときになおるといつた。

後

編

社 芸 建
会 調
査 能 築



品木の赤坂神社
かつて旅に出た村人が勧請したものという。

井 田 安 雄 摄 影

六合村の民家

—山村のしきたりを考えて—

矢島 肥

解説

1 ヤシキ

六合村の民家を調べるには、ヤシキのことを無視することができない。他地方も同じであるが、ここでは特にヤシキ造成の手段もなく自然のままの地形に忍従しなければならない。山は深く谷は峻だ。山村といえども耕地も必要である。みなヤシキにするわけにいかない。一ぱん広いと思われる学校敷地さえも猫額大である。一般の民家は可能のギリギリの線に抑えられる。ここから建物をほみださせれば隣ヤシキだ。隣家を避けると断崖である。否や応なしである。

ヤシキにスマイや附属舎を建てるには、障礙が多すぎる。適地は現在の聚落のところが最もよかつたに相違ない。それで集村の形にいつかまとった。道路は谷に面した絶壁の間をウネウネと曲折して集村を結ぶ。隣りの村へ行くにはこんなところを通り。

ヤシキは道路ばたに石垣を築き、隣りのヤシキへは坂道を上下する。だからヤシキは一般に不規則形で狭い。ここに造る家は間口も奥行きを必要なだけにとりにくい。それで二、三階、中二階と上に伸びる。そうしなければ養蚕にもまにあわない。村へ入って、接するにはカブト屋根の中二階、二階建である。

2 スマイのマドリ

新規のスマイの中、住宅とよばれるようなものを別として、農家ふうのスマイは、ほとんどやや広いヤシキ（チャノマとも）とダイドコロを中心とする。ヒロイ室があるからヒロマ型とよぶが、ヒロマ型ではヤシキが一、三室でも、四室以上でも「田」の字形にならずに中央の十字のところで横割が一文字にならない。タイチガイになる。

タイチガイのヒロマ型のスマイは県内の北部から西部に広い地域でひろがっている。このひろがりは県境を越えて、長野、新潟、福島諸県から更に北にまでつながる。

3 民家のヤネ型

県内では草葺ヤネの中に、オオヒラの軒から凹字形に鉄を入れたように切落したのがあり、この切落し部分がオオギヒラの側面にまでも達するカブトをかぶせたようになる。オオヒラのカブトがあり、側面のオオギヒラを切落したカブトもある。これをカブトヤネ、カブト造りなどといふ。県内にひろく散在するが、その比率は少い。それが六合村では少し多いようである。

また切落しの部分に小ヤネをあげた突きあげヤネも県内に少数ながら散在するが六合村にもある。

この屋根の切落しの二つの方法は、埼玉、東京、神奈川、山梨諸県に

も分布する。

石置きの板、杉皮ぶきの家は少くない。いまは、石置きはほとんどなくなつたようであるが、板ぶきか杉皮ぶきの家は、以前に石を載せたと思われる。利根、吾妻、碓氷、甘美、多野の山合いにたくさんあった。今も多く残つているのは多野郡の西部地区である。

4 ヒラダなど

ヒラダといふのがあった。雪の深い地方で道路に面して雪の季節に往来に便利なガング・コミセなどがあるが、ヒラダもこれに類するかと思う。タデグリミといつてスマイの屋根の下にクラ・ドゾウを建てこんだのがあるが、長野県や東北地方の一部に行われるようであるが、本村にも例がある。

またウダツゴヤといふのがあった。山の村であるから、畠や山仕事に出かけて、収納や肥料置場に、場合によつては寝とまりする出づくりの小屋などの類が、あるいはその習慣の名残りとしてあるのだろうか。これらはわたくしの見聞では今まで県内で接しなかつたもので、大へん貴重な資料となつた。

建物用のことば
建物のことばを表わす言葉は、一般にわかりにくいというお叱りを頂くことだが、外にいよいよもないし、六合村の場合には力めて村のコトバに従つつもりでかいた。

セエゲエはセガイであるがセエゲエに従つたりシンシ葉はシンシにした。ヒラダ・コウリヨウのような特殊のものも呼びかかるわけにもいかない。よみ仮名を漢字と並べてかくのがよいとも思ったがカナだけにしたコトバ、または漢字だけで読みガナを省いた例も多いが、煩を避けたため諒恕されたい。またモノは分るがコトバの由来の知れない点が大部分にあつた。不勉強の至りで汗顏にたえない。また適格な説明を求めることができないので想像に属することを幾つか述べた。なるべく思いつ

きだけでなく、他の地方での意味解釈を一応の背景として述べたつもりである。当らないところは軽口のような気持で受けとつて頂きたい。

一、ヤネ

1 ヤネの葺き材料

葦、麦藁、ヤネ板、杉皮などが普通の葺き材料である。瓦やトタンなどが多い。

谷が深く峰は高いが、むかしは草刈場もあつたろうし、葦の入手は割合にラクであったと思われるが、葦葺とその後の藁葺は、いまそれほど多くない。これに比べると板葺が多く杉皮葺も行われている。材料の入手は、葦と同様大へんラクなためであろう。それにヤネ押えに石を載せた石置キヤネが、前々から行われたことで、板ヤネ、杉皮ヤネがわりあり多くなつたのも知れない。小雨地区で話してくれた人も、「はじめは葦葺であったが、その後に石ヤネになった」と言つてゐるし、西上州の谷沿の村々が石置キヤネ地帯をなしていいる間に、そう考えられる。谷にはヤネ石に恰好な石も多いから、割板や杉皮の入手の便宣とともに葦に代つていつたのであろう。それ故に、ヤネ勾配は緩く石を現在載せていないが、石置きであつたことをみせたのが多いことになる。ヤネに石が残っているのはゲヤ、突き上げヤネ、土蔵の覆いヤネ、雜舍などで、母家ではまったく見られなくなつてゐる。

板ヤネの割板はクリ材が多いようである。長平部落でみた割板はクリ材、長さ9.7~10.5寸で巾は2.5寸ほど、厚みは1.5寸ほどの小片であった。長さの半分ほども葺き代にして、軒から漸次上方へ葺きあげていた。葦の場合は新規のものは少くて、古いやねばかり、また藁葺きの葺下に葦を置き上に藁を葺くというのも見られた。麻ガラも葦地に使われたが原料が得られないとも言つてゐた。また葦の代りに谷地のヨシを用うるとも

言っている。

広池部落山本今朝信氏宅のヤネは墓下に麻ガラを使ったようで、この例は、各部落にもあろうと思われる。

2 ヤネの外形

板葺、杉皮葺のヤネは、切妻造りである。これはヤネ葺きの技術から当然の形である。四注や入母屋の隣棟の棟線の処置のために切妻として棟で押えるように、たやすく隣棟を作ることの困難によるものであろう。



土蔵を母屋の屋根下にとりこんだ家（小雨）

今井 善一郎 撮影

これに比べると草葺とした場合は、處理がずっと自由で技術面の制約が少しから、四注造りも入母屋造りも、またウダツ小屋のように切妻造りも可能になる。

草葺ヤネでは破風に煙抜きの千鳥形開口部を持つているのが比較的に多い。この破風がそやにまで延びることによって四注造りは入母屋造りになる。界内の西部北部地域は入母屋

の二つのヤネ型は、六合村ではヤネのオオヒラ、またはオオヒラの部分を切落した形にしたカブトヤネになつてカブトを冠したように見えるのが多くカブトヤネ、カブト造りなどという。オオヒラの表で側を落したカブトヤネ、オオヒラの片方または双方を落したカブトヤネの三つの場合があり、ヤネの形はなかなかニギヤカである。広池部落に入ると、このようなカブトヤネの家が点々と眺められる。前記山本今朝信氏宅のヤネはオオヒラを落した形のカブトヤネである。この形のは、県下の平坦地域の各所に普通見どころで散見する地域は広い。片妻落し、オオヒラと片妻落し、両妻落しとともに分布地は広い。ただ、広池所見のようによくオオヒラの片妻、または両妻を落したものは、分布が散点的であり各所に見られない。

なお、六合村に少数例であるが、オオヒラの突きあげ小ヤネを見たが、往時の北国道の故かと考えられて興味が深い。ドゾウのヤネは、これも県下の西北部と同じように覆いヤネを架けたもので、覆いの程度が進むと小雨高原茂文氏方や生須市川龟寿氏方のようにタテグリミ（ヤネグルミ）に通じることになる。（第1図1～3）

3 グシの立ち草

草ブキヤネのグシ（棟）の処理の一つとして、テリブリに丈夫な草の根を置いて棟の棟線を保護する仕方が古くからあった。いまは里村の多くの所で棟に草を生じたのは、見たくも見られないが、六合村を含む吾妻郡地方では、まだこの処理習慣が残っている。わたくしの少年時までは各地方で棟に疾いたチハツの鮮かな色が見られたし、その水々しい花や葉の追憶にさわやかな感触がある。

これは草ではないが、棟の端をハコムネとしたり、棟を包んだ葺き草

1



2



3



第一図

1. 高原茂文氏方のタテグルミ、右手ハシゴのかげに
ドゾウ入口（小雨）
 2. その側面、左側に入口が見える
 3. その戸前詳細
- 註 この建物の全景は前頁今井氏の写真参照

の切口をそろえて四注造りの場合でも禁忌と裝飾をかねた「水」字を黒白で表わしたのもある。長平で本多春長氏宅を道から眺めていると「水」がいきなり目にとびこんで来た。

4 ムネカザリ

草葺ヤネの棟の両端の納まりは、里村と同じように合掌板を当て、その三角形の背脚をたいらに切り落して「水」の字を入れることは既に述べた。合掌板には脚元に近く、襷掛に似た断面方形の小片を一本づつ対に出したのが各所に見られた。

グシ抑えとして荷輪破風を、奇数組載せているのも見られた。この材は断面方形、上部は合掌部から先端を少し出して貫木ふうにし、これの三脚の背脚をたいらに切り落して「水」の字を入れることは既に述べた。合掌板には脚元に近く、襷掛に似た断面方形の小片を一本づつ対に出したのが各所に見られた。

木の竹などて上から抑えている。棟の竹は二本か三本で、これには本数のきまりはないようである。荷輪破風の合掌の下から両端の棟木ハナが出る。棟木ハナは上端に縄をつけ、下バの巾をせばめて、断面を七の高い五角形に作ることも、里村で一般に見る形である。切口は下バ内がわにコロビをつけたのも里村と同様である。

棟木ハナの上にカラス留りをつけることは、この地ではほとんど行われていない。

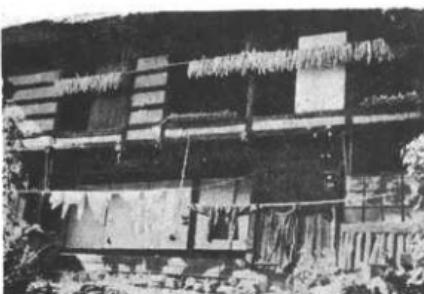
二、軒まわり

は断面方形、上部は合掌部から先端を少し出して貫木ふうにし、これ

軒先に出架また出桁構造のセガイが村内各地区に広く行われている。村ではこの軒まわりのセガイ（出し桁）をセエゲエといい、二階の窓下に出した出桁と板を張つて小エンのようにした手すりをニケイダイ、三階のを三ゲエダイと呼ぶ。

県内でセエゲエは各地に設けられているが、セエゲイという名称が本来の呼名で呼ばれることは、群馬・北群馬など榛名山周辺などで二階ダイというよりも源流に近い名称だと言える。平家建てには見えないようであるが、カブトヤネの中二階、二階建、三階建の多くにニケエダイ、セエゲエが行われる。ドイゲタ（土居桁）を承けた柱ヅラ（面）から、ロク（陸）渠のハナ（端・鼻）としてか、両柄差しとして、外方へ二尺前後に出した桁の先

1



2



第2図

1. 市川亀寿氏のセエゲエ（生羽）
2. 同氏タテグルミの表て
3. 市川廣次氏のセエゲエ（小雨）
4. 同

3



4



端にチカラ桁か持送りを置いて、竹タルキ（サス竹）を纏むすびで止める。出し桁は柱マ（間）に応じて出し、その中間にも出して、ストラクの建物では間隔が真々3尺、京マ（本間）では真々3.1-2.2尺となる。二ゲエダイ、三ゲエダイの出し桁もこれに準じて作られる。（第2図1-2-4）

セエゲエと二二三ゲエダイ手スリは、オオヒラの表てがわに出す。オオギヒラの側面の片方または双方に出して、カネテ（炬手）になつてゐる三方セガイな

ど、家の規模、家の格などで各種がそれぞれ行われている。赤岩部落の関節司氏方の母屋は三階建で二方セガイ、二方二ヶエダイの構架で、村で屈指の建物である。一般にセガイ造りについては、江戸時代の禁令によってか、あるいは禁令はないが、「百姓身分に応じて家作」することを神妙に守つて、また遠慮していた。セガイについて累下での禁例資料に接しないが、

には不似合の義一（正徳二年新庄藩）

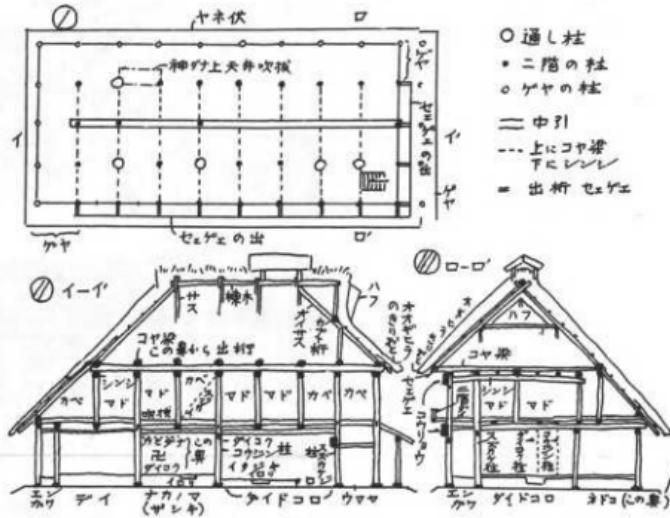
など東北地方の例もあるから、県下にもし禁令文書が遺存されていると、もっと由来が的確になろう。

セエゲエ工を構えると、軒の出が深くなり、ヤネもセエゲエの出だけ抜がるので、見た眼に堂々とうつり、家の格によつては、むしろ面はゆい事でもあつたろう。

セエゲイ、二・三セエ・ゲエによって軒が深くなることは家作の誇示など感傷的な面だけでなく、直射の日ざしを避けたり、二・三階のニカ（床）面と同じ平面にして、床面を広く使用できるという直接利益につながるものもある。

六合村、広くは吾妻郡民家にセガイが顯著な分布をみせるのは、山村の地形からヤシキ構えの制約を余儀なくされるので、建物を同一坪にとつても利用面積を増そうとする希求によるものであろう。また禁令が明治維新後に、とれて自由に造作が行わると、急激にセガイ造りがふえた。安政開港によって、糸・タネ(蚕種)輸出急増に応じてこの地の養蚕も盛行するに至って、二・三階が作られ、コヤ二階が行われ、セガイも三層にするに至る。しかし、毛糸の輸入増加による影響で、毛糸の生産が減る傾向にある。

第三回 山本重義氏宅の二階コヤ組下の柱梁の配置



二、コヤ組

草葺ヤネのコヤ（小屋）構造はサス組とする。合掌の交叉部に棟を載せて繩むすびとする。

引沼部落の山本重義氏方ではコヤ架でサス（投首）を承け、合掌部はアイガキ（合歎）をしている。これにナカ（屋中）竹をわたし、竹タリキ（サス竹）を架けている。繩をからげてしつかり縛る。ヤネはオオヒラとダイドコロ側のオオギヒラを切り落してカブトヤネとしている。この切り落し部分の一方の軒にセニゲエを出している。第3図1-3コヤの中はコヤ架からのモヤ（母屋）東だけで簡素な構架となっている。二階ヨカの陸架からの柱はみなコヤ架下のナカビキ（牛梁）などの桁行の梁の下までになっている。これら柱の上端にシンシン（シンシン架）を梁間向けに通して固めている。壁付と中の柱間にスジカイが一ヶ所通してある。

二階は村一般にシキリをしないで、柱の間を吹放しとしているが、この山本家の場合も同じである。

四、軸部構架

ダイドコロの柱が軸部の中でも最も重要な地位を占めている。ダイコク柱は7寸のものも多いが中には小雨の市川久義氏方のようにイロリがわの正面20寸、側面14寸、巾1寸の面取りというスバラシイのもあり、規格はないが、太いダイコク柱が家の格を示すように思われる。ウチウマヤが普通にドマの壁のがわに設けられているが、村ではトボウに近い柱をスズカケ柱といい、スズカケ柱の列が、ダイドコロとの境になつて

いる。スズカケ柱はダイコク柱について太くみごとな材を用いている。本家の表てがわの柱は、スズカケ柱と直列側に建ち、ユカ（床）上ではザシキとエンガワの構になつていて。裏側はゲヤの部分がネドコロになっているのが多く、表てのヒロマと裏がわのネドコロ構のコウジン柱の列が母家の軸部の裏手になつていて。

二階建の場合にはスズカケ柱、ダイコク柱、列のエンガワ構の柱、マエデノディのスミ柱などが一階に通じて立ちあがり、二階コヤ架に達している。ダイコク柱列にはその側面にダイコクニラミがあつて、これにもダイコク柱に匹敵するほどの柱を用いたものもある。

梁と桁はどこかの農家でも大きな木口の材をつかうが、六合村でもやはりその習慣がある。前記の市川久義氏方のダイコク柱から、ウマヤ柱列に渡した繁ぎ梁は、断面矩形であるがそのセイは一尺何寸、実測できなかつたがダイコク柱と釣合った太さ、またウマヤ柱列に渡したマヤピタは、これまた2尺ほどのセイで、重量感のみでなく、たくましさを感じる。ちょうど城建築で天守閣の構架の中へもはいったような感じである。

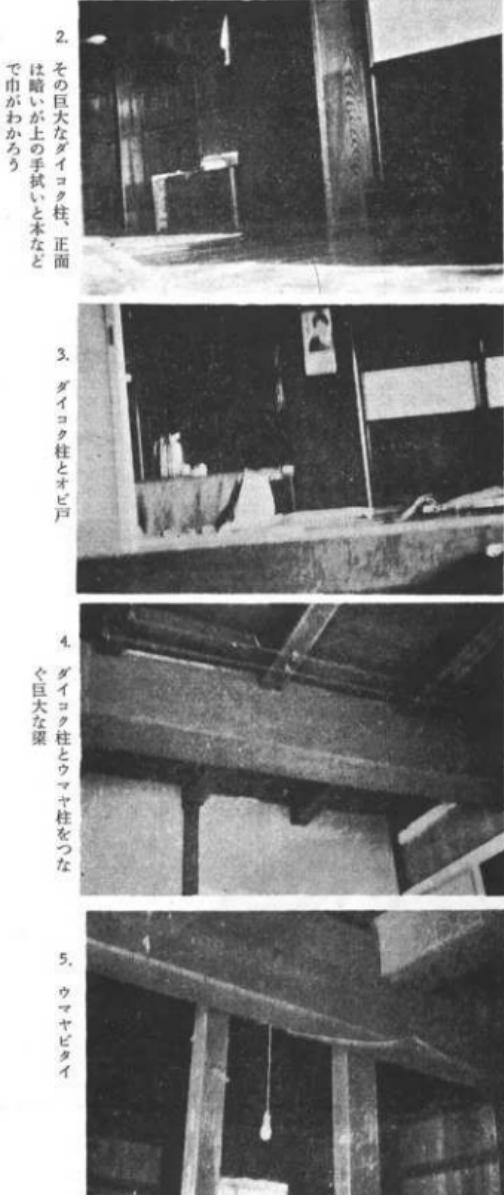
（第4図1-5）

六合村だけなのか否かわからないが多分吾妻郡西部を中心として、コウリヨウをセニゲエの出桁根もとを承



第4図

1. 市川久義氏居宅（小雨）



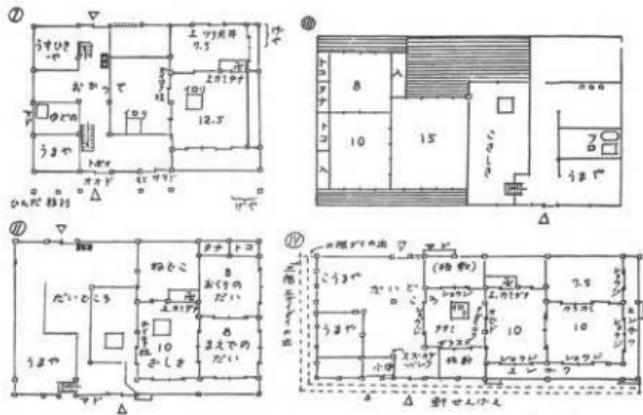
けるために架している。一階エンガワ柱の上部、二・三階の二カイダイ柱の上部に渡したもので、これにも巨材が用意される。小雨の市川久義氏方の二カイダイの下のコウリヨウの如きは長さ11ケン(間)3尺、杉の通し材である。末口でも寸ほどのセイ、この巨材は草津道がわの山から引いたが、小雨村中のオテンマで、木ヤリの音頭に合せて引いたといふ。この家ではナカビキ(牛糞)も桁行一ぱいの一本という。コウリヨウは二階セエゲエの下がウツ(上)コウリヨウ、二階ダイ出し桁下が下コウリヨウである。(第2図3・4)

コヤ組の下にシンシを渡すことは、前節に記したが、シンシとコヤ梁

が一階の柱の上部梁間を固め、二階のドイ桁で桁行間を繋ぎ、さらにウワコウリヨウで壁付の外がわを結んでいる。一階も同じように、梁間(奥行き)と桁行(間口方向)を固めエンガワ柱でコウリヨウが柱列を一とまとめて繋ぐ。ダイドコロからウチウマヤの部分はさらに、二重の梁術で縦横を結びあわせる。

これらの水平・垂直材の交点は、その材の木口を差しとし、鼻を込栓止めとする。木組の様式は古いところは折置組、多くは京呂組となつてゐる。またスズカケなどウマヤ柱の列が石場建であることは他地方の農家建築と同じである。

シンシはシンシ梁の略で土地ことばである。家の規模に従って壁付を加えて五本、またそれ以上のところがある。根広部落の黒岩喜久藏氏方は5本、引沼部落の山本重義氏方は東がわ壁付を入れて8本であった。



第5図 1. 山本今朝信氏宅(広池)
2. 同所継原民作氏宅
3. 同所山本久一氏宅「崩」による
4. 関節司氏宅(赤岩)

コウリヨウは多分虹梁なのかも知れないが、虹梁とは様式もその用途もまったく別である。おそらく虹梁ウツバリのように寺社建築に用うる高貴なものを居宅に用うるという優越を感じて使いはじめたのかも知れない。ナカビキのように長い桁行を一本で繋ぎ固めることは家を非常に堅固にしたようだ。山本重義氏方スジカイを入れたのは耐震的な方法をとにかく行った例で村の先覚的方法である。

五、マドリ

二・三室マドリ

六合村でのマドリの古い形は二・三室マドリの家に遺っている。広池部落の山本今朝信氏の宅は二室の例である。(第5図1) オカツテの板敷が二室にマジキリしてあるが、常居のザンキは12帖半で、そこにイロドリを切り、神ダナ・仮壇があり、ダイドコロにダイコク柱の列がある。シキリができる。ダイドコロはトボウのオオドカラ入ると寄付にイロドリがあり、ドマの部分が矩手に奥向けて通っている。ウチウマヤがあり、改造のユドノがあり、その奥後ろにウスヒキヤがある。コヤ二階への上り口が二ヶ所ある。板敷はもともとシキリがなかったのに、後補でシキリだけつけたものであろう。12帖半と7帖半の二室は、板敷から敷居だけ高くなつて、古い頃からユカを張ったところであることを示している。神ダナ・仮壇は表に向けてある。室数は他とちがうが、この村でみた家々としての室の配置のしかた、ダイドコロのシキリかた、種々の点で原型的要素が多いと思われる。

この家は表のオオヒラを切り落としたカブトヤホ、それに表てに出し桁を受けたヒラダという柱の列がある。

同じ広池山本久一氏宅は雑誌「崩」の所載図によると(第5図3)コ

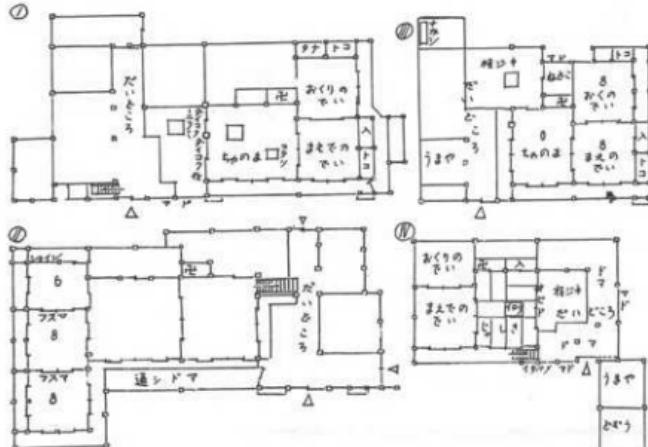
ザシキというイロリの場所があるが、前に記した山本今朝信氏宅とカツチテの位置が右と左どちらがうだけ同じ形が見られる。ユカ(床)上の10・8帖を取り去れば、これも今朝信氏方と同じ形である。15帖といふ広い室の後ろがわが板敷で8帖の広さになつてゐる。この同じ形に、デイの二室を加えると四室ふうの三室マジキリとなる。または中の15帖的部分だけを去つて、10・8帖とすれば、なおよく重合する。家の傾向として、同じ路線上にあるわけである。

長平部落の山崎喜應治氏宅（第7図2）は四室にシリとしている。板ジキとドマ・ウマヤなどを合せてオカッテとなつてゐる。板ジキとドマの部分が最も本原的なスマイの場であつて、ザシキから奥の室は後補なのはなかろうか。板ジキだけでは居間に不自由なところから、ザシキなどを繋ぎ足したとも見られる。それにエンガワが始まらなかつたのが、伝承がないらしいが、木口の古ななどから江戸時代の中期より降らぬもので、六合村としても最も古様の建物の一つである。ザシキは12帖半の京マなのであるが柱マ（間）は大変自由な扱いをしている。ディの後ろ奥への口が、仮壇前から引戸で通じるかこの柱真々割寸と変テコな寸法である。その柱は巾うすでこの家の規模では少し太めである。室内は12帖半の京マである。天井は張つてなくて、化粧やネ裏となつてゐる。

生須の市川龟寿氏宅（第6図4）も三室マドリとみられる。2ケン（間）半ほどのダイドコロを柱間4ケンに区切って、その中の1ケンをトボグチとする。奥丁をケノのヒニラを柱間2ケンで「コ」の字形にこど

第6回

市川久新氏宅（小雨）
市川昭次郎氏宅一下の茶屋（生須
同所黒岩輝雄氏宅
市川龜寿氏宅



建物が古様であること。

ザシキというダイドコロ隣りの室が15・12・10帖及び12帖半の広さがあつて、このためにネドコロの室がとつてないこと。

デイの広さがザシキよりもせまいこと。

このためにマジキリ方が、「田」の字形とならないで桁行がわのシキリが3尺ほど奥いちがつて「一」の字形になつていいこと。

などが、一目すぐわかる。この場合、比較的の言い方としてヒロマと呼ぶことにする。ヒロマを有つマドリを一般にヒロマ型マドリと称する。ネドコロがないのは民家発達上古い形である。

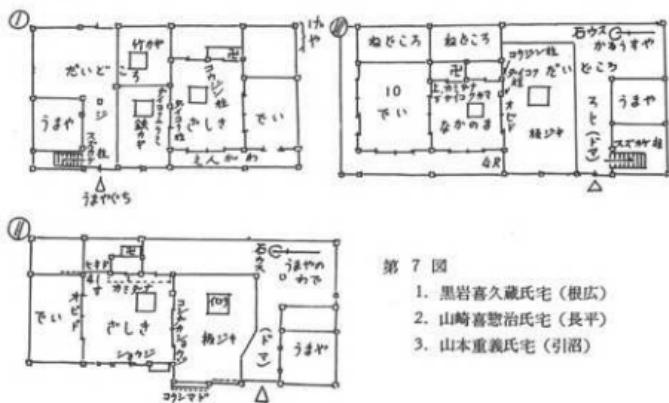
六合村において所見の古い建物のスマイはヒロマ型が行われただろうと思われる。

(二) 四室マドリ

四室マドリにスマイを建てるのが普通である。それで建物規模が二・三室のより大きくなる。

根広部落の黒岩喜久藏氏宅（第7図1）は左ドマでダイドコロがマヂチ（間口）の半分の広さである。大正6年に新らしく建てた。その年の6月根広としては非常な大火がありて類焼したのだという。ダイドコロの前手の隅にウチウマヤがあつて、板敷の間のドマをロジと呼んでいる。表てがわと裏手がわをシキリをして両方にイロリがある。竹カギと鉄カギが下げてある。ダイコク柱ダイコクニラミの柱列でマジキリをして一段高くザシキとネドコロにつづく。ザシキ10帖、ネドコロ4帖ほど、ザシキに神ダナ・仏ダンがありイロリが切つてある。デイ6帖、おくが4帖半、エンガワが表てがわにある。二階はマジキリをしないが、通し柱8本、これらの梁向向きにシンシを乗せ、二階ダイは手スリ2尺の出、上コウリヨウが桁を支える。

広池篠原民作氏宅も左ドマでザシキ10帖、ネドコ、マエデノデイ、オクリノデイが各8帖と奥行が深くなっている。（第5図2）



第7図

1. 黒岩喜久藏氏宅（根広）
2. 山崎喜惣治氏宅（長平）
3. 山本重義氏宅（引沼）

ネの中にドゾウがあつてタテグルミ（ヤネグルミ）となつてゐる。
以上は、六合村で管見した一・三室マドリの家であるが、注目されることは、

これとマドリがよく似ているのが小雨市川久義氏宅（第6図1）チャノマ12帖、マエデとオクリのディイがそれぞれ8帖、篠原家も市川家もおくりのディイに表てに向いたトコタナがある。ただ市川家には生須黒岩輝雄氏、赤岩関節司氏宅と同じようにディイの妻がわに表てがわから廻つたエンガワがある。このL字形エンガワは、利根郡などもあり、県の北部地方にひろがって分布する。

生須の黒岩輝雄氏宅ではチャノマ10帖の奥後ろにネドコがあるが、この場所へ板ジキが出張つてるので異ったマジキリであるが当初からでなく改造されたものであろう。

これらの四室マドリも、ザシキーチャノマが何れもヒロマになつてゐる。それでディイの境がクイチガイになつてゐる点は一・三室マドリの家と同じマドリ系列土のものであることがわかる。

比較的に新らしい根広の黒岩氏宅でも、その新築に当つてはヒロマの系列を墨守している。スマイに関しての常民の鄉愁が系列線上からの逸脱を許さないのである。

(3) カミダナ・仏ダン

ザシキーチャノマの奥に表てがわ向きに必ずカミダナがカモイの上に吊つてあることは前述した通りである。この下に細格子か、マイラ戸などをたてた仮壇がある。山本重義氏方では仮壇より下列にダイコク様を祀つてその下に珍らしい江戸時代の金箱が、置場の枠ガマチに収めてあつた。

それに、この室にイロリが切つてあることも、どの家でも同じであることから、六合村でのスマイの中心がダイドコロのイロリ端とともに、ザシキーチャノマにあることが、わかるようだ。

(4) マドリの名称

ドマの部分を表にしてみると家によつて、マドリの名称は大体同じで

あるがほんの僅かな違いもある。これはザシキなど疊敷の部分にもひどく異った名称はなくてはとんど同じ呼び名になつてゐる。

第1表 室の名称(1)

場所	氏名(敬称略)	ドマの表てがわ	ウマヤの奥と側面のドマ	ドマと板ジキの能称
1 広池	山本 久一	右 ウマヤ	ユドノ	コザシキ
2 ハ	山本今朝信	左 ウマヤ	プロ ウスヒキヤ	オカツテ
3 ハ	塙原 民作	左 ウマヤ		
4 赤岩	関 関節司	左 ウマヤ	コウマヤ	カツテ
5 小雨	市川 久義	左		ダイドコロ
6 生須	市川 亀寿	右		ダイドコロ
7 ハ	黒岩 輝雄	左 ウマヤ		ダイドコロ
8 ハ	市川昭次郎	右 ウマヤ		
9 根広	黒岩喜久蔵	左 ウマヤ	ロジ	ダイドコロ
10 長平	山崎喜治治	右 ウマヤ	ウマヤノワデ カルウス	
11 引沼	山本 重義	右 ウマヤ	カルウスヤ ロジ	ダイドコロ

あるがほんの僅かな違いもある。これはザシキなど疊敷の部分にもひどく異った名称はなくてはとんど同じ呼び名になつてゐる。

コウマヤ、ウマヤノワデ(?)が各一、ウマヤの奥後ろに、広池でカルウス、ウスヒキヤ、長平でカルウス、引沼でカルウスヤ、それぞれ一つ宛の名称がある。カルウスなどは広池の山本今朝信氏方の名称だけが残り、他の長平山崎喜治治氏、引沼山本重義氏の宅では石臼が残っている。カルウス、ウスヒキヤは唐臼である。カルウスなどは広池で米揚きをする代りに米や穀物の道具である。臼は地中に大部埋めて、頭だけ出し、これにクリ棒のよう中途の支点で一段に動く棒を足で踏んで、先端の杵を上下させて米つきをする仕掛けである。

第2表 室の名称(2)

1	広池	山本 久一	— 15ジョウ	—	—	—
2	〃	山本今朝信	ザシキ	12	—	8 ジョウ
3	〃	篠原 民作	ザシキ	10	ネドコ	6 オクリノダイ 7.5 オクリノダイ 8ジョウ
4	赤岩 関 節司	チヤノマ	10	ネドコロ	4 マエデノデイ	8 オクリノデイ 7.5
5	小雨 市川 久義	チヤノマ	12	ネドコロ	10 マエデノデイ	10 オクリノデイ 8
6	生須 市川 亀寿	ジヤシキ	10	—	マエデノデイ	8 オクリノデイ 6
7	〃 黒岩 輝雄	チヤノマ	10	ネドコ	2 マエデノデイ	8 オクノデイ 8
8	〃 市川昭次郎	—	—	—	—	—
9	根広 黒岩喜久藏	ザシキ	10	ネドコ	4 デイ	6 — 4.5
10	長平 山崎喜惣治	ザシキ	12.5	—	デイ	7.5 — 約 3
11	引沼 山本 重義 (チヤノマ)	ナカノマ	8	ネドコロ	4 デイ	10 ネドコロ 4

こんな例は利根郡にも残って、ジガラバと呼んでいる。またカルウスバの位置をウマヤの後ろ奥にすることも、県下の例には、共通であるが、奥羽ではウマヤの前表にておくのが普通である。ザンキなどユカ(床)上の場所の広さと名稱を表にしてみた。

東北地方にも、ジガラバと呼んでいたように古い型のスマイには、ネドコロがチヤノマの奥後ろに着いていた。カルウスバの位置をウマヤの後ろ奥にすることも、県下の例には、共通であるが、奥羽ではウマヤの前表にておくのが普通である。ザンキなどユカ(床)上の場所の広さと名稱を表にしてみた。

この例は利根

である。

ザシキ・チヤノマの広さは山本久一氏の15帖を別格として、他は12・10・8帖、10帖が最も多い。4室マドリの場合もヒロマ型であり、それがゆえにタイチガイマドリと必然になる点を注意してよい。既に述べたように古い型のスマイには、ネドコロがチヤノマの奥後ろに着いていた。このことは小倉強氏が東北地方のヒロマ型民家の型式推移を述べて居るが、その結果と同じような傾向になっている。

エンガワを作らない古いスマイの例は、前橋小坂子町、城南村今井、甘樂町造石などの例があつて、本村の山崎氏方とともに、様式推移の資料としていい参考になる。

(4) ダイドコロ

ダイドコロは、ダイコク柱列でザシキ・ネドコロの室とシキリされる。板ジキの6・8帖ほどのイロリのある室(これは、室といつてもいいほど)とその裏がわに当る4~8帖ほどの室と堺のマジキリがあり、中にはちゃんと紙障子かガラス障子を立てているのもありそのトボグシ寄りにアカリハナに当るところがある。この場所とドマの部分をあわせて、ダイドコロと呼んでいる。またダイドコロの代りにオカツテと呼んでいる広池・赤岩藩落の各一軒もある。なおドマの部分のウマヤとの間の狭い部分をロジというのがあつて注目される。ロジは路次・露路などのカドジ(土)なのかわからないが通路という意味が含まれているようだ。通りニワの言葉から露路の名が出たものか。

(5) カルウスヤ

東北地方ではマヤバナ(ウマヤバナ—ウマヤ鼻—端)にカルウスヤがある。六合村の例では前に述べたがウマヤの奥手にある。名称だけ残つた家もあるが長平の山崎氏方のように石臼の現物をそなえたのもあつて、民俗的に参考となるであろう。カルウスヤカラウスヤ唐臼がウマヤのついたのが小雨の市川氏方前者は利根郡によくみる型と共に

市川昭次郎氏の下の茶屋



その客室の中門突出部



その出桁二階ダイ



その裏手全景（オオヒラの切落）



奥後ろにあっては暗くて仕事に支障があるううと思うが、一定の位置を占める慣習が成立すると便不便を批判することがむづかしくなるのである。しかし、ウマヤの表てにあっては馬の世話を不便になるのかも知れない。また米つき仕事は女や老幼などの仕事になるので、明るい場所に移すといふ主張ができなかつたか、ウマヤの位置が定置しているので、カルス喰などをつぶやくように唄いながら、もの静かに作業したのだつたかも知れない。

(4) ヒラダ

広池の山本今朝信氏方で最初の一例に行き当つた。スマイの表てがわ

に出桁を支えるように吹放しの柱列がある。建物基礎から約3尺ほど離れて、建物の柱間に応じて立ててある。ヒラダの意味を聞きもしたのであるが、柱列の内がわは地面をそのままに、踏むに任せて固めてある。第二は根広部落を長平に向つた村のはずれに近く、中村正雄氏の宅で見る機会を得た。道端の家で道路に面して柱列を平行にしてそれにヒサシをかけてあつた。ここではヒラダまたヒサシと呼ぶそうであつたが、家人が留守で、ヒラダの事情を聞きもらした。山本氏方のは6本の柱がトボグチとエンガワ前で一種吹寄ふうに立つが、ここの中村氏方のはほぼ等間隔に立ててある。

陸地方などのガンギの一種なのであらうか。中村氏方のは母家から直接にヒサシを出したようで長岡・高田市の街通りのものと通じたところがある。コミセという地方もあって商店ならエンドアイでも置いて夕方の人の集まりの場になる。エンダイがヒラダとなつたのか、これでは語呂合せみたいである。

附記しておきたいのは生須市川昭次郎氏の下の茶屋である。平面図

(第6回2)に見るように母家のダイドコロから、タグリ戸で、サンキの表でドマが一文字に通つて、巾の狭いエンガワが並行している。このエンがわはなぜ附しているのか。一文字の通ドマが以前にエンガワであったものを改造してドマとしたのか、あるいは、始めからドマであり、表では吹放しの出桁うけの柱ヒラダであったのではない。

家人からの説明が得られなくてこの間の消息は想像するだけである。暮坂峠を下つて草津に向う客、須川を渡つてこれから嶮しい暮坂を

上ろうとする客がここ上の茶屋の茶屋で、一服して蒸茶を啜つたりした往時、ヒラダであつたら、日射しをよけて汗をぬぐつたことではなかつたか。もしヒラダであれば茶屋廃業後に柱の間を壁付にし、窓を開けてドマ通路だけを残したとする想像が成立しそうである。

(4) ナカノマ

引沼山本重義家だけがナカノマの呼び名を聞いた。福島県などにあるナカノマはダイドコロのうちに入るの、山本家のナカノマは、その系列ではなくて、六室マドリの場合のナカノマの系統なのであらうか。それは山本家のナカノマは、構造上ダイドコロの部分ではなくて、ザシキーチヤノマの方が当つている。それにもかかわらずナカノマの名称の存することは、家格から呼び習わしたものとも思われる。

チユウモソ造り

根広中村雄多氏方は左ドマ、二階建カヤ葺四注造セエゲエをオオヒラ

に出している。このドマからトボダチ一ケンを開口して、その傍から二階のチユウモソを出している。これに類するのが幾軒かあつたが、生須市川昭次郎氏の下の茶屋もその一つ。中門突出部が客室で建物の左がわの端から表でがわに出ていて、村の北野反を超えると秋山村である。秋山村はミゴトな中門造のある村、秋山村から和光原部落に分れて出た家もあるそうだから、アチラの風習もコチラへ伝えられてよさそうだ。市川氏と同じ生須市川龜寿氏方のウマヤとタテグリミのドゾウの棟は、母家と切れているが、片品村土出などの例と等しく、中門部の棟を切り離したものである。

マドリに開通した所見の中、未解決の点が多くそのまま報告するのは遺憾であるが解釈ができるまで、なお暫時を待ちたい。

六、ヤシキ

(1) 集村ヤシキ

六合村では、家々は須川の作った段丘や、その支川の谷の斜面に適地を選んで、互により派うようにヤシキを隣り合せて集まっている。広調な土地は得られないからヤシキは一般に狭い。そこでヤシキを最も有効に使うように工夫して、スマイは必要な広さを土地の広さにのみ求めないで、上へ延ばすとしている。多くの家が二階、中二階、なかに三階と高くのびあがつている。セエゲエ出桁で一方だけなく二方セエゲエ、三方セエゲエを計つたのは、見栄でなくて必要がそうさせた。

谷の地面は複雑な盤を刻んでおり、形のいいヤシキはとても得らべくもない。多くは小ジンマリとするか不規則な形に甘んじなければならぬ。

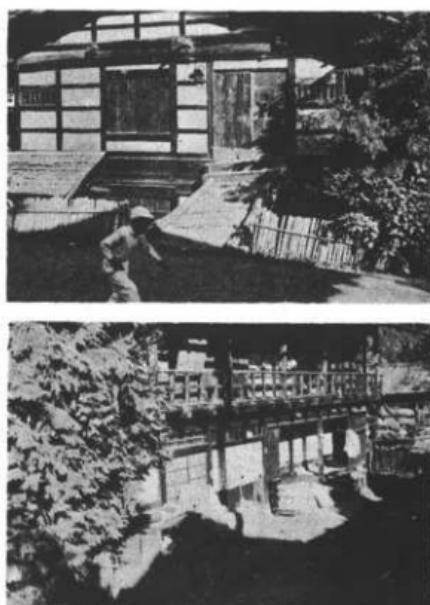
(2) 二階ダチ

母家の他の附属舎は一定の規格では、ヤシキの中におさまりきれない場合がある。

(二) 附属舎

村中で小雨はヤシキ構えに好適地である。旧草津道の沿線に当り、入山の奥地へ通じた場所である。広くて矩形のヤシキにおさまった家もあり、現在須川の西を通る道添いでは西がわは道から上ってカイドウになり、東がわは下ってヤシキにはいる。川東のところは逆になる。母家の二階が道に面した家では、下つてカイドウから家のトボグチが普通にあっても、妻部に出入口を開いて、道路から開口した三階の窓口を家の出入口にして橋をかけるというのもある。(第9図-12)

第9図



第10図



第9図

1. 小雨所見の道路から二階にかけた橋

2. この家の一階、マンナカ辺にトボグチが見える
左の木の枝が1の右手に見えている

第10図

1. 下の茶屋の白壁と化粧ヌキ

2. 下の茶屋の戸ブクロ

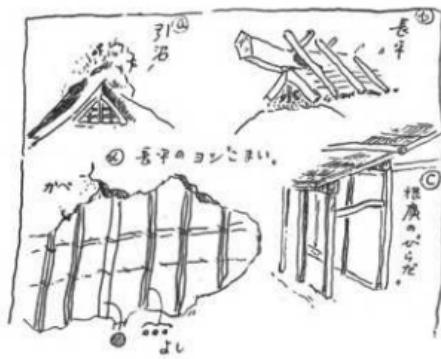
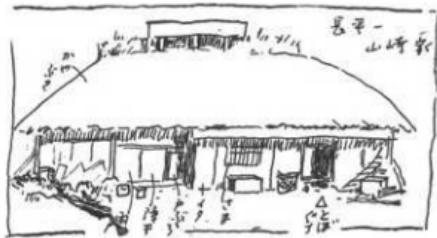


ドゾウの位置
をヤシキのタツ
ミを持っていく
ことは困難であ
る。納屋・物置
はドマのがわ
表に面して矩手
に置くのが便利
であろうがそれ
もむづかしい。
母家なり他の建物と重ね合せることが考えられる。旅人か大工から信州

などのタテグリミのことを伝え聞くか自分の創意で建てたか何れかである。高原家では母家の前手に別棟の一階建出桁、6ケン(間)半に2ケン半の蚕室を建てて、この中へ2ケン、2ケン半のドゾウを入れている。図の上は正面の戸前である。

(第1回図1-3) 図の上と中で一応のタテグリミの格好がわかる

ウダフゴヤはヤシキから離れた煙の片隅に立てられるY字形の枝つきの柱を4-6本立ててこれに桁をわたり棟木をかけて、簡素な吹放しの小屋がけとしたものである。出づりの名残りとばかりも思えないでの、ヤシキの狭いところから小屋がけの場所を選んで小屋を出張させたと見るのがスナオなのかも知れない。ウダフゴヤと火防壁などのウダチリウダツには直接の関連はない。



民家で意匠をこらすには、造作や建具などに目をつける。造作で目につくのは戸ブクロである。下の茶屋の例は、戸ブクロの外がわを、縦子の戸で飾り、上に巾狭の小ヤネをのせる。下の茶屋では客室の一つにヒラ書院をつけていたし、赤岩の湯本貞司氏方には、現在位置が少し変っているが、やはりヒラ書院とみるべき小障子と上の欄間彫刻がある。家人は書院ではないと言われるが、構造から書院だと言つてよいと思う。湯本家の二階の室はシンシン梁をカモイに使って、その曲線に従つた輪廓の開き戸をつけている。これが一つだけでなく三ヶ所かに連続作られた

七、意匠

意匠は大へん面白い。

草葺の表で側二階の両袖の壁を白壁塗りにしてこれに何本もの化粧スギを通したのは、村内でたびたび見たが青葉に映えた短冊形白壁と黒に近いスギ材のつくる節奏はとても美しい。柿が赤く枝に残る頃など、静かで、何か華やいだ朱の明るさ、白と黒と色彩の対象が旅に行つても目にのくる。

郷土芸能

萩原進

一、概見

六合村地域に、民俗的の調査に入つたのは、昭和十三年六月十一日二日の二日間が最初であつた。おそらく学術調査としては最初のものであつたろうと思うので、この時の概況を別に整理し、附録として、本報告書の末尾に収録してもらうこととした。わたくしは、この調査の首唱者であり幹事役であった関係上、本調査以前の三月中に単独で下調査に入つた。主として、赤岩の湯本貞司家の文書資料を中心にしてしたものであったが、とにかく、岩沢正作、新井信示、武藤彌の諸先輩が陣頭に立てての指導であったから、その成果は各方面から期待され、高崎市諸地町の上毛文化会（白石一氏主宰）の「上毛文化」誌と、岩沢正作氏の「毛野」誌の二学術雑誌が、ともに六合村調査特種号を出して、県下の郷土研究に一つの問題を投じた。特に、民俗学共同調査としては、県下でははじめての試みであった。その後も、六合村へは何回か単独で調査に入つたが、今回は最初から二十三年も経過したあとであり、昭和十三年当時のえがたい伝承者の山本彦十郎老までにこの世にはおらず、方言や年中行事なども、激動期のこの二十三年間はたしかに目を見はらせるものがあるほど一変していた。勿論この背後には、戦時中の群馬鉄山の開発、長野原線の太子駅乗り入れ、戦後の電源開発工事、野反池のダム建設工事、さらにブームといわれる観光の急速な伸びで、入る観光客の数もウナギ上りに増加していく。そのむかし、挑源境視された六合村



村でつくった芝居衣裳（和光原）

萩原進撮影

の民俗も、こんどの調査では、現在行われていることよりも、村人に過ぎない多くの痕跡を想起してもらい、あやうく記録に留める範囲をでないものもあり多く、マザマザと今昔の感を経験した。

郷土芸能関係については、過去においてもほとんど採集できなかつたので、こんどの調査でもあまり大きな期待はもちらん持つてはいなかつた。なかでも、民謡や、神事芸能の神樂、獅子舞もないことはわかつていたが、地芝居の歌舞伎についてはなにかあるだろうという期待はあった。結果は、次ぎに報告する程度しか採集できずにしまつた。しかし、結果からみれば、他の地区に比較して、郷土芸能の部門が痕跡さえ

もつかめないというところに、六合村地区の民俗学上の特色があるといふ考察もされると思う。江戸時代の支配政策が、農民から娛樂を奪い、弾圧した例はあまり多い。そうした統治上の作為が習い性となつて、歌を忘れた民となり終つたのか、生きることに必死で、歌うべき唄も歌わなかつたのか、あるいは、芝居を河原を食とさげんだ一つの誇り高い精神的ななものかがあったのか、どの一つをとっても、六合村の社会と歴史をさぐり出す手がかりとなるような気がする。しかし、本報告書では、そうした論及は目的ではないので、ただわざかに調査したものをおこに整理して、報告に代えたいたと思う。

一、地 芝 居

江戸文化の典型的な一つが歌舞伎である。「賣い芝居」にせよ、「芝居」にせよ、歌舞伎が上方文化から江戸文化へ移入され、同時に地方の農村に滲透していく過程はまだ明らかにすることができない段階であるが、いまのところ、県下各地を調査して知り得た範囲では、やはり一般文化の進行速度とおなじように、平坦部の人口密集地帯の方が早く、次第に山間部に伝播したろうという推定はできそうである。

広池の芝居 広池は明治四十年頃までは地芝居がさかんであった。師匠は「日影の師匠」とよばれた山本常吉、赤岩の関七蔵（死んでから四十一年ぐら）の二人がいて、村の芝居好きが集つて練習をした。師匠は、芝居の振り附や義太夫まで教えたといふ。舞原作氏の家には、義太夫が一部さいわい遺されているが、勘定流の義太夫ではなく、もちろん木版本ではなく、現代式仮名書きにしたものである。半紙に自筆で書いた練習本である。大字日影の字下沢の人富沢藤十郎の持ちものらしい。裏表紙のおもてに「たけもときよふ太夫」とあり、これが富沢の芸名であろう。広池の地芝居の舞台は、その都度掛け舞台にしたり、ある時は民家を利用したりした。大道具のうち、引き幕は日影の商い屋に

(日影部落の芝居台本)

明治四十一年三月十九日
大入千客万来
諸役せりふ合本
群馬縣吾妻郡六合村
下沢通富沢藤十郎

明治四十一年三月十九日
若庵中日影村

(裏表紙) (表紙)

あるものを借りて來たという。衣裳（綺麗）は坂上村（合併して吾妻町）の搞羅屋から借りてきて興行したものだ。外題は「時代もの」が多く、世話物はあまりやれなかつた。一座は、芝居の資金は芝居のものを質に入れて借金し、興行しながら返済するという方法をとつた。興行は村内だけではなく、近村の幡恋村・長野原町・坂上村あたりまで進出して、正月から四月頃の間旅興行に出ることもあったくらいさかんであった。しかし、大正時代からは全く地芝居はやられなくなってしまった。それにかわって、こんどはかの村の地芝居とか、ドサ廻りの旅役者の一座を買つてやる買芝居がさかんとなり、村人自身の手による自演劇は影をひそめてしまった。この買芝居も、費用がかかるので、大正十二年の関東大震災の頃までしかつづかなかつた。それにしても、六合村の入口にあたる広池部落が、つい最近まで村芝居をやっていた事実は注目してよいことのようである。

赤岩の芝居 赤岩は比較的早くに開けたらしく、須川左岸としては最も中心をなした部落であり、経済的にもめぐまれていたようである。広池部落が、明治時代あたりからしか地芝居が推定できないが、この村では江戸時代にすでにさかんに行われていたことは、常設舞台のあったことでもわかる。県内における常設舞台の現在分布は、吾妻郡西部は比較的小いのであるが、江戸時代にはかなり盛んに行われていた。赤岩にも、日待小屋に類した狂言舞台があつたことは、次の記録によつても明らかである。「日待小屋」というのは、お日待講のような講談団の時に寄り集まる集会所といったものであろう。そういう名目で舞台をつくつてい

たことがわかる。

次ぎの文書は、赤岩の湯本貞司氏方に所蔵されるもので、天保十三年に、例の水野越前守の天保の改革で、風俗方面が華美に流れたのを禁止したり、遊び人がふえ、いわばやくざが各地に増加し、バタチ、暴行、脅迫などの悪事が横行したので、農村から徹底的にこの風習傾向を根絶しようとした。そのために、従来は天領、旗本領、大名領といった支配権の独立をとった建て前から、一せいに取締まることができず、法の盲点とされたものを是正するために、領主のいかんを問わず警察権が執行できる特別の目付役として、有名な関東取締出役というものを制定し、特に江戸を中心とした関八州に配置した。別に、関八州御取締役などとも呼ばれた。この時に從来なまぬかつた博徒などにも強力な彈圧を加えたが、芝居熱の盛んであった農村の娯楽面にきびしい態度で臨み、苛責ない強権を発動して、芝居をやつた者を検挙したり、舞台を取りこわせたりして、時ならぬ旋風を巻き起こしたのがこの時であつた。赤岩でもこの時舞台を取りこわした。芝居の管理運営は若者仲間の仕事であったから、取りこわした舞台は若者が廃し、これを佐兵衛といふ者に払い下げて売り渡した。佐兵衛は解体した材木を舞台の位置に積み重ねておいたところ、地主の伝左衛門に断わりがないというので注意したところ、佐兵衛が暴言を吐いたため問題となり、仲裁が入つてヤツと落着した佐兵衛の詫び状がこの文書である。よんでもうくと、当時の赤岩の地の舞台小屋の歴史がそのまま現われており、興味深い。

差上申詫書之事

一、此度関東御取締御出役様方より嚴敷戒付候ニ付、村方鎮守熊野宮神

前御両公(湯本伝左衛門と鍼学院)所持之地内ニ建置候日待小屋に類し候狂言舞台、当九月三日村中罷出取漬し候節、右財(村)木若物(者)

方々金式分武朱ニ而拙者賣取申候而直ニ其場ニ積置候處、一体此地所之儀者御両公持主ニ而先年若物より一札差入、日待小屋と唱へ舞台相建

借地罷在候處、此度取漬し候ニ付若物へ先年之証文御拂し被成、地所

弥以御両公所持ニ相違無之ニ付、若物方より拙者方え財木積置候ニ者主方へ挨拶ニ及び可然由被相達候處、其節拙者筋違ひ之儀申之右地所決而御両公ニ借り申ニ不及挨拶ニも參り不申題若物方より致対候處、御両所御立腹ニ被思召、拙者方え再三御懇合有之候處、拙者我意申募り、財木之儀者村方大勢買取候間時置候も勝手次第、決而両公ニ地所借り候ニ及不申、拙者存意ニ任せ、進退いたし候趣申切り候ニ付猶御立腹之廉強く、種々御教諭ニ預り、組合之衆より義理非明細々被申含候間能々思慮仕候處、全く以拙者心得連ニ而御所持之地所押領仕候儀幾重ニも恐入候儀ニ御座候。且又再応御懇合之節も平生之御懇意も不顧、御両所御身分ニ障り候程之過言申之、伝左衛門様儀当年名主勤役中之儀配下百姓ニ右様輕度致され候而者別而身分離相立被思召、夫々之御調べ也可成趣、左候而拙者身分実ニ難行立、先非後御申詣も無之次第ニ付、組合之衆相頼御両所え御詫入歎キ入候處、格別之御勘弁ニ而御両所御立腹之廉ニも立入候候者も手重之由被仰、夫レえ對し御聞済被下財木積置候地所も來ル卯三月中迄御貸被下、拙者身分相立候様被成下悉次第二存候。右ニ付候而者以來急度相憤、村内之義者不及申、実情専ニ心懸、擬令何方え罷出候共諸人之付合万事心付、不法之致方無之様可仕候。右書面之趣五人組引受永く違乱偏敗為致間敷候。為後証一札差上申候処如件。

天保十三年寅九月五日

詫人 佐兵衛

受人 佐兵衛

五人組總代

新左衛門

御医師

伝左衛門様

この天保十三年の舞台取りこわしについて、名主であった湯本伝左衛門（号俊齋）はその手記「公用補胸舞録」の中に次ぎのように書きとめである。

一、九月三日 無台取演し申候。村中不残出で申候。先達八州御取締りより厳重仰付、組合相談の上皆演し申候。
と、ハツキリ認めている。天保の改革が、農民の唯一の娛樂まで剥奪し弾圧したことがわかる。おなじ時に、福恋村三原（當時赤羽根村）でも舞台の破却が実行されている。天保十三年八月であったから、赤岩村より早かつたことがわかる。

御届ケ一札之事

今般御取締安藤源一郎様被成御廻村邑々において狂言舞台建置候段被及御聞ニ、右は心得違ニ付早速取払候様被仰渡經被成御達候ニ付、字河原里宣地の場所ニ建置候舞台昨廿九日迄村中罷出残らず方付申候處相違無御座候。此（段）御届申候。以上

天保十三年八月

赤羽根村

三判

大戸寄場

御惣代中様（福恋村区長文書、御用留）

これによると、福恋村では関八州のいわゆる関東取締出役の命令で舞台をこわしているが、赤岩村と前後して、この時に県下でかなりのものが潰されたと見えてよい。現在遺っている舞台は、多くはそれ以後のものと見られる有力な理由となつていて。

ところが赤岩村では、天保の改革が失敗したあと、嘉永年間に同じ位置に再建している。湯本貞司氏の示教によると、定舞台で、間口六、七間ぐらいたり、奥行は四間位あつた。床が非常に高く、柱の下は大人が立つて歩けるほどあり、そこが楽屋となつており、ちょっと見ると二階づくりのようであつた。屋根はカヤ葺き屋根であつた。向つて左側前方

に斜めに花道が付くようになつた。上演の時は、舞台の両袖にムシロ囲いがつくられ、その留め木に、花札（花という御祝儀の金額と氏名を記した紙の貼り札）をつけた。観席はいま煙となつてゐるが、平らな村でもよい場所であった。この舞台は終戦後まであつたというから、吾妻郡内としては、中之条町の和利の宮の舞台（現存）や長野原町と喜屋の荒神さまとよばれる神社境内の舞台（現存）とともに、数少ないもの一つだつたことがわかる。惜しいことをした。

赤岩は近郷近在でも知られた芝居村で、広池のところで述べた師匠の関七藏が中心で、一座を結成し、遠方まで興行してあるいたそうである。この人は、大正八年に五十才で死んでいるから、このあと急速に芝居が衰減していったものと見える。

梨木の芝居

梨木ではむかし芝居がやられたが、文久二年生まれの竹内与十郎さんの親爺さんが青年時代にはよくやつたものである。舞台なしの地芝居で、普通の民家を借り受けそこで練習したが、師匠は中之条や岩島村方面から來た。役者が足りないと女の子まで出て、子役などをやつた。よくやられたのは「一の谷」（一谷勘車記）「安達三」（奥州安達原三段目）「忠臣蔵」などだった。（世話物はほとんどやられなかつたらしい）賀芝居もよくやり、昭和の初め頃まであった。この時は、スギの丸太で舞台と棧敷をつくり、まわりはカイコズ（養蚕の時蚕を飼う竹で編んだもの）で囲い、養蚕の時のムシロで見えないようになつた天井——これをハネ木という——がかけられ、その下で見たものである。多くは春先の頃が多かつた。

和光原の芝居 この村で今でも生きているのは和光原の地芝居であり、その地芝居が、崎羅や小道具を、他の村から借りたり、崎羅屋から

借りて来るのでなく、全部手製であるのはほかに例を見ない。群馬県の最奥地に、こういうかたちで、今もなお村人の間に生きつづけている事実は、芝居そのものの伝播と文化一般の流れとを比較していく上に貴重なものである。広池、赤岩、梨木ではすでに行われなくなつたが、おそらく最もおそらく入り入れられたと思われる最奥地に、今もなお息をしているのである。新しい形で、新しい既成の娯楽施設が入口の部落では早くに渗透してきたために、地芝居の如き前時代のものが自然に消滅していったが、和光原のような、ちょっと長野原や中之条へ出られない地区では、娯楽の一つとして消滅しようという力よりも、これを阻んで実行を続けようとする力の方が優っていたのではないか。農村娯楽を中心めて、地方芸能の問題点はこんなところにも隠されているようである。さらにこの問題の根本にある経済力と娯楽という課題が、和光原の地芝居においてハッキリと一つの答えを出している。それは、前近代的な農村社会においては、生産と消費が非常に不均衡な関係があり、生産は売って換金するという貨幣経済的な流通ではなく、自家消費する消費材料の生産が主であった。したがって、消費は極端におさえなければならず、ほとんどを自給自足経済によってまかなわれるのが原則であった。極端なこの孤立経済は、山村僻地にゆくほど後世まで続いた。この原則の上に立つて、地芝居という娯楽分野を見る必要があり、またハッキリとその様相を現わしている。その意味で、和光原の地芝居は、演劇社会学の興味ある問題を提起している。「よその村」でやっている芝居をやりたいが、多額の経費をかけることができないとすれば、すべての面で自給自足して、低いレベルでよいからやろうとしたことにはじまつたと見てよいであろう。同じケースが、人形浄瑠璃では勢多郡黒保根村の湧丸という部落の人形芝居に見られる。三月の雛節句の雛人形のカシラを使い、時には卵に目鼻口を書いてやったのである。やみがたい歌舞伎の世界へのあこがれが、こういう姿で經濟的にめぐまれない山間僻地にまで滲透していったという歴史の一こまが和光原においても見ることがで

きた。



和光原舞台観覧席あと

萩原 進 撮影

ではほとんど毎年欠かさずやつてきた。現に昭和三十四年四月の皇太子殿御成婚記念と銘打つて、小学校の体育館で三幕もやっている。「太十」「安達三」「阿波の鳴門」「弁慶上使」などがやれるという。別に師匠といふのはなく、村のできる者が教えてやらせたらしく。義太夫は最近では、渋川の野沢才花という太夫が来て教え、冬の間一ヶ月ぐらいやるという。花敷温泉の関晴館の近くに住む加部豆といふ爺さんは芝居好きで有名で、むかしから「爺さんは芝居氣狂いだ」といわれたという。和光原の山田衛さん家には、義太夫の台本がいくつか遺されている。

「板名手本忠臣蔵六段目、勘平腹切」（六の切）「日吉丸稚桜五郎助住」

和光原にも舞台が明治中年（二十八九年頃）まであった。場所は大神宮さまの前であった。間口四間奥行三間半ぐらいの大きさで

常設の舞台だった。廻り式でなかつたが、チヤンと二重も付いていたという。観覧席は煙から見えるようになつていた。したがつて、むかしから地芝居はさかんで、村のたのしみの一つであった。こんどの第二次世界大戦中の二、三年休んだだけ

家の段」「八陣守護城、政清本城の段」などが目立つ。このうち、忠臣

館だけが木版本で、他は手書きのもの。同じく山田さんの家に、最も問題になる芝居の装飾や小道具が土蔵の中にしまわれている。その一つについて、目録と簡単な解説を付けておく。いずれも、素朴な村民の創意と工夫によってつくられた手製のものばかりで、むかしの小学校の学芸会を思わせる、ボール紙、金銀五色の色紙の貼りつけ、木やタケを利用した小道具など、一つのものにも、地方の娛樂にめぐまれない環境のもとで、しかも費用をかけないで自立演劇をたのしもうとしたたくましい意欲とともに、大衆のもつ素朴な哀愁さえにじみ出して深い感興をよぶものばかりである。



歌舞伎台本(和光原)

萩原進撮影

る。完全に使えるものは二着ほどである。



歌舞伎のカツラ(和光原)

萩原進撮影

寶(かぶと) 二個

あり、ブリキ板を利用したもの。特に地方の手作りの特色をさまざまにみせているのが、麦藁帽子を利用して、その上にブリキ板を被せたものである。

小道具 大小刀は全

部竹光の名刀で、タケを使い、鞘は自づくりの木鞘である。これは何本がある。この外安達カ原の鬼婆の使う大きな庖丁もある。とにかく、幼稚なだけに見

うと、高価な芝居道具の一座よりも心をひかれる。

それは自からの娛樂を自から手で演じようとする自立演劇の神髄を無言のうちに物語っている。義太夫をやれる者はまだ幾人かいるというから、まだ後もやれるであろう。その時あらためて演説を記録していく必要がある。義太夫をやれる最高齢は間さださん(八十四才)である。師匠の渋川の鶴沢才蔵は六十五才、世立部落の山本栄といふ人も義太夫ができる。

世立の芝居 世立にも芝居が行われたが、いまは引き幕が一つあるだけである。ここには道具がひとつずつ捕っていたそうであるが、いまはなくなっている。引き幕は、雄ジカと雌ジカが、紅葉の野に遊んでいる画

カツラ ブリキ板やトタン板を使ってカツラの台をつくり、一枚一枚の片切れを斧でとめてある。古墳時代のカブトの製法を連想させる。この台に、頭髪は麻を黒く染めたものを植えついている。男女両方のカツラが十数個ある。

鎧(よろい) カツラとおなじような手法である。草すりのシコロ(鎧)も、ブリキ板であつてまことに素人芝居にふさわしいものであ

六合村には民謡がむかしから少いということは、以前の調査からわかつていたのであるが、今回の調査でなんとかして、古くから伝えられる民謡を聴き出そうとしたが結局徒労に終った。最終日になって、引沼の山本貞次郎さん（六三）とその娘さんの山本さかさん（七〇）の二人から、いろいろ聞き出しがたが、さまざまの時に歌つたという其句をいくつか聴くことができた。端唄系の軽いものである。

△主のお背戸へおだまきなげて
たぐりよせたいわがねまへ、コリヤ／＼

三、民謡



歌舞伎の小道具（和光原）

萩原進撮影

来芝居の引き幕でなく、祭典の時に神社の社殿を開んだ幕のようである。これを使って芝居をしたとすれば、おそらく代用したものであろう。ほかには芝居をさぐる手がよりのものはなにもなかつた。

△かわいい男と夏吹く風を
ソヨと入れたいわがねまへ、コリヤ／＼
△君と僕との差し向かい、コリヤ／＼
△梅のつぼみが門出の祝い
△お帰えりやさくらの花さかり、コリヤ／＼
△梅とさくらを両手にかかえ
△どが梅やらさくらやら、コリヤ／＼
△主はあるの山岸の松よ
△わたしあ初雪降りかかる、コリヤ／＼
△梅のつぼみと恋路の文は
△聞く間を待ちかねる、コリヤ／＼



世立原引き幕撮影

△主人がよろこぶ
△よ

この中、「梅のつぼみ
が…」は、以前出征や入
營の兵士の歓送会でよく
歌つたといふ。このうち
いくつかは、中世の小唄
の調子を伝えており、な
かなか捨て難いものを持
つている。

次ぎに「地掻き唄」を
聴くことができた。ここ
では「さんよ掻き」とよ
んでいる。

△嫁御よろこべ、サーン

ウンと持ちあげて、サーンヨ
且那もよろこぶ、サーンヨ
かかもよろこぶ、サーンヨ

嫁御もよろこぶ、サーンヨ
ウンと持ちあげて、サーンヨ

お酒も出るそだ、サーンヨ
向う小山をつきぬいて、サーンヨ
うんと持ち上げる、サーンヨ

うんときめこめ、サーンヨ
と、卑わいなものを歌のかけに隠して、作業をするものに疲労を感じさせないよう、おもしろく、あかるく歌ったもの。しかし、新築工事の祝いもあって、たとえば、台所の入口の隅の柱の土台を固める時には、

一の柱だ、サーンヨ
といい、大黒柱の時は
大黒柱だ、サーンヨ
とか、
鉛懸柱だ、サーンヨ
と歌つたそうである。

つぎに多かったのはゴゼ（胥女）であった。ほかの村では、門付芸人のゴゼを引き留め、ある一軒を宿として村のもの好きが芸や唄をならつたものであるが、この村ではそういうことはなかつたという。ゴゼは大てい「手引き」といういま一人に手をひかれて、多い年は二マケも三マケも来た。マケというのは、この地方で組み、仲間といった意味である。

ゴゼのほかに鉢屋も来て、よく歌つていたが、村のものでこれを歌う者はなかつたということである。（以上引沼で）

和光原できいたところによると、ゴゼは大正十二年頃まで来た。「さのさぶし」や「口説きぶし」をやつたという。引沼での読み売りが口説きだつたろうという推定がハツキリしている。今でも覚えているのは、「葛の葉の子わかれ」や「鉛木主水」だった。祭文語りもよく村へ來たが、錫杖とホラの貝を持って、白井権八などをよく聴いた。

梨木では、わらべ唄をきいたが、別の調査者によつて発表されるので、おもしろいものだけをあげてみる。

からす、からす
カラス

なぜ泣く

うのう（方言、お前）が
家が焼ける

ガ

がんがん竿になれ

四十竿になあれ

アケビの花

ぢぢいばあねてろ

嫁ア起きて

「木挽き唄」もあつたが、これは越後や越中から来た木挽きが唄つていたもので、村人は知らないといふ。そのほか、「さのさぶし」「ドンドン」「鷹森江ぶし」などがよく歌われたらしい。

村のそとから来る門付芸人は、「こぜ」や「読み売り」というものがあつた。読み売りは夫婦で、乞食に近いかつこうで訪れた。亭主が笑ながおしをし、おかみが「読み売り」ということをやつた。一種の「口説き」「説教ぶし」のたぐいであったらしい。たとえば、「小栗判官」「俊徳丸」「八百屋お七」「国定忠治」「まま子騒動」「学校騒動」といったもので、上州の八木節の古い語り口のものが多い。実によく覚えていて快くきかせてくれた。四、五十年前まで来たものだそうだ。

はたらく

フキのとう

じゃおーごんげん

でろでろ

いまでじやア

でえーめえ

あつくなつたら

焼け死ぬべえ

といつたものである。この時ついでに小唄が一つ出た。

花に咲くなら

山吹アおよし

花は咲いても

実はならぬ。

以上のように、郷土芸能の面では他の從来行っていた地域よりさびしかった。歌を忘れた鳥のように、ただ黙々として生きてきた「山の民」の哀歎が、かえって強くせまるものがあったという事が、偽りのない感想であった。

八付▽昭和十三年入山調査について

調査時 昭和十三年六月十一～十二日

主催 吾妻郡第三区乙種学事会郷土研究部

参加者 指導者として毛野研究会の岩沢正作氏（考古学・民俗学）新井信示氏（歴史一般）武藤恒氏（植物学）・飼持昌氏（人文地理）の四氏を依頼。参加者丸山徵一、黒岩敏而、渡辺千代丸、深井明、萩原進、湯本貞司、小板橋寛、黒岩重作、富岡今朝治、小柴達七氏のほか、六合村小学校職員など約三〇名。

調査対象 歴史・地理・博物・民俗の四部門にわたる実地踏査。民俗

学の面では、方言、信仰、伝説、民話、生活様式、地名、手工業

（曲物）、狩猟等比較的せまい範囲に限る。

調査結果 雑誌「毛野」（第四卷第三号—昭和十三年八月廿五日発行）を入山調査特集号とした。主な論文は

六合村史話 新井信示

地名について 岩沢正作

野反湖附近の植物 萩原 進

吾妻郡六合村調査旅行に参加して 赤城山人（岩沢正作）

また同誌の次号に、この号に載せられなかった「吾妻郡六合村湯本家文書の一部」として四拙生（岩沢正作）が掲載された。

雑誌「上毛文化」（第三卷第六号—昭和十三年六月十五日発行）ではいち早くこの調査の意義を認め、巻頭言に「六合村の郷土調査」（主幹白石一氏筆）の題で、「本県下の郷土史研究が從来殆ど

考古学方面に限られ、この方面は既に十分に近いまで調査も行届き整理も片づいて、これは官の補助成もあって幾つかの業績も発表された。それに引きかへて民俗学方面は一向に顧みらざるの觀があり、この方面に関心を寄せるものは家々晨星も啻ならぬ有様であるのは、われらが嘗て郷土史研究の跛行を指摘した所である。而

民俗学は考古学の対象と違ひ日に日にその原形を変化しつゝあり、これが採集は一日を忽にすべからざるものがあるものがあるに鑑み、われらの常に焦躁を感じて驚愕の士の蹶起を促がして止まざる所以であった。この時偶々吾妻郡第三区学事会郷土研究部の主唱により、県下に於て久しく拂拂の仙境視された同郡六合村の郷土史的、特に民風民俗的調査を決行されたことはその科学的組織的研究態度に於て正に陳異を為すものとして、その壯舉に隨喜し感謝すると共に、これが刺戟となりて大に民俗学的研究の勃興すべきを信じて疑はない」と記している。次いで、第七号（昭和十三年七月十五日発行）を六

合村調査特輯号と銘を打つて調査の一部を発表する機会を与えられた。同号の巻頭において、「吾妻学事会の壯舉」と題し、「こゝに吾妻郡六合村郷土調査報告を特集して世に送ることは本誌の使命に鑑みて最も欣快とする所である。これに漏れたものは次々に発表されることはと思う。兎も角この調査は、あの土地で、僅に一泊二日の短時間の収穫としては大成功であった。恐る言へば限りがなく、交通関係、産業形態その他経済史的資料の採集についてはこれを第二回以後に期待すべきであろう。民俗関係に重点を置いた今回の目的は略述されたものとしてその勞を感謝しなければならない。(略)われらは吾妻郡学事会がこの壮舉を決行し、本県学界に先駆を啓いた英断に対し、重ねて深甚の敬意を表するものである」(白石一氏筆)といふ批判をよせている。一十三年以前に、今回の調査とは規模において方法において幼稚きわまるものであったが、本県最初の民俗学の共同調査という意義はあつたわけである。同号に掲された内容と執筆者は次ぎのとおり。

吾妻郡六合村調査旅行概要 吾妻郡第三区学事会郷研土研究部

入山土俗考 萩原 達

六合村渓谷と野反池 武藤 郁

六合村入山の山村を尋ねて 銀持常昌

六合村石器時代遺物発見地に就て 黒岩敏而

六合村方言証話 一宮 生

本号に掲載できなかつたものは、第九号に渡辺千代九「野反湖景観」が載つた。以上今回の調査報告にかねて、昭和十三年の概要を記した。いま、総合的に立案計画された今回の調査とくらべて見て、問題にならない結果しか得られなかつたとはい、當時群馬県においては、誠んでゆく生活の歴史に対しては、ほとんど一、二の好事家の「話の種」としてやられていたもので、地域を學術調査するという段階にいたつていなかつた。六合村の調査

も、実は當時学事会単位でいち早く民俗調査に手を染めていた長野県の影響があつた。吾妻郡が長野県に隣接していたことが一つの刺戟であつたことは否定できない。たとえ収穫は小さかつたにしても、まだ未開拓地帯であつて、かなり豊富な民俗がのこされていた時である。子算があれば、かなり精細な報告書は書けたはずである。いま考えて見て残念でならないことに、写真機がまだ普及していないかった時なので、ほとんど写真に記録できなかつたのも惜しまれる一つであった。年中行事や民間信仰、民家、服装、食事など、こんどの調査の時はすでに消え去つたものが少くなかつたので、今さら時の経過が大きな変化を与えたことに驚いてしまつた。伝承者にも、山本彦十郎という物知りの人がいて、なんでも答える得難い知識の所有者であった。今回はこういふすばらしい伝承者には会えなかつた。伝承者の少なくなったことが、やはり時代の変化を思わせるものがある。

吾妻郡の第三区学事会としては、さらに第一次、第三次の調査を予定したのであるが、情勢の変化で、ついにこの一回だけで終わってしまったが、叢書できたら、なお多くの貴重な資料がのこされ、同時に二十三年後のしかも最もはげしい変化を見せた二十三年間の変遷が比較できたのである。さいわい、上毛文化と毛野に、たとえ一部ではあれ、当時の報告がもられたことはせめてものの収穫としなければなるまい。白石氏も岩沢氏とともに故人にならつたが、この両氏が民俗学に寄せた功績をあらためて再評価してよいであろうと思う。

六合村の山村社会

—入山地区引沼部落について—

小池善吉

一、部落の家

日本の社会のことを考える際は、今でも尚「家」という単位を無視でできない。それほど日本人には「家」の概念はいつももつて廻っている。まして、このような奥地の山村の生活では血のつながりの要素が「家」のなかばかりでなく、「部落」全体の生活のすべてに亘って、支配していることは驚くばかりだ。そこでこの血のつながりの拠点である「家」のことからみてゆこう。

私の山村社会の調査でも何よりも部落の各家々を徹底的にあらうことにしてみたい。

1 家のよび名

村のなかでは人を呼ぶのに、その人の属する「家」のよび名を用いる。人は「家」の名においてのみ存在するような旧い生活型が余りにも露わに現われてくる。部落内のどの家も悉く夫々特有の名称をもつていて、この呼称によってすべての村の人間関係や社会関係が処理される点が強い。家の名の呼び方（屋号）と共に、家の印としての家判や家の系譜を示す家紋などが大きな社会機能を果している。今各家々のよび名を一表に示すと次のようだ。

この旧村入山地区では集団の呼び名としてよく何々ショウ（衆）といふ言葉が使われる。（例えば仲間ショウ、男ショウ、女ショウ、親類ショウ……）家の呼び名にも亦この何々ショウと呼ぶのが多い。同じ入山の和光原については都九十九氏が屋号としてあげているが（「山村の風俗と暮し」一四七〇—一四八頁）、ここ引沼部落も亦左表のように殆ど大部分の家が「何々ショウ」とよばれている。普通の家には場所や方位を示すわかり易い呼び方や先祖の名などによるよび名が多い。姓は殆ど全部が山本姓であって、家紋も亦裏紋が同じサガリフジである。この意味でも部落内の家間関係家つきあい等ではこの家の呼称は大きな役目をしているわけだ。

2 家々の由来

これらの家々がこの部落に定着した年代については村の成立由来につながる問題として別の機会にゆきり、ここでは各家ごとの調査によつて知りえたものから述べておこう。

各家々のことを述べるには、自づと家々のつながりとしての同族（本分家・マケ）や姻戚などの親類関係のことにも触れなければならない。この詳細については別に明かにするのでここでは省略しよう。ただ、この部落の家々の系譜をたどってゆくと、山村社会の特殊な構成として同族を中心の親類仲間の交錯が余りにも濃密に見出され、どの家もすべて何らかの親類の範疇に含まれてしまうので、これらの段階わけが必要に

世帯主	家のよび名	備考
山本茂平	とやざかシヨウ	昔「とやざか」(場所)に住んでいたため
徳三郎	なかシヨウ	め家々の「まんなか」にあるた
中助	ふかぼりシヨウ	る。ふかぼり(場所)の名をと
春子	あおやす	青と安兵衛の「安」をとる
菊衛	たちばな	め
谷五郎	なかぜき	「ふかぼり」の名をとる
治郎	ふどむこう	「とやざか」の名をとる
新宅五郎	むこうシヨウ	「とやざか」の名をとる
在衛	むこうだいら	「とやざか」の名をとる
重義	むこうシヨウ	「とやざか」の名をとる
未作	まえシヨウ	「とやざか」の名をとる
仲治	まえシヨウ	「とやざか」の名をとる
たけじ	やまとうシヨウ	「とやざか」の名をとる
勝恵	はじ(端)シヨウ	「とやざか」の名をとる
福島安正	はばシヨウ	「とやざか」の名をとる
信太郎	福島シヨウ	「とやざか」の名をとる
千代春	チヨウサブシヨウ	「とやざか」の名をとる
沢ショウ	定平ショウ	「とやざか」の名をとる
「先祖の名」		
「沢地」にある		

山本豊市	治三郎	初子	森下シヨウ
政雄	半兵衛シヨウ	むかいシヨウ	あいえシヨウ(あつもよ)
だん	勧右衛門シヨウ (勘エム)	森下シヨウ	い
政繁	安兵衛シヨウ	えどがしらシヨウ	
貞治郎	甚左衛門シヨウ (甚ゼム)	森下シヨウ	
元信	吉五郎シヨウ	森下シヨウ	
伊勢松	市郎兵衛シヨウ	森下シヨウ	
幸内治	吉五郎シヨウ	森下シヨウ	
善太郎	吉五郎シヨウ	森下シヨウ	
里次	吉五郎シヨウ	森下シヨウ	
栗岡	吉五郎シヨウ	森下シヨウ	
清水屋	吉五郎シヨウ	森下シヨウ	
下出シヨウ	吉五郎シヨウ	森下シヨウ	
うしろシヨウ	吉五郎シヨウ	森下シヨウ	
「先祖の名」			
「出組より移転したもの			
「一番うしろにある			
場所が「清水屋」			

なるほどである。そしてこのよだな封鎖的な狭小な社会では、長い間に亘って分家も近くに分布され、その上養子や婚姻の縁組も同部落内に累積してしまったので、本分家間や近隣間の血縁的交流も極めて頻繁になっていた。こうしたなかでマケもきわめて明瞭にいくつかに分化され、その結合も弱められてはきていたが、尚社会生活の重要な単位としての結合も維持している。このような社会では最近まではやはり家々の浮沈も少く、ただ村における土着年次の旧さが家格として「家」の身分階層の差を形成していた。この部落でも近世の「サオウケの家」としての七戸が村民の口にのぼっているが、同じような旧家の把え方が入山の和

光原にも見出されることは都丸氏も先掲の書物の中で指摘している。これを見証するような史実が貞享三年（一六八〇）の檢地帳にも見出された。これでみると、助右衛門（現在は廢絶）が一町一反九畝二歩の烟持で最も大きい。ついで善兵衛、徳兵衛、長右衛門（現三郎）などであったようだ。當時サオウケ七戸も助右衛門を除くと、土地も少く、嘉兵衛、徳兵衛が六反五畝、長右衛門五反五畝の程度にすぎなかつた。尚藤右衛門三反前後、七右衛門一反七畝の小さな烟持であった。しかも尚現在の部落の土地所有状況にくらべると、上層がかなりの大きさだったし、就中助右衛門の一町余の規模は當時の農耕經營の方式や内容がしのばれる。近世初期の宗門帳がないので詳細はわからぬが、下々畠山下下煙を中心の生産力の低い粗放な勞作經營のほどが充分にうかがえる。

さて、この部落の主もなマケの本家格について家の由来をみると、まづ善兵衛マケの總本家（現在の碧の家）では近世の初期から慶長年間頃までは選ることができた。戸籍や位牌及び墓碑などを調べてみて、やはりこの部落内では旧家である。戒名から家格（階層）をみたが、これでは別に他家以上に優位したものは見当らなかつた。近世の戒名は大体どの家でも禅定門（尼）であり、ただ二字と四字の差がある程度にすぎず、中期までは普通二字の家が多く後期になって四字があふえてくる。この点同じ郡内の中之条町の場合などにくらべて居士、信士などによる明瞭な区別がみられなかつた。この農家の檀家寺は日影の龜沢寺でありこの檀家では旧くからの寺の開祖たる赤岩村の湯本家の院号居士を別格にして、よい戒名として居士格には入山村内では長平の本多春長の家、根広の中村豊作の家、和光原の山田衛の家などといわれているが、この引沼のうちでは戒名家格の上からは格差はみられなかつた。善兵衛總本家も亦近世中期には二字禅定門であった。（宝永草保年間の事例）

註 この部落のマケの本家格として市郎兵衛マケ本家をみると、やはり草保四年・六年の二字禅定門が宝曆九年延享二年同十年には四字禅定門（尼）になり、以後引続いて四字階層になつてゐる。

この善兵衛マケの總本家は「家」の創立以来比較的は浮沈なく現在に至つて、その間一番多くの分家を出して栄えている。旧く安右衛門を出し、この安右衛門から藤右衛門（山藤）吉郎平及び幸右衛門吉平などが分出し、更に總本家からは文五郎・平作分家がでている。江戸時代に分家したのが五戸で、安右衛門が一番ふるくついで藤右衛門幸右衛門が古く、更に總本家から文五郎の家の分家し、その後安右衛門から吉郎平が分家した。明治後はしばらく分家は行わらず、大正に入つて總本家から嘉久平と平作が分出した。更に戦後になつて現世當主碧の弟栗岡が新分家を創立している。近世の各分出の年次の正確なものは記載されなかつた。

長右衛門マケの總本家も「サオウケ七軒」の一戸として旧く近世初期まではたどれるが創立年次は正確にはわからない。近世中期から後期にかけてまづ与左衛門家（現、定平）が分れ、さらに後期に長一郎（現、團藏）が分家している。さら明治後は昭和十五年与左衛門系の定平から信太郎が新分家にている。又ものとの与左衛門の屋敷跡に小雨村の橋島貞次郎が大正十年に分家している。血縁的つながりはないが長右衛門マケに含まれてゐる。

安兵衛マケの本家（現、政繁）も旧家として七戸に入っているが、家の成立は正確にはわからない。このマケはただ一戸の勘左衛門分家（現貞治郎）を近世にだしただけであった。

つぎに、徳兵衛マケの本家も旧いが、同じく正確な創設年次は不明だが、近世に二戸の分家を出した。はじめ甚左衛門分家（現、保太郎）を近世後期のはじめに出したらしい。ついで弥右衛門家（現、たけじ）が分出した。更に大正八年に弥右衛門家から弥十郎四男茂平が新分家を出している。

七右衛門マケは本家（現、初子）もサオウケ七戸として旧家格だが、創立年次は不明である。旧いがごく最近まで分家することもなく一戸で独立してきただが、戦後の二十五年に先代の弟正雄が分家した。

以上のサオウケ七軒を中心とする小同族の外、市郎兵衛マケが近世以来成立している。墓碑からみて享保年代が旧く近世中期のはじめからと推測される。後期に入つて二戸の分家をだしている。

更に、現在は部落にならない家々についてみると、先づこの部落で旧くから最も大きかつた助右衛門・總本家は部落の草分けの「サオウケ七軒」の一戸であるが、この家の成立年次も明かでない。近世後期に定八分家をだし、更に大正二年には三平分家をだしている。定八家では明治生れの多くの子供達が殆んど死んでしまつた。又總本家も明治後は娘に婿をとつて「家」をついたが、さらにつづいて孫娘も明治四十三年に婿をとつたが、田代の農耕地に出てしまつた。又半兵衛マケの宗平次家も明治期までは続いたが、男子なく残った二女が新潟県人に嫁入してこの部落の根はたえた。その娘も十年前に部落を出で今は草津にいるとのことだ。さらに同じサオウケ七軒に属する葛兵衛家(現・米作)も旧くから今の官行のところにあつたというが、その起源は不明である。ただこれらの山本マケは宵系に属すると認められていてこの部落に多い他の山本マケ(明け系)とは別の系譜のように云われている。尚現に中組に分かれている花敷マケについては花敷からきたものとみられているが、家々の系譜的つながりが明かでない。

3 家の展開——その浮沈

いつの時か、この部落がぎりひらかれて、山本同族を中心とする展開の過程にこれに属する個々の家々の浮沈もみられたわけである。ただこのように外部社会と遮断された封鎖的な近世期の山村では、開発当初の家の経済的社会的地位にさして変化はみられなかつたようだ。旧い地方文書は少く實文様地帳からはじまる家々の土地所有からみて、つづく貢献の極地当時をしのせる「サオウケ七軒」の旧家格を中心にしてその家の展開浮沈をたどつてみよう。草分けといわれるこれら七戸の間にも自家格や経済力による序列があつたと思われるが、少くとも貢享の頃は換

地帳から右衛門・本家を最高に長右衛門・本家安兵衛・本家善兵衛マケの藤右衛門分家などが土地経済的には上層だつた。百年後の明和八年(一七七一)検地帳でもこの趨勢は余り変化しなかつたようだ。しかし後期になって部落に木製品の仕事が盛んになると多少の経済的浮沈の動きがきがざしはじめたようと思われる。これに併せて各マケの本家が次第に分家を出してくると、分家をだすことの多かつた善兵衛マケは分家流出現によりマケとしての発展はあつたが、それだけ總本家としては少しつづ縮少化していく。旧い分家の安右衛門・藤右衛門特に後者は他の本家をしのぐほどに中期以後は伸びていた。宅地は最も広かつたし、明治までは引継いで藤の山判を以て木製品がせぎで栄えたようだ。唯總本家は度々の分家によつて耕地こそ少くなつたが、山林は他家よりは遙に多く所有し続けて明治の地租改正までに至つてはいる。耕地は近世では引継いだ長右衛門・本家藤右衛門・安兵衛・本家助右衛門・本家が優位をしめていた。助右衛門・本家も後期になつて定八分家を出してからは幾分下向きを示した。他方定八分家は本家に近い経済力をもち明治初期には部落の上層に列した。とにかく近世後期から明治前期(二十年前)頃までは分家流出による以外大きな家の経済的浮沈の契機も少く、家格の変動もなくて草分け当時からの旧い序列による社会秩序が維持できたといつてよからう。戒名階層上からは部落農家間・本分家間でさえも殆ど家格の差がみられないかった。この引継では、本家とはいえ特に優れた家格による権威的従属関係はなかつたとみられるし、又土地経済的階層も大きな距りがないく総じて同じ零細所有規模の基盤にたつていてので、低い水準のものと家の固定的停滯が続いたわけだ。そうしたなかで、名もない零細な一般農民の僅かながらの家の振幅も生産力の低い耕地にもとづく生存レベルの生活水準ではたえず凶荒や飢餓にさらされるに至つた。所詮庄倒的優位から他家の支配ということさえなかつた部落の家閥関係は封建時代とは云えむしろ原始社会にも似た仲間(本分家や近隣)の相互扶助による

地租改正を契機にその後に漸く土地の移動がはじまり、特に一、三十年代からは資本主義的経済のもとで近世以来の木工品の販売上の有利さから多くの農家がこれらの製作や販売の資金づくりのため、僅かばかりの耕地を抵当に借金し、これの返済不可能から村の有力者に向って土地が流出して、永く静穏停滞的だった家々の間に浮沈が表面化するに至った。明治二十年代のはじめには地租額では藤右衛門・長右衛門両家が部落内の最高の土地持ちだった。助右衛門・本家は明治の地租改正の頃までは尚上層の土地持ちを保持していたが、その後次第に下降過程をたどり、三十年の頃には分家定八家がこれに代わるとしていた。しかしこの引沼部落の各戸は新しい六合村全体の水準から一段低い地位にあった。とにかく明治後期の木工品の製作販売さらには運搬を通して家々の間に従属依存の階層関係がつくられたが、これは販売（上層）製作（中層）そして運搬（下層）という部落の中心生業による新たな家序列（部落の秩序）が成立したわけだ。この販売には部落内では善兵衛本家（善一郎）と上昇過程の定八家について善兵衛マケの安右衛門分家（類造）などがたたずまつたが、善兵衛本家はこのため山をへらして下降しはじめた。定八家も亦失敗して没落したが、最後に類造のみが販売を一手に掌握するに至った。以上は明治末年から大正初期の動きであるが、大正ながらから大震災（T12）までは類造家の独占販売として繁榮した時期であった。この類造も亦震災にあって東京向の販売で失脚して、昭和以降安右衛門家は衰弱しはじめて、特に類造の死亡後の十年代からは急速に没落していく。類造の活躍した明治後期から大正期の木工品時代が全盛期で、以後は又細々した農耕や販賣による生活にかえってしまう。明治前期から中期頃までは、近世の農耕中心の延長として家々の間に未だそれ程大きな距りもみられなかつたが、明治も後期から大正時代になると木工品の販売製作を通じて農家の階層分化も進んできて家々の浮沈による上下の距りがましまつた。特に経済的に下降過程をたどる家々が目立つてふえてきて村税等級でも最下層の増加がこれを証明している。

こういうなかで最上層は堅実な安兵衛本家（八百主）、ついで木製品販売者の安右衛門家（類造）と定八家（大正に入ると特に十年後は下向きがはげしくなる）、がよく、甚左衛門家（元信元三郎）文十郎家も亦これに近かつた。善兵衛本家（善一郎竹二郎）は販売に手を出し失敗があつて中層を上下していた。金左衛門家（金三郎）金太郎家は明治三十年代には既に最下層になり、大正の終りになって廃絶した。これより先助右衛門本家（助十郎）も明治以来はおちぶれていたが、明治期を最後に部落を去つた。又半兵衛家（宗平次）も明治二十五年すぎからは下向いて、四十年代からは最下層に沈没していたが、宗平次が昭和二年に死亡し娘婿が相続して難村してしまつた。又かつての最上層の長右衛門本家も地租改正後は漸く下向きになり大正五年すぎからは急速にこれが表面化して中層の下になる。この明治後半から大正期にわたる変動期をへて昭和に入る、木工の仕事の衰弱とこれにかかる山林労働や製炭などが現われたが、農村不況にぶつかり多くの農家が一層零落していくようだ。一〇年後村税二〇等級以下が急増するのもこの期の特徴だが、他方上層には現状維持のものも戸戸からみられた。安兵衛本家を除いてかつてのサオウケ七戸は当時は下向のものが多く、花敷マケの文十郎家（慶助）や甚左衛門家（元信）善兵衛マケの吉平家などが部落の上層に位していた。さらに戦時にはいつ昭和十五年と二十年の頃をみると、安兵衛本家がひとり最上層を維持して他家より卓然した経済上の地位をもっていた。ほかは、僅かに甚左衛門家（元信）の村税十一等級がこれにつづき多くは二〇等級以下の農家が大部分だった。この昭和十五年を境に助右衛門分家の定八家も草津に去つて、助右衛門系は全滅しつくした。（この家のあとは善兵衛マケの新分家平作の次男岩次が再興する予定という）

以上、明治から昭和の敗戦までの家々の浮沈を概観すると、まづ近世にはまだまだ旧い各マケの本家格（サオウケ七軒を中心にして）が多少の変動はあれ経済的社会的にももとの地位を保持してきたが、明治に

なって地租改正（山林原野はじめ耕地）や新たな生業の変遷によってマケや本分家などの相互間を中心的に家々の隣替がはじまってきた。特に明治後半から大正期にわたる経済的変動を契機に土地の動きも活潑化して昭和初期の農村不況とも重なって階層分化が進んで多くの家々が衰弱してしまった。上昇する家といふものではなく、一部の上層が辛うじて現状維持にとどまつたほかは、殆ど全戸が下降沈没してしまった。こういう動きのなかで終始現状を保ちつけた本家格は僅か安兵衛本家（八百主一政繁）にすぎない。近世に最上層だった長右衛門本家の没落の急進はじめ、徳兵衛本家も漸次下層に下降するし、善兵衛マケ總本家（善一郎—竹二郎）も亦昭和十年頃までは中層を上下しながら停滞していた。戦時中から次第に回復はじめているが、未だ旧位にはない。市郎兵衛本家も大正前半をすぎる頃から下向きになり、昭和十年すぎには最下層にさがる。分家の方も旧分家では善兵衛マケの藤右衛門家（伝作—利根作）が地租改正時から二十年代までは近世期の地位を多少なりと保持しうる経済上の地位にあつたが、三十年代からは下降してきて大正末からは下層に近い地位にまでさがつた。しかし戦後は再びもりかえしているようだ。同じ善兵衛マケの安右衛門分家も絶上のように部落では大正期までは上位をもつたが、特に明治末年から大正には盛時もあつたが、類縁の没落後の昭和にはいつてからは急速に衰微している。比較的安定した地位をつづけてきたのは中層では安兵衛分家の勘右衛門分家（勘十郎—貞次郎）であり、中上層では徳兵衛分家の甚左衛門分家（元三郎—元信）であろう。市郎兵衛マケの吉五郎分家（吉五郎—東作）も明治三十年代までは中下層だったが、明治末年から上向いて大正以来ずっと中上層を占めていた。尚近世では部落の草分け系譜ではなかったが、同じく旧いと見做される花敷マケの文十郎家（文十郎—慶助—豊市）は明治になつては経済的に部落の上位をつづけてきている。同じマケの増五郎家（増五郎—泰三郎—千代春）も経済上の安定した中上層を継続してきている。マケ別にみると、善兵衛マケが分家の数も多

く、旧分家安右衛門家藤右衛門家はじめ文右衛門家（文五郎—治作）掌右衛門家（幸一郎—團十郎）などいづれも部落の上層から中層をしめて榮えていた。特に安右衛門家藤右衛門家は總本家さえのぐ経済上の地位をもつて部落におけるマケのたかい地位を維持してきた。安兵衛系は三戸で、本家も分家もともに部落内の上位をしめ、特に本家が明治以後は部落の最上層として地道なコースをたどつていて、徳兵衛マケや長右衛門マケではいづれも本家よりは分家の方が優勢で、それだけマケとしての力は弱かつたようだ。ここでは分家が本家に代つて同族統制につとめるという事実も認められない。この部落では山本姓がいくつかのマケ（小同族）に分れているが、各々のマケはいづれもまとまつてはいるが、特別他のマケや他家に卓越した家格や経済力をもつ本家がないので、旧くから強い同族統制はみられなかつた。多少の上下はあっても家々が相互に協力扶助をしあいながら一体となつてマケや親類さらに村・組などを単位にまとまつてきた。

4 家族関係と家族生活

家族関係やこれにもとづく家族生活の様子を明かにするには、その根底としての家族の構成や機能を把える必要があるが、ここでは詳細な分析の方は省略して、ごく一般的なものだけにふれながら家族内の人間関係の実態やこれを中心にみた家族生活の様相を述べておこう。宗門帳がなかったので、近世の家族構成の詳細はのべられないが、明治の旧い戸籍からたどつてゆくと、どの家族もかなり員数も多く続柄も広い範囲にわたり、三、四世代もの同居の様子がうかがえる。子供が多いうえに、幾組かの夫婦の同居がごく一般にみられた。部落の人々の話のなかにも充分それを実証するものが多い。明治には二組三組の夫婦の家は普通で、三代三夫婦が揃つていたものも相当あつたという。例えば善兵衛マケの總本家（善一郎）をみると善一郎のぶの親夫婦のほか長男竹二郎たかのアトツギ夫婦と並んで次男平作げんの夫婦も同居してお

り、その子供たちと共に暮していたようだ。平作夫婦は分家するまでの期間、即ち長女すみえが二才までは本家に同居していたので叔父母甥姪が一戸の中で暮しており、所謂傍系の大家族では家族関係も仲々煩雑だったという。当時は嫁と姑とがせまい家族生活における複雑な心のやりとりからお互の間の理解は仲々むづかしかったというが、現在も尚この部落では嫁姑の仲は大変むづかしいとのことだ。又吉五郎家は当時(大正十年前後)三代三夫婦がそろい、吉五郎(嘉永六年生M8婚姻)うめ夫婦とその長男東作(M11生M36婚姻)ちよ夫婦更に孫夫婦としての幸内治(M30生、T9婚姻)とう夫婦がいた。東作の兄弟姉妹も多かったが六男太十郎(M24生)が大正八年に分家して傍系親は少なくなつた。又大正末年でも助右衛門分家の定八夫婦(M7婚姻)と長男建治郎(建宗)夫婦(T12婚姻)次男三平夫婦(T4婚姻)の同居する同族家族が続いていた。又、炉を中心とした位座も仲々きびしくまもられたようだ。これが自づと家族関係にも反映して家長やアトツギや直系親が重んぜられたようだが、これも庶民家族としての自然的な愛情にもとづく雰囲気といったものだった感じである。普通三男は嫁をとっても五六は親や兄のもとで手助けして子供が一人一人できるようになって分家することが多かつたと云われる。このような慣行は大正期頃までは県内の山村地方によくみられたところだ。これには家中心本家本位の生活様式のほかに、ここでも山村の経済の貧困が分家の嫁を本家に同居させた大きな理由だったと思う。隠居は家族の折り合いの悪いことが多かつたというのも事実だったろうが、特に各家で家族関係のまづさを示す隠居をさけるようになったのが主として昭和以後になつてからのことと思うと、山村の家族では長い間に亘って極めて自然に家族関係の調整が行われてきたようである。

一二、部落の婚姻

婚姻についての実態を知ることは部落の家族生活はじめ広く部落の社会生活の諸相を把握るために欠くことのできない基礎である。従つてここでは婚姻について(1)婚姻年令 (2)婚姻における男女の年令差(夫婦の年令差) (3)通婚圈 (4)婚姻の社会形態 (5)婚姻をめぐる諸慣行などについて述べておこう。

1 婚姻年令

ここでは三代にわたる家長と主婦のものについて調べた結果(第1表参照)をもとにして話そう。現世帯主夫婦、先代夫婦及び先々代夫婦とに分けてみてゆくと、今の代の夫婦の婚姻は昭和になつてのものが多いが、男は大体が二十五以上(三十才以上もきわめて多い)で、女は二〇歳(二三才が中心のようだ。今の主婦には十代で結婚したものはない。これが先代夫婦の婚姻では、明治年間特に明治三十年すぎからが多いが、男は二十才代で、特に今の世帯主にくらべて二十五までのものが多くなっている。女も二〇~二二才のものが多くなってきてている。男女ともに

今夫婦よりは婚姻年令がいくらか若かつたようだ。特に男女とも十代の結婚もみられ、女では七人もあったのは若い結婚のあらわれといえる。更に先々代夫婦になると明治二十年前ものを中心に明治前の婚姻のものをも含むが、年令傾向としては大きな変化はないよ

うだ。唯三十をこえる男の結婚が現世帯主や先代と同じくかなりの数あるが、これは山村の貧困

第1表 四代に亘る夫婦の婚姻年令

	年令	現世帯主	先代	先々代	先々々代
家 長	10~19	0	2	2	2
	20~24	4	8	5	5
	25~29	12	8	3	0
	30~	10	7	5	0
主 婦	10~19	1	7	4	2
	20~21	6	9	3	3
	22~23	8	5	4	2
	24	3	1	4	0
	25~	9(2)	3(0)	5(1)	0

() は30才以上の主婦の数

経済の現われであつて今も昔も変らないところだ。更に三代前の先々々代までさかのぼると、年令の不明のものが多くなつて全体的傾向としては把えられないが、事例がいづれも明治前のものとして男女ともにさらには幾分若くなつてゐたようだ。この四代を通じて一番若い結婚は勘左衛門分家（現在の貞次郎家）の先々代の主婦らよで、弘化四年（一八四七）に十四才で同じ入山の伊三郎家の長男寅吉十七才を婿養子に迎えている。

2 婚姻年令差

つぎに婚姻における男女の年令差を四代に亘つてみると、まず現在の世帯主夫婦の場合でも尚五才以上のひらきが多く全体の六割以上をしめている。特に十才もの距離のある結婚もあって昭和になつての山村の婚姻の一様相をあらわしている。（つぎに先代になると、さらに婚姻年令のひらきは大きい。十才以上の距離のものが多くなつてゐるが、現世帯主と先代までは妻の年上が極めて少いことが特色で、多くは夫が妻より著しく年上になつてゐるのが普通である。同じ都内の中央町では、近世後期から明治初めに既に結婚年令差が縮まつてゐるのにくらべて、この山村では長い間男子本位の結婚様式がそのまま残つてゐるうえにも示されていた。さらに先代までにさかのぼると、却つて五才以上のひらきが少くなつて四才以下のひらきの方が多くなつてゐる。しかし又事例は少いが十才以上の大きい年令差の結婚がみられる。十八才ものひらきの婚姻もでてきている。これと併せて先々代の結婚には妻の年上のものがかなりあることも一つの特色といえよう。各代を通してこの山村の婚姻における男女の年令差をみて共通にみられる特質は、今でも尚男女の年令のひらきが大きいこと、特に男が著しく女より年上の場合が多いことである。ただ明治二十年以前にさかのぼるといくつかの妻の年上の結婚もみられて昔の様子もうかがえる。従つて「アネさんヨメゴ」が案外に少く、特によく云われてゐる「一つ年上の女房」をよしとする考え方も実

際には明治後半から今まで殆どなかつたことがわかる。明治二十年以前に僅か一二の事例がみられただけである。

3 通 婚 圈

山村の通婚圈の調査は今までに随分行はれてきていて、一般に通婚範囲がせまく部落内婚の多いことが実証されている。この調査でも現在から大正明治と遡つて三代に亘る引沼部落の通婚圈をとらえてみた。結果は次表のようになる（第2表）。これによると、明治大正期では引沼部落内の婚姻が半数をしめていて、昭和になつて多少の減少はみたものの尚四割をこえている。更に旧村入山村の内婚では、明治期大正期が八五%で旧村内外に及ぶのは僅か一五%前後にすぎなかつた。後年にすぎなかつた。道路や交通網の拡張によつて旧村外が三割にふえてはいるが、今でも入山村の範囲内が七割をしめるという村内（部落）での婚姻が圧倒的に多い。かく通婚圈は極めて狭小であることはこの辺に共通にみられる。同じ入

第2表 引沼の通婚圈

明治	昭和	大正		昭和		和	
		引沼	入山	引沼	入山	入山外	入山
実数	37	60	10	13	22	4	23
%	52.9	32.8	14.3	50.0	34.6	15.4	41.1

第3表 和光原、根広の通婚圈

	和光原	根広	計	%
部落内	51	35	86	90
村内	0	1	1	0
近隣村	1	2	3	3
其他	3	4	7	7
計	55	41	96	100

北関東医学 1954 No.1 47P ポリ

べると、引沼より更に奥のこれら二部落の方が幾分部落内婚率がたかいようだ。いづれにせよ、この入山地区の通婚は七割も九割近く高い部落

(入山村) 内婚が今に行われていることは注目してよい。群大医学部学

生の調査によつて県内の他の山村赤城根村根利部落の部落内婚七四%に

くらべても和光原・根広は幾分高率のようだ。この調査で平垣村群馬郡

中川村浜尻部落(七%) 新田郡宝泉村西野谷部落(五%) にくらべて山

村の通婚率の余りの狭小さに驚かされる。さて何故このような部落内

婚が今に至る長い間に亘つて行われているのだろうか。これは村人の語

る言葉のなかにも発見できる。今なお「引沼のうちで縁組するのが娘

のしやわせといふものだ」という考え方方が年輩者のうちでは強いやうに

みうけられる。部落の人々の云う「近所に人がねえわけじやしない」と

いうのも一つの考え方のようだ。旧くはヨーバヒによる婚姻で内婚が多くなつてゐるともいつてゐる。とにかく部落内では結婚も経済的にかんたんにできることが貧しい部落の家々の暮らしでは大きな理由だつたであ

らう。「近くからつれてきておいて亞朝近隣に話せばよい」という部落内婚の手軽さはここでは今でも大きい魅力なのである。お互に熟知し合つてゐる家々の間で経費をかけず格式ばらずに婚姻が行われるというの

は、特別すぐれた家格や家産をもたなかつたこの部落としては、いかに

も山村の常民的な婚姻様式にふさわしいもののように思われる。

4 婚姻の社会形態

旧くから同部落内の婚姻が頻繁だったことは自づと同族や姻戚の間で

婚姻が累積されてきたことを示すものだ。

(1) 同族内の婚姻 明治から現在までの結婚を戸籍簿を通じてみると、

同族内の婚姻率は一、五%になる。婚出率に分けると同族間では婚

入率が婚出率よりもたやすく、婚入率は一三、三%である。マケ別では善兵衛マケが多く他のマケでは少い。善兵衛マケでも特定の二三の家々だけに限られる。総本家と安右衛門家や総本家と藤右衛門家の間では頻

繁に婚姻交流がなされてきた。大正期の新分家も旧分家との同族内婚がみられる。

(2) 離戚間の婚姻 同族間のはかに姻戚間でも結婚は仲々多い。いとこ

やまたいと同族の親戚がよくみられる。幸右衛門家と吉五郎家や勘右衛門家と甚左衛門家、安兵衛本家と市郎兵衛本家などの間では、明治後

も何回か婚姻がやりとりされてきた。明治以前に遡るとその範囲はさら

に拡大されるが、明治以後には特定の家同志の間に限つて多いようだ。こ

うして父方と母方の親戚がいりくんでいるわけだ。群大医学部生理学研究室の群馬県山間部の調査によると(北関東医学第四卷一号一九五四)

入山地区の和光原根広では血族婚姻率二三%になっている。

(3) 家格間の婚姻 この部落では経済的に又社会的にも家々の間の上下

の距りは割合少く、ただ本分家や多少の家の古さによるものが認知され

てゐる程度であろう。そこで本分家新旧分家などの家格のちがつた家庭の婚姻に特徴がみられるかどうか。草分け本家層(主にもサオウケ七戸を中心)では昭和以後の新しい家を除いてどの家とも結婚が行われ

ているが、特に明治前の本家旧分家との間が多い。その婚姻の特色として明治前の家々へ婚出し新分家から婚入している。昭和後の新しい家では旧い家々との婚姻はなく部落外と行われる。こうして結婚に当つては

昭和後の新米の家を別にすると家格によつての差別はなかつたといえよ

5 婚姻をめぐる諸慣行

出生はじめ成人婚姻などの人生を劃する生活様式は長い間かけて自然に形成されたものだけに夫々各地方々の独自な慣行に支配されて

いるものが多い。特に交通不便で邊縁な山村部落などでは明治になつても長く近世以来のしきたりが引続して存続していたことは想像にかたくない。明治後は婚姻をめぐる諸方式も新たに法的に規定されたものも随

分多いが、實際には昔からの部落々々のやり方によるものであつた。

(1) 婚姻をめぐる諸方式 部落内の婚姻が圧倒的に多かった山村部落では互に知りつくした家や人間同志の間のこと故、特に婚姻にも仲人をたてる必要もなかつたろう。先述のようにヨバヒによるものが先行し、若い仲間の了解を中心と進歩し、正式にも本分家や親戚が世話をすることにいたたようだ。仲人もこれらの人々がやつたので儀礼的な仲人への挨拶の如きはなかつたという。唯偶々赤の他人に頼んだときには儀礼的なこととした。とにかく簡単につれてきて後で知らせる程度ですませる一般的のやり方では親類以外は披露の時はじめて知る程度というものも当然だろう。従つて婚禮や披露も亦極めて簡単だった。カネツケの祝も別にせず、若衆頭も別に立合うこともなかつた。中宿も設けず、村廻りも他村よりきた時に限りこれをするだけで、里帰りも嫁娘及婿の親をまぢえて翌日よくやつたが最近は余りしないといふ。世長平京塚小倉で織をはつて子供にビギをやらねば通さないという慣習が実施されていいた。そこで仲人にたのんでビギをやる慣習がよく行われていたわけだ。さて婚姻の手続は全国的に近世以来一般に挙式後口頭で届けるのを原則としたが、届出を普通の慣行としたのが一般だった。ただし實際は一定時期をへて子供が生れるとか家族との和合の可能を確認の上ではじめてなされるのが普通で、最近のように嫁の入籍を挙式後すぐするようなことはなかつた。かくて事實婚と法律婚とのズレがあつたわけだ。又婚姻をきめるに当つては「ウヂスヂだけはいつた」という程度度であった。

離婚については戸籍をみても極めて少かつたようだ。部落内でよく知り合つた家の間で結ばれた婚姻だつたし、また離婚は狭い部落内での家關係の緊張をして互いに忌避したことでも離婚の少ない理由のようと思う。それに多少の財力の差はあっても大きな家格差のない部落内での家々ではお互いに生活様式のちがいがなかつたので、嫁としても家族との間のミソになる環境は少かつたようだ。勿論家族内の人間関係の錯雜した形態は外見上からいかにも娘姑の折り合いの難しさが予測されるが、山村常民の気軽さが案外に離婚などを少くしていたのではないか

と思う。旧くからとかく格式をうる上層の家や他村などの遠方婚姻の場合に却つて離婚が多かつたことをみても、この部落の離婚の少いことがわかる。

二二、相続と隠居

農村では「家」の繼承のために相続は重要な機能になつてゐる。従つてこのための制度としての相続慣行が多くつくられている。繼承すべきような大した家産もないこの部落の家でもその相続には昔から随分と骨をおつてきたようだ。このためには夫々の努力はもとより、寧ろまわりの本分家はじめ親類や村組なども一体になって互に共力し合つて來た。

1 アトツギ（相続人）

明治後のアトツギをみると、この部落でも原則としては長男のようである。しかし尚長男の養子も随分みられた。特に明治期には一般に婿養子が多く分家が少かつたのが特徴だが、村の古老たちも「明治二十年頃は男の子なら婿にいれるにきめていたが今では婿にはいることは喜ばない。少し位の家をたててくれて分家させる」といつている。男の子がない場合や子供が全然ない時には、本分家や親類さらには村から養子をいれて家の存続をしていくものが多い。自分の家の長男を養子にやつても本分家や親類などの「家」をまもる事例も随分みられた。ただ長男分家の事例は極めて少い。各家々の歴史のなかには一度三度に亘たる絶家の危機を村の他の家の血をかりて今日まで辛うじて「家」の命をつないできたものもある。本来やせたせまい土地のうえに常に凶荒にさらされながら、つきぎに生れる子供の大半を死なせて來ているこの部落の家々では、家の命脈を保つということは全く大変なことだったに違いない。旧く「サオウケ七軒」の七右衛門本家などは近世以来一度三度に亘つて夫婦養子をいれ辛くも現在まで存続してきた。しかし明治

後半から大正になると、アトツギさえなくて絶家したものも出てくる（金左衛門家、金作家……）。もともと大した家産もなく子供だけが財産であるこの部落では子供の多い家は一時は苦しくても結局は繁榮しているようだ。善兵衛本家やその旧分家更に勘左衛門分家などはその事例だ。善兵衛本家は経済的には中層を上下していた時代もあったが、多くの子供を分家させたり、他の家々ともよく縁組していたので、部落における旧くからのたかい地位を長く存続できたものと思う。

2 相続の形態

相続のしかたについて、先代の死亡による相続と先代が既に生前に隠居して相続する二形態に分けると、旧くは一般に隠居相続がよく行われたが、最近は殆ど少くなっている。現世帯主に関しては、死亡相続の方がずっと多く七割余をしめて隠居相続は三割にもならない。先代の相続では、反対に隠居相続が多く六五%で、死亡相続は三五%で少くなっている。現世帯主の隠居による相続の年次はすべて昭和以後で、六年（〇〇年）間のもの五事例だが、先代の隠居相続の年次はM2とT15にわたるもので、明治から大正年間に隠居もかなり行われていたことがわかる。先々代に遡ると、更に隠居相続によるものが殆ど全部になる。これらによって旧くからこの地方では隠居が相当長い間行われてきていて昭和になって交通や文化がひらけるに伴って消失してきたようだ。これと同じ吾妻郡中之条町などにくらべると、隠居相続が相当長く続いていることがわかる。中之条町では昭和三十年代頃までは隠居相続もまだかなり多かつたが、日清日露戦争以後から大正にかけての時期を境に急激に減少していく。とにかく山奥の入山地方では隠居も一般的だったようだ。特にこの慣行も旧家としての本家格や旧い分家格などでは他の家にくらべていつまでも行われていたらしい。現世帯主の場合でも善兵衛マケの藤右衛門旧家などは昭和二十年に尚隠居相続をしてし、同じマケの安右衛門旧家も昭和十八年に、安兵衛本家は昭和八年

に隠居がなされている。

3 相続年令

死亡による相続が多くなるにつれて、長寿の多い山村では普通に相続年令が却つたたかくなるが、ここでは隠居相続だけについてその相続年令の変化をみよう。正確には余り著しい変化はみられないが、先々代の場合には（明治初期から十年代が多い）、殆んど二三十才代が多かったが、先代になると（明治後期と大正期が多い）、三、四十才代が多くなるようだ。とにかく隠居は次第に遅くなり、次代の相続年令をたかくしていることがみられる。

4 相続についての慣行

ここで先にふれた家の相続のために本分家や親類更に村中で行われている慣行の実態を紹介しておこう。善兵衛マケ総本家の金治郎の兄で長男文五は分家の文五郎家をたてるため次男金治郎に家を譲っている（享和年間）。市郎兵衛マケ本家でも銀蔵の兄が花敷マケの増五郎家に入籍する。又同じマケの安右衛門分家でも吉平の長男八郎が分家し、三男類一がアトツギのところ戦死したので四男菊衛がついでいる。同じ幸右衛門分家も幸一郎の兄（長男）が七右衛門家に養子にはいっている。：長男で他家に婿養子や養子になっているものは郡内中之条町にも多かつたことが明治の壬申戸籍などからうかがえる。しかしこの入山地区のようにこの慣行がごく最近まで相当長く行われていたことは極めて注目すべきことである。

5 隠 居

相続の項で隠居のことも関連して既に述べてきたが、ここでは隠居という点を中心におよび相続との関連を考察してみよう。

(1) 隠居年齢 先代の隠居の年令をみると、事例が少ないので一般的とは云えないが、六十年代が一、七、八十年代が二、五十代である。安兵衛本家八百主が昭和八年五十八才で長男政繁二十一才に相続しているのが一

番若く、藤右衛門旧分家利根作（六十五才）や平作（六十一才）が夫々息子の重義と在衛同じく三十三才にゆすり隠居している（昭和二〇、一八年）。さらに先代の隠居年令をみると、六、七十年代である（息子は殆ど三十代が多い）。しかし更にさかのぼって先々々代の隠居年令をみると五十才代のものがかなり多かったのが目立つてゐる。これらはいづれも明治初年の頃であるが、二十代の息子に相続してゐる。今善兵衛マケの藤右衛門旧分家の三代にわたる隠居と相続の年令の変遷をみると次の通りである。（第4表）

年	次	隠居者		隠居年令		相続者		相続年令	
		S	T	M	8	先々々代	五十四才	先々代	二四才
20	11	·	·	先々代	七一才	先代	四二才	二四才	二四才
				六五才	現世帶主	三三才			

以上によつてみると、明治前には長く五十代或はそれ以前に隠居が行われたことが推測されるが、明治以後特に大正以後は隠居年令も遅くなるし、次第に生前に隠居するものさえ少くなつてきている。旧くはそれだけ労働もはげしく早く仕事もできなくなるためでもある。近頃では經營と財布が分かれ、経営の方はゆすつても尚生前は隠居せずに長く財布の実権だけを固守する年寄が多いのが農村のようだ。かつては山村では複雑な家族関係を含む大家族が多かったので、自ずと家族の折り合いも難しく、これを避ける方法として隠居慣行特に早期の隠居も行われたにちがいない。これも山村の人々の家族生活上の知恵や工夫として必ずしも借りだされたものであろう。

(2) 隠居の諸慣行 隠居すると別の小さな家屋に移るものもあつたが、尚同居しているものもかなりいたといふ。一応別居し別カマドにならざるを得ないが、それが許されない家がかなり多かつたこと

は充分うなづかれる。中層以上の家では勿論別居したが、これもカマド

6 分 家

同族やマケを中心の社会構成からみても分家は随分多かつたことはわかるが、これも多くの近世の江戸時代の旧分家が多く、明治後の新分家は大正以後のものであることは既に述べた通りである。明治時代は殆ど子弟を嫡養子にやるというものが一般慣行のようだつたし、またそれは經濟的事情のためといふことも充分うなづかれる。勿論近世においては尚ほ地帳などをみて本家格では今よりは相当な耕地所有者でもあつたからかなりの分家も出せたろう。明治後も尚一部の有力本家では耕地分与の分家もあつたわけだ。「これらの本家では財産（家産）を長男と分家の二、三男以下が六対四くらいにわけ、田畠山林を与え、宅地には家を建

ててくれ、更に親が嫁をとつて出した」とのことだ。しかしこの部落の一般の家々の分家では家ぐらい造つてやる程度が多かつた。一般にこの狭い耕地では所有を分割する余裕がなかつたので、くれづに当分の間だけ小作地に貸付けるというやり方が多く、小作料などは勿論とらなかつたといふ。中には分家とはいえ、形式だけのもので実質上の財産土地分与のないものが大部分だったようだ。部落ではこの二つを区分する分家の呼び方はない。

引沼本家分家共同の神社の中にある
今井善一郎 撮影



屋敷神、稻荷

ここでは分家から本家をよぶ際はトウジウ（当住）といふ（本家は分家（新分家）のことを新宅とよんでいる。善兵衛総本家などは大正以後も新しい分家を出していって、分家に対する財産の分け方も田畠山林屋敷はじめ家屋の建設も含んでいた。中層では尚家屋だけでもつくるというのが一般的のようだ。分家とは旧分家で新宅が新分家であることは明かであるが、この使いわけは余り明確ではない。

四、村落構造

日本の村落の構造は「家」を基底にした連合から成り立っている。この家連合のあり方にタテのつながりの同族とヨコのつながりの講組がある。従つて部落社会の構造は両者の比重によって規制されるが、一般に山村部落では同族の比重がつよく所謂同族型を中心にして展開している。村の構造上から二つの主軸としての同族と講組、さらにこれらに関連する姻戚親類などについても概観しておこう。尚社会学的視点からの専門的分析の詳細についてはごく一般的なもののだけを紹介しよう。（「山村の別民族分解と社会構造」）（群馬大学紀要人文学科編第十一卷第三号参照）

1 同族（本分家）

引沼部落が殆ど山本姓であつて他姓は来任者特に明治後の新来者である。入山村には広くこの山本姓が分布しており、他にも和光原京塚世立に多い。同じ山本にも幾つかの系統があることは云うまでもないが、その詳細は不明だ。「明けの山本」系統として、そのうち又いくつかの小同族が分化して、引沼にも既に述べたように現存の善兵衛マケ、安兵衛マケ、長右衛門マケ、徳兵衛マケ、七右衛門マケ、市郎兵衛マケ、花敷マケ等のはか助右衛門マケ、半兵衛マケ、金左衛門マケ、喜兵衛マケ等もあつた。ここではこのように「本分家」として家の系譜関係を互いに認めあつてゐる家連合」のことを「マケ」とよんでいるが、このマケのなかは全部が血縁的なつながりだけで非血縁の昔の奉公人だったものとか面倒をみたものとかは含まれていない。かくてこここの同族は純粋な血縁的集団であるとされている。特別優位のマケや家もなく、又それだけの経済上の基盤もなかつたこの部落では非血縁同族の成立する余地は

なかつた。入山地区では「仲間ショウ」というコトバがよく使われ、これが社会生活では極めて重要な「家」の集りとして大きい役割をはたしているが、この仲間とは本分家に烟威を加えた「シンルイ」仲間の意味である。この仲間の中心は勿論マケであるが、このマケには旧くからマケ単位の稻荷がいくつもあつて（善兵衛なり、徳兵衛なり、安兵衛など）、長右衛門なり、市郎兵衛なり等）、この祭の共同が今に存続してきたのは全く注目してよい。そのわり個々の家の屋敷稻荷はない。このマケの稻荷の祭は和光原や根広でも同じようによく行われてきたり。これを見ても同族のもつ本来の機能がよく存続している点で同族型の村であることは明らかである。最近はこの祭が組の行事に漸く変貌はじめ、両者の混淆した形で実施されているようだが、県内の他の山村にくらべると、尚その結合の強さが残されている。

註 引用では長右衛門稻荷も今は下出組の稻荷になつてきている（春田の初午）。花敷マケでは元々中組として組の稻荷祭の色がこかつた。根広では中村善三さんのマケと他の中村マケとが別に稻荷祭をするが、祭日はともに二月初午、黒岩マケも稻荷祭をやるとの事。和光原では各マケだけを春一月最初午二月最初午にやるという。中組の山本は旧三月十八日正王様の祭をするという。

(1) マケのつきあい さてマケのつきあいや共同をみると、生産はじめ日常生活や冠婚葬祭に至るまで多方面にわたる。旧くからの仕事のスケジュールを本分家の間で互に交換しあつて、作業収益の忙しさかりはもとより、山村の大仕事たる屋根替などでは大きい役割をしている。又盆暮の贈答も仲々義理がたく行われている。日常の出来秋の産物のやりとりもよく行われている。親類餅や魚類などを互に分けあい使つたりして、不足のものを互に融通し合つていている。歳暮には炭鉢みかんなどが贈られる。「えい」などもマケたちには限らないが、自然とマケが緊密に助け合つてゐる。冠婚葬祭のツキアイは一番親しく行われているが、別に明かにしよう。昔は「オヤヨビ」という本家が分家

や烟威先などを招宴する慣習もあったが、今では大体すたれています。これは尚ハルヨビといって正月節旬イオミのときの招宴とアキヨビといつて秋の収穫後の招宴とがあつたが、遠方のものは一泊したとのことだ。ここでは本家のことをトウヂュウとよんでいるが、分家は一般にシントーといわれている。村人が「秘密ことは親子兄弟の間柄のことであるが、ついで重要な事柄として財産については本家新宅の知恵をかりるという」如く、親子兄弟について重大事の相談相手になつていて、この本分家（マケ）は単に旧くからの家の系譜によるツナガリだけではなく其後姻戚関係にもなつていてものが多く、二つの結合契機がいまぢつて家関係が幾重にも緊密化している。しかもこの部落では僅かの土地貸借関係を主もとに本分家間で融通しあつていてそれが大部分で、そのためマケの間柄は極めて強烈になつていて。

(2) マケの構成 ここで主もなマケ別の同族構成の一覧表（第9表）をかげておこう。この部落の分家は主もに明治前の中古いものが多く、明治は培养者が多くて分家はなく大正以後に新しい分家が出ている。マケ別では善兵衛マケが最も多く十一戸（内一戸は他部落）をもつ。善兵衛マケは新屋組に根をおろしているが、たびたび述べたように有力な旧分家が擴つていて、ついで市郎兵衛マケ長右衛門マケが多いが、長右衛門系は本家が衰微するに伴つてマケ全体がふるわない。市郎兵衛マケは打越組、長右衛門マケは旧くからの下出組に根をおろしている。徳兵衛マケも近世以来停滯をつづけているが、もとの下出組から三戸が打越組に移つていて、安兵衛マケは旧分家一戸だけだが、本家も分家もともによく打越組に居をしつめている。七右衛門マケは本家一戸だけで、先述のように幾度が絶家の危機もきりぬけて今まで存続させてきている。尚このほか中組を中心に花敷マケと呼ばれている家々があるが夫々の家の系譜は明かでない。

とにかく入山村には山本姓が広く分布していて、そのうちにはカド松をたてる「官の山本」系と、たてない「明けの山本」系とがあつて、これ

らはいくつかのマケ(小同族)を統轄するイツトウー山梨県南都留郡忍野村忍草部落(古島敏雄編「山村の構造」参照)の存在したことを示唆す

第5表 同族機成表

同族(マケ)別	戸数	本 家	分家の成立年代				
			分家 総数	明治 前	明治	大正	昭和 戦後
善兵衛マケ	11	龍本家善兵衛	5	2	0	2	1
		安右衛門分家	3	3	0	0	0
		文五郎分家	(1)	0	0	(1)	0
		平作新分家	1	0	0	1	0
徳兵衛マケ	4	徳兵衛本家	2	2	0	0	0
		弥右衛門分家	1	0	0	1	0
長右衛門マケ	5	長右衛門本家	4	3	0	1	0
安兵衛マケ	2	安兵衛本家	1	1	0	0	0
七右衛門マケ	1	七右衛門本家	0	0	0	0	0
市郎兵衛マケ	5	市郎兵衛本家	4	2	0	1	0

本は僅かに三割である。最近は漸くたなくなるものがふえてきた」ということだ。和光原でも、山田、本多、霜田、山本などのマケの集團があるが、山本姓が一番古いとのことだ。和光原では上組に山田マケが占拠し、中組は山本マケが中心に霜田（二戸）も分布している。下組は本多マケである。凡らく旧い時代には中組の地が先にひらかれ、上組はあとから開発されたものではなかろうか。山田マケは旧くは信州下高井の堀村秋山を本拠として入山の和光原に入ってきたのは約四百年ほど前と伝

2 親類

この部落では本分家のマケが家関係の中核となつてゐたが、明治以降は婚姻や養子などの縁組関係が累積し合つてきて、マケと縁組関係などを併せた親類が所謂仲間ショウとしてすべての社会関係の基盤になつてしまつてゐるのが現状のようだ。一般にマケに代つて姻戚（婚姻養子縁組によつての家結合）の比重がましてきているなかで兩者ははつきりした区別がつづきがたくなつてゐる。こうして今では親類とか仲間ショウというコトバで村づきあいが語られるものが多くなつてゐるのである。そこでこの親類

えられているという。山田の位牌や墓碑で旧いものは草保年間のものであるとのことだ。近世戸戸時代前には橋姓を名つたが、徳川幕府に達して山田にしたといわれるが、教所だけはもとの橋とのことである。信州の本地では山田てい作が本家でイツケは二〇戸もある。この山田マケは上組の六戸だが、信州秋山の見玉不動さんをもつてきている。正月の行事もこの山田マケだけは今でも枝松でなく芯松をたて祝っている。霜田はこの部落には中組に二戸だけだが、根広と矢倉に三戸ある。全部で五戸である。霜田良平さんの話によると、先祖はノリキを職業としていたとのことで、今でも正月には仏にシメをはり一年中これをはささずにはっておくといふ。このノリキによって急病人も救われ春秋大病には随分繁栄したといつてゐる。本多マケは利根郡新治村の入須川の本多姓と同系で、もとは信州より入米したものだが、入須川よりもいたと云ふのが、入須川よりきたと云ふのが、本多はもはやされる。尚本多マケは下組に六戸中組に一戸計七戸であるが、本多はもと鍛冶職といわれ昔は熊野さんをこのマケだけで祭つていた。さて和光寺の山本姓だが、中組に七戸集つてゐる。本家は山本久松家という。マケの祭りが行なわれてゐることは前に述べた通りだが、この不動祭も昔修験院だつた山本千喜家が今でも中心になって世話をやいてゐる。尚子と嘉家の位牌には「社月西翁神逆位」とあって、裏には「慶長九年甲辰辰巳月十九日」とあるが、山本姓の在住年代の旧さを示すものである。

類仲間の種類分けによって村づきあいがどう違うかを明かにする必要がある。

(1) 親類の諸類型

まず親類をマケ（本分家）と姻戚に大別し、これをマケについては旧い本分家と新しい本分家とし、更にマケと姻戚とが重なっている家などに種類分けして調べてゆこう。この親類の区分によつて明治以後の各時代別の親類の数をみると、明治末年（四十五年）では善兵衛マケの継本家（戸主善一郎）が村中で一番多くの親類があつて十軒で、当時どの家も凡そ七軒の親類をもつていた。善兵衛マケに属する家々は親類のうち本分家関係のものが割合に多かつたが、他のマケの家々の親類は姻戚の数の方が多かつたようだ。又このM45年には本分家で又姻戚関係になつてゐる親類は一軒あるなしであつた。善兵衛本家では本分家五軒姻戚七軒そして本分家で又姻戚のもの二軒という割合だつた。これが大正末年（十五年）になると、親類の数もふえた。一般にやはり善兵衛マケの家々が他のマケにくらべて親類が多く、本分家を中心とした親類構成だった。継本家（戸主竹二郎）は十五軒の親類にふえ、本分家七軒、姻戚八軒、本分家で又姻戚のものも一軒ふえて二軒になつた。善兵衛総本家の親類構成にくらべて、徳兵衛マケの本家（戸主海苔）の親類構成は姻戚が中心で十二軒、他に本分家が僅か三戸にすぎなかつた。明治期が養子縁組が多かつたのに対して大正期には分家がかなり行われ、昭和期には又分家が多くなつたことが特色だつたが、善兵衛マケ以外の家々の親類ではやはり姻戚によるものが多かつた。戦後では親類の数もさらにふえて善兵衛マケでは平均十三軒、他のマケでは八軒平均になつた。親類構成別の特色は前と同じである。以上各時代を通じての親類の種類分けでは、善兵衛マケの家々（九戸）が本分家中心に次第に新しい姻戚がまきてきているが、他のマケの親類では縁組関係による姻戚の方が中心で、その数も明治から漸次ふえている。親類の数からみると、善兵衛系が各家々と多く結びついて部落に根をはついている。特に継本家を中心に一番多くの親類仲間をもつてゐる。他方経済的に優位にあ

る安兵衛本家は明治以来親類の数が一番少く昭和になって縁組によるものがふえて七軒になつた。

尚親類については、家の系譜を中心とする種類分けのはか親族としての家に所属する個人の血のつながりを中心とする親類の種類分けが問題になる。所謂「ミウチ」とよばれるものが出生婚姻祭葬などをはじめ広く村づきあいの親類の序列をきめる指標になつてゐる。血のつながり（血族姻族）は兄弟、オヂオバ、オイメイ、イトコなどで、ここまでくらいの血の範囲がミウチとして親しい間柄のグループにはいる。村の人達のよくいう「部落内はイトコまで」の言葉がこれをしてゐる。イトコをいれても部落内ではお互に相当の人数になるが、さらにもタイトコまでになると部落全体にも及んでくるので「イトコまで」を限界にしているのだろう。かくて普通は1兄弟衆、2オヂオバ衆、3オイメイ衆、4イトコ衆の順序に親族関係がつくられてゐる。これら親族関係のものに本分家関係のものを加えてこの部落の親類がつくられる。この親類は父方のものと母方のものとに区分されるが、家を主体にすれば分家はじめ縁出の父系が縁入の母系より優位にあって、旧くはこの駆別序列が社會生活でもやかましかつたが、今では特定の本分家を除くと父方・母方の別なく上の親族の序列によつているようだ。昭和になつてマケより姻戚へ旧い本分家より新しい本分家への比重がたかくなつてきた過程で家庭の系譜を中心とするつながりから個人の血のつながりを中心と親類の序列が考えられるようになつてきつた。

(2) 親類の種類別にみたつきあい

一口に「附き合い」といっても村中の附き合いの種類は色々で、夫々によって親しさの度合も亦具体的にちがう。又一般に親類附き合いというと、正月盆暮その他季節々のもの、冠婚葬祭のときのもの、普請や屋根替のとき、又病気災害などの場合、……以上は村づきあいの公事的な性格をもつものであるが、この外に日々往来を通しての挨拶はじめ種々の物品の融通貸借などに至る万般の場合で所謂私事のお附き合いがある。昔はこの両者の区別もはつきりし

ていたようだが、今ではその区分も殆どなくなっている家が多くなっている。一般に村づきあい、家づきあいで公私を問わず旧い本分家の交流が弱まって姻戚との親しい交流がましまして。公事のつきあいにおいてさえ、旧い本分家の地位は親類のうちでは低いものになつて現状である。新しい分家と姻戚との親しさの度合をくらべると、これは夫々の家ごとにちがうが、二、三の家々をのぞくと一般に姻戚の方を親しくしているようだ。ただ婚礼のイチゲンや葬式などのときに特定の家々で古い本分家を尚たてているのがみられるくらいだ。とにかく現在の親類つきあいの序列では、普通に新しい姻戚関係の家、本分家と姻戚とをかねた家などが最も親しく、つぎに新しい分家で、旧い本分家の親しさが一番うすくなつていて、これが藤右衛門家の香代帳（幕末から現在までのものが残っている）によつて葬儀のときの親類つきあいの親疎について調べてみると、幕末から明治十一年頃までは本家はじめマケうちが香代額も多く丁寧のようだったが、明治二十年をすぎると姻戚の方方が少しづつ額の多いものが現れてくる。これを昭和に入つた九年十二年（ものでみると、マケよりも香代を余計に出す姻戚の数ももとしてくる。尚最近のように非農家がふえてくると、旧い今までの家々とこれらの新しい家とのつきあいの問題もでてくる。非農家は村の祭や祭のお祭りだけはする。又組の葬式だけには加わり香典をつつみ、ひき物をうけるが、組内の婚姻、子供の誕生などには関与しない。又道ぶしんなどにも加わっていない等旧い公私行事からかなり自由な立場におかれているのは最近の部落の変りかたの現われでもある。

(3) 親類關係の諸慣行
ここでも他の山村社会でみられるように広く親類のことをオヤコとよんでいる。本分家と姻戚の遠い近いを問わず含めて親戚のことをオヤコというようだ。先にあげたオヤコビ（春ヨビ、秋ヨビ）に示されるようにマケの分家や姻戚先を含めて親類に対し酒魚をそなえて饗宴するならわしだった。

尚姻戚關係の慣行として嫁に子供（初子）ができる時に、嫁にやつた

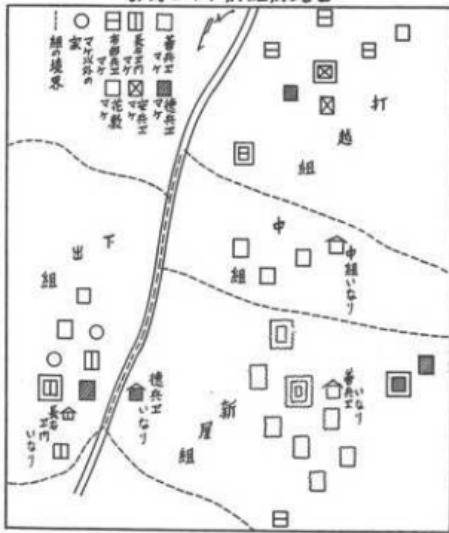
家が婚家に三人で必ず出かけて二、三日泊って帰り、帰りに子供のウブギをつくつてやるという。又しゅうとはこの初子のときに米やカツラブシをもつて嫁の実家にゆくという慣習もある。

3 地域社会としての村組の組織

(1) 講組としての引沼組 この部落は旧村入山村の一小字で、他の和田原・根広・長平・小倉・世立・京塚などと共に小字が講組（村組）をなす。冠婚葬祭はじめ普請屋根替及び農業労働などの社交共同の単位は旧村よりはこの講組が基礎で、日常生活の実際の親しい地域範囲はやはりここである。ここが講組として旧村の一単位の自治区であつて、組頭区長のもとに種々の諸機関があつた。

(2) 伍長組 この講組（村組）としての引沼組のなかが更にいくつかの小組としての伍長組に分かれている。これが下出組（七戸）新屋組（十一戸）中組（四戸）打越組（七戸）の四組である。近世以来明治の間はマケ（同族）を中心小組がくられてい、徳兵衛組、長右衛門組、善兵衛組、花敷組、中組、市郎兵衛組、安兵衛組の七組になつていて、これは近世の五人組制度のもとでつくられた組織成だったが、明治になって伍長組になったものである。長い間にはマケ別にまとめていた農家群も次第に家屋を移転するものが現われ、特に下出組にあった家々が上にあがつて旧いマケ中心の組の編成のもとでは新町村制下の行政上の伝達には不便をきたすことも多くなつた。かくて大正五年になつて地域本位の今の組の構成にくりかへた。従つて小組とマケとの関連は極めて緊密になつていて、下出組は長右衛門マケ、徳兵衛マケが中心だったが、今は徳兵衛本家が一戸あるだけで、長右衛門マケ四戸が中心になつていて。他是新米者である。ここには長右衛門マケの稱號がある。新屋組は新しく屋敷のひらかれた所で、善兵衛マケが中心に居をかまえている（八戸）。一番後からはいつた徳兵衛分家（二戸）が一番高いところに点在する。中組は花敷マケが居をかまえ、狭い窪地になつていて、打

都城のマケ別相別地図



越組は一番平坦のひらけたところで安兵衛マケ（二戸）と市郎兵衛マケ（五戸）がある。もとは今の下出組の北に助右衛門マケ嘉兵衛マケも含めて引沼の中心の家々が住居をかまえていたという。

この伍長組の機能では、先にあげた冠婚葬祭はじめ普請屋根替其他の村仕事、さらには農事の共同扶助などの昔からの伝統的な行事をよく果していることが指摘される。これらは講組の組員のもので小頭がその任にあつた。又、この伍長組が行政上の班組織にもなつていて、部落の主導のもとで班長を介して役場の諸事務の伝達がなされている。まづ駐むかららの組の機能からみてゆこう。この入山地区には各講組に色々な祭が仲々多い。入山中のお講訪様の祭（旧三月二十七日）はじめ引沼の氏神である弁財天の祭（昔は旧三月みのえ三日今は旧三月三日）など行われ、この日は引沼中の人が全部仕事を休む。尚この外旧五月一日には道祖神の

祭も行われていて、各伍長組だけのものとしては、もと各マケの稻荷祭が最近は組の祭として毎年春（旧の初午）に行われている。大宮さん（石宮）の祭は昔はやったが今はないという。これら入山中或は引沼中の祭には組頭が主宰して若者頭が中心になって寄附集め酒肴などの品物集めなどをはじめ祭の仕事一切の世話をしている。この日は今は赤飯をたいて個人々々の遊び日になっている。このほか山仕事が中心の部落では、その人たちが毎月十二日山の小屋に集りおみきや菓子で山の無事を祈る祭をやっている。この日には仕事を休み生木をきらないと云う。この人達は山の神十二様の講をつけて講中の行事をしている。尚この部落にはこの外色々の講が行われてきたが、そのうちには今はなくなつたものが多い。荒神講地神講も戦前まではあったが、今はない。大般若講（春彼岸にやる）も入山中にあつたが今はなくなっている。今もやつていてるものに毎月の二十三夜講、庚申講、秋葉講などがある。とにかく入山の各部落には夫々旧くからの色々な祭がつづいている。和光寺原の各マケの稻荷祭はじめ戸倉様（牛馬の神）、熊野様（嚴治屋の神）で、昔本多だけで祭つたが今では村中になる）、不動様（旧一月二十八日で山本だけだったものが全村全部になる）、根広でも中村二系黒岩マケなどとの稻荷祭のほか親翁様の祭（二月）をやっている。これらを通じて祭にちなんだ山村特有の生活のあり方が示される。組で重要な役割をになつていてるのは何よりも葬儀の組である。手伝は組全体でやるが、もとは引沼全體が組だけが加わった。今は出組と新屋組とが合して一つの組、他の組は中組と打越組とを合せたもので、引沼中が二系組になっている。婚姻出生の際には、組は挨拶や簡単なお祝程度で、主にも親類仲間のうちわの祝になつていて、これに対して普請や屋根替のような労働共力を要するものは旧くから講組中の援助によつていた。組にくらべて親類のスケップトの方が日数が多く義理も重かつた。引沼では部落中は三日間は腰牌（腰符）でスケットにでるようだ。組中で行われる村仕事も數々あつて年間春と秋の採草地の作業、ねどふみ、雪かきなど相互扶助共力の仕事は多い。

付

秋山記行抄
上毛温泉遊記抄

冬の和光原
市川昭次郎 撮影



秋山記行抄

秋山記行は、文政年間に越後の鈴木牧之が、越後と信州にまたがる秋山地方を訪れた時の記行文で、草津町、六合村にもたどりついている。文政三年九月の中にそのことが記されている。

この抄文は、宮本常一氏の厚意により、都九十九一氏が提出された資料をとりあげたもので、昨年信濃教育会より出版された秋山記行と若干異なるので、参考資料として入山の部分だけ記した。

予又問ふ、羽州秋田在より来りて冬籠りする狩人は、此長屋の内に借宿して、途なき所を上毛草津まで奔走するよし、子は此狩人に逢ふを力に訪ひ来れり。今猶漁して草津へ商ふよしと尋ねるに、湯守りは、湯に退屈せしゆゑ上ります、夜長に寛ぐ事無さんと云ふ。斯て宿して上り、炉邊に坐、湯守りが猩人より聞ける各地への里數、谷川の趣などを又尋ねにして、手帖に扣ゆ。(中略)

宿の親子三人は、農の食物から神饌にて、我等はゆふべの冷飯、手煎の茶に朝飯を終りし頃、彼の噂によれば、一人見えた。ゆふべ夜に入り帰りぬれど、夜も暫く待たせて、草津の間道、具さに聞きたしといふ、主が答に、かかる秋の日短に、二人を足留めさするは氣の毒なり。けふは此辺の深山へ狩に行き、曉景に帰ることなれば、一日逗留して、夜話續々間り給へといふ、狩人と再会期しがたし。ことに此番は、纏か一夜は名残惜し。主の勤めに逗留することとし、狩人にも契り、然らば是より薬師堂へ詣でんと宿を出づれば、傍に、始めて五間十間余りの板屋根の、二階造りの長屋あり。其内を覗くに、坪数多く、東の端の土間の樋なる處は、彼の狩人等が住居を見えたり。八九月より浴客なき故、二階も下も、皆空欄にして、表の方の戸を開くれば、風景慾の及ぶ所にあらず。実に三伏の暑さを遮れて、此佳境に浴したらんにはと思ひぬ。(中略)

夜に入れば、約束を進へずして、狩人一人のうち一人訪ひ来る。船は三十位とも見え、いかにも勇猛にして、脊に熊の皮を着、同じ毛の胸を前に置き、鉄張りの大煙管にて煙を吹出す風情、天晴なる骨柄に見受けぬ。此氣に始めて行燈あれ

ども、懇心一筋にて、明りも鮮かららず。予は小座敷の隅にて、此様子を窓ひ、持參の大蠟燭を灯し、秋田狩人を座敷へ招き、一通り時宜の挨拶を述べ終り、國魁は羽州秋田の辺りかと尋ねるに、城下より三里隔たる山里と答ふ。渠もそれより上州草津へ、此秋山より往來の事より、渕々輪踏の事、或は歐狩の事迄尋ねるに、一つへに答ふ。抑も此處より草津への往來は、水と氣節仲間のみの通路にて、尋常の人々の往来は中も思ひも寄らず。里敷を距ること十三里、此程通りなされし和山の方の渕川に添ふて、里地より山師どもか、櫻、椿はじめ大樹の奇なるを櫻に這入る故に、右の山師の道、幽かにあるのみ。確かに一里ばかりのうち、石川原伝ひもあり。又谷川に磐石盤々として、其岸は千仞の高さ處もあり。山路の鱗巻も駆はざむに、ほんとう渕といふあり。此渕蓋は、大なる渕二段になりてあり。いかなる洪水中に、水上より磐石流れ込んでも埋る事なし。此辺までは、山師の邁く入ること叶はず。此渕は、やがて草津と秋山の中と名付けて、此金より上へは登ること叶はず。此渕は、やがて草津と秋山の中央と、是より先き三里ばかりの間は、更に道とし、ふものなく、川伝ひの時は、右より左と浅瀬を渡り、又磐石の上をとび越す。元来我等は、飛鳥の如く馴れ居る故、若し踏み損して、渕水岩に碎くる白浪の水底へ落つる事あるも厭はず。又水底深くして、涉りかぬ時は、我等仲間にて、忽々に小道を開き、川岸へ、岩上より藤蔓の纏を下げ置き、是に縫いて登り下りをいたす。都て三里の間の勝景、大木・大石・大礫などは、秋山も及ぶべからず。是より二タ沢になり、右は魚野川と名付け、左は野尻川といふ。右の方、魚野川に附いて登り、其辺に我等の寝泊りする小屋掛いたし、岩魚とひひて、尺前後の魚を釣る業とす。一度に數尾を抱ぎて、草津の湯治場へ往くに、此鳴生魚の価、甚だ宜敷、又魚格別不足の時は、鹿・熊何に寄らず。歐を平に落して、其皮を剥ぎ、其肉なども濁けて此湯治場へ商ふ。仲間三人なれば二人往き、不景の時は一人商ひに往き、跡にて二人は馴いたす。又世帯道具とて別に自由の事もならず、米と塩さへすれば済む。かかるる深山の奥へ、二十日、三十日宛宿家を営み候事故、米と雖かに貯へ、穀を數々取り、皮は皮にて値になり、米肉を第一の食事にいたす。器の類は、鍋二つ三つ、碗は人頭程有ればよし。着物は羅、熊の皮の類、常に着たるを夜衣として臥し、寝袴一枚づつにて事濟ます。小屋は前に武本の枝木を立て折を渡し、前は高く、後は低く、九尺四方位にかけ、細木を渡し、大木の皮にて屋根は葺き、

後ろばかり塞ぎ、三方共に明け捨てにす。敷き物は皆草、獸を製して喰ひ候間、紋は居らぬど蓋は甚だ多く、谷川へ漁でもせぬ夜は、刺されて寝かねること多し。或夜川原の砂地を見立て、三人石を枕に臥せしことありしが、宵には屏風を立て廻したる如く岩石甃え、前はいと狭き川辺にて、水声涼しく、一睡に夜を明かしたり。然るに我等の臥したる枕の辺に、數十疋の猿が通りし足跡あり。かかる鬼も住むべき巣窟を、谷谷を奔走する如くに働く我等、猿など如何とも思はぬ勇氣に恐れたるん。音も全く通りしならん。又夜の漁は、松明にて、或は網を投じ、其場其場により、晝は釣を用ひ、簍、又は釣竿も用ひ。故に魚と歐は喰ひ飽くなり。都て川伝ひ、是々に小屋を掛け置けり。中津川の源、彼の魚野川の左に附いて、山師の道あれども、大樹の勝茂したる藤故、数里の間、日影見えぬ所は算ひがたく、行路の難渋、いはん方なし。又大麓といふあり。此瀬谷十間ばかりも有りぬべし。嗚呼、此勝景、一日なりとも見せたしといふ。是より二里登る山路のうちは、都て秋山の如く、大樹、大藪の奇景にして、折節は、纏かに山師の道あり。又山師の掛けたる小屋もあり。或は淵へ降りては道筋もななく、又は右よ左と用端を上り、是より黒沢といふ所へ出で、左の方へ附いて上る。此處は秋山より遠く見ゆる岩菅山の麓にて、此頂上には、岩菅大権現と唱へて祀れる神あり。山は信濃分にて、松代の真田侯の領地なれども、多くは上毛の者奉參す。是より又二里上り、山師の小屋あり。何れ山師の入る程の深山故、幾抱といふ大樹林の如し。是より蒸瀧もあり。此効寒にも終にも及ばぬ奇景にて、大岩の真中より漲り下る蒸瀧の潤は、藍色にして、底は千尋ともいふべし。其左右ともに千仞ともいふべく大巖壁ひかかり、其岩に何程といふ数知れぬ山石鳥、夥しく巣を構び、風景口には演べがたし。此辺にも、岩魚漁る為に小屋を掛け、何十日といふ日數も限らず含る。是より左へ附いて上る所と暫し、都て川辺に附き、水浅瀧になるまで躊躇ひ上り、又左へ一里半、山師の通路あり。是より岡へ上る。岩魚は、乙鳥瀧より川上にては更に取れず。是より上州草津の東に当りて、入山村といふあり。ここかしこの谷間に、五軒、七軒前後、物名は入山村にして、十一カ所にわかる。草津さへ深山の奥なるに、此入山はこと更ら深山の奥なれば、耕作も出来ず、年中の業は細工物なり。最初に山師の道と申すは、此入山の者が峠に奔走する道にして、草津へ商を持ち出す栗毛・曲物・下駄・枕・天秤棒・都て右肢のものを細工して交易す。渠も此密入山村には、昼夜

の差別がなく、夏冬共に腰根から沢山ある木で、大なる炉に、昼夜のわからぬ焚き、眠くなると、白昼にても、室内の者は勝手次第に寝臥し、夜半でも目が覚めると、秋山と同じく夜具もなく、帯した儘で起き上り、仕事を始める。此処の言葉、事と御宿みに嘶し申さんといふに、予は、其様に一遍ばかりの後話では、胸に留めかねる所以の如外より来る人に対し、口上の言葉は、貴大車と申す。

寺院方を、蔭にて其名を唱ふに、皆殿附なり。

丁の者を呼ぶには、はしといふ子供の隠れんぼを、かくねつこうと申す。

人より物貰ふ時、おいたましいと申す。

ともいふ。他人の事も、如此。

祖父の事を、ちつさむと云ふ。

うと申す。

お山の事を、ついでいたく、かとうといふ、いぶせいとも申す。

逃げたる者、次落の者を、ちんりんといふ。

地炉を、ちらりといふ。炉の上座を、ござといふ。

衣類・帶類美しきを、かざるといふ。

九

貴様と申す事をこなへしやうといふ。

にて呑む。杯などは更になし。

谷のつむり、沢のつむり、野の果をくつじといふ。下きのものや、童をしかるに、だまうめといふ。

神仏へ物供へる事を、しつぜるといふ。

童を叫ぶには、此うづめといふ。

十人が九人まで、空歌うたふ。

来る人に挨拶終り、又帰るを見送るに、おさらばといふで、四五間外へかけ出

すなり。

鹿の事を、かのふといふ。

次の間を、いといふ。路のとうを、さみじといふ。

男女のしゃれた形りを、しゆてうらぐといふ。

男女又は美しい見事には、みほらしいといふ。

山の峯のことは、此山のつつき、あの山のつつきといふ。

久しくて逢ふ人に、遙々ともいふ。

人の足の早きを、だつじといふ。

飯の事を、ごこうといふ。

餅、又は焼餅を、ぼちといふ。

右の外、家作り、髪形、風俗は、秋の夜の長しといへども、夜も更行くま

に、聞き渡しぬ。此入山より草津の間は、難鳴もなく、行程三里となん。又駄捕

る事も承りたしとぞふに、歎夏は夏はヒラ（平）といふを掛け。此ヒラといふ

は三尺位の高さに二本の又木を立て、柄を掛け、九尺位の直なる柄を、又上の柄

の下に渡し、何本も枝木を上に並べ、木の鼻を下の柄に掛けけるには、藤蔓やう

のものにて、其つる三角形になる小屋の下へ仕掛して、是を歎駄と申稱。又ヒラ

の上に、大石を幾つも置き、草木を伐り、蓋して、石の見えぬやうにいた。歎

の通り途とてあり。譬へば一方は巣葉え、又其辺りも大岩石累々として、一条の

通り道あるを見立て、最初駄の内への漁小屋の遠近に、幾つもかけ置く。ヒラの下

の歎駄の裏に、歎の足少し触りても、柄に仕掛ありて、一度に歎の上に落ち押し

殺す。漸くして要たら歎の肉は、三時に食事する狼の皮二

枚より、望なればと申して取寄せける、価も安く求めぬに、狗の角三本と、

山鼠の尾を只にてくれば。鼠はいかにも真平らに、巾広く、奇なるもの故、

此奇鼠の様子を問ふに、常の風よりは形大にして、脚の早きこと筋の如く、多く

は控木などを晒とし、容易に索めかねるとかや。報も終夜の廣、更に秋田在の誠

りも交らず、言語辭かなれば、一つも繰返して聞直す事もなく、持參の煎茶に、

貯へ置きし萬子箱を開き、短冊數葉書き与へぬ。尚時宣の挨拶に、以後三国街道

通行もあらば、継々止宿の事など約し、再会の期を譲りて別る。

上毛温泉遊記抄

—復軒旅日記より—

上毛温泉遊記は、大通文彦が明治十二年三十三才の秋に上毛の温泉をめぐったときの記行文であり、伊香保、四万、沢渡、草津をおとづれている。文中には、当時の温泉の状況は勿論、その土地の民俗なども注意して記述されているので、本県関係の部分のみをその全文を以て資料とした。

九日（明治十二年八月）晴、午前五時に馬を貰して立ち三國街道鳥羽村より左へ伊香保道に入る。柏木沢村水沢村を歷て、午前十一時半に伊香保なる木暮八郎が家に着きぬ。高崎より六里なり。是より此家に逗留して湯治す。十四日晴。船尾山の瀑布を観る。十八日晴。二ノ嶽の蒸湯を探る。廿七日。榛名山に遊ぶ。九月三日。再二ノ嶽の雄岳の頂に登る。此間に村中处处の名勝を巡る。同時に来り浴する知音の人は、島田三郎（元老院官員）、筑作賀祥、田中芳男、今村泰造（司法省官員）、森春壽喜機南、鍛松塘、岸田吟香、岩崎為成（宮内省官員）、北村重成（西洋料理精養軒主人）、落幡内朝等なり。伴ひ来きたるは親戚なる永井好信同秀達元祐信と画工なる長命安春にて、皆東京の人にて此の木暮の家に寓し、日日主人など集めて酒肴みかはし遊浴中の興もいと多かり。或日主人余に言ふに、此地の年々遊浴に来るる客人の数もいと多くて、此度は我に代りて遂げてよとの依頼もありければ、やがて主の乞ふに任せて筆取り、逗留の間に三巻の書を物し伊香保志と題す。初巻には東京より此の地までの行程記を記し、二巻には本村の地理古今の事、温泉の事並此の邊なる船尾山、水沢山、相馬ヶ岳一二ツ岳櫻木山等、処々の名勝を記し、三巻には古今の人の記行文詩歌文章など解めた

り文獻の微すべきもの絶えて無ければ彼は織り合せたるも、誠に足らはぬ著作なれど、主の悦びは伊香保なく、やがて板木に上すべしと書名も俗に通せんやうにして、表には伊香保湯治るべと題する事はなりぬ。画工長命晏春を滞留の間に東京より呼び寄せ、専々に景色など取らせる事はなく、此書はせしかば、此記行にも書中之事は譲りて洩らせるは其書に就きて知るべし。かくて退留はや三十日になんとすれば、旅の装して京へ帰らんとするに、同時に来り居られし田中芳男君が再とては思ひ出づまじきにいかに当國なる四方草津の温泉を遊歴せんはとの説ひに、実にそれも然る事なり、いざとて打連れ出立つ。

九月六日晴。朝五時に伊香保より人夫に手荷物振飯負はせて立つ、村より西北なる山をこえて十八町、湯中子村に出づ。村を過ぐれば沼尾川東北へ流れる様名の湖の末にて、川の此方は群馬郡、彼方は吾妻郡岡崎新田(伊香保より三十町)、茶屋あり。寛文後地の頃は此地に代官ありて、岡登治郎そこに居りと云。又相原の領とて白井の長尾氏の旧址あり。富村新田といひて本村の何にあるを知らず、或云、村上村の分村なりと。村に根古屋の城跡あり、天正以前新巻氏(五町田宿の西に新巻村といへり)金子氏(三国街道に金古宿あり)居ると云、夫より又山を越えて路れば吾妻川の南岸に出で五町田駅に返る(伊香保より四里半)。振り取り出でて朝駿とす。此駿甚貧にして人家十戸許、南山を白孤山と云、古へ長尾氏の古城址にして今畠となり稲荷の祠ありと云。又人夫を雇ひて出づ。駅の出口より路右に入る。左は郡町駅の渡し、吾妻川に橋より望めば前に村上村の洞山、左に同村の兜山見ゆ。橋を北に渡りて三町許山の麓に塙川の温泉あり、村上村の内なり。此泉は塙川と名づく。又極微に酸味あり。水は透明にして泉質は硫酸なり出で東に流れ、草津川・山田川・北より落合ひ群馬郡に入り東南に流れ白井村にて利根川に入る。長さ十六里中一町、草津の湯川の落合ふに依り、河原の石は赤く水底の小石は黒く、魚絶え棲まず、橋より望めば前に村上村の洞山、左に同村の兜山見ゆ。橋を北に渡りて三町許山の麓に塙川の温泉あり、村上村の内なり。此泉は塙川と名づく。又極微に酸味あり。水は透明にして泉質は硫酸なりと云。湯戸は田の中なる一戸の小茅屋なり村上正吉といふ者(元は同村の本明寺といへる)修驗なりしに難新の後は其を貢ひ移れと、これ有す。その背は崖にて洞山の樋なり。泉は崖に方三尺許の凹ありて湧く、水量甚少く温氣甚薄く、寒暖計を入れ試みたるに九十度ありたり。依りて家の内なる湯槽にたたえ涌かして浴す。最火傷に効ありとて来り宿して湯治するものあり。又併縫諸難病等も

宣しと言へり。

盛なる時は一時に二三十人もの宿する事ありと云。されど今日は客早現立ちたりとて一人も居らず。一年平均六百人の客ありとぞ。此泉其初を知らず、古へ此に小き石の祠ありて地を小堂が原といふ。神は温泉の神なりなど説くと詳ならず。泉の傍に寛文四年甲辰の小碑あり。塙川より西北へ四五町許ければ、三国街道北牧村より来る路東より合ふ。南牧村より中野条駅迄は吾妻川の北岸あり。土人は南通りを日陰といひ北通りを日向といへり。山陰を日のかけといひ山陽を日の面といふ古語に似たりと思ふもをかし。成務紀、隔山河面分三國県、随軒陌以定邑里、因以三東西、為三日延、南北為一日横、山陽曰、影面、山陰曰、背面。說文に水南為陰水北為陽とあるに同じ。此より中野条駅迄は吾妻川の北岸に沿ひ西北へと行くなり。路の右に觀音山といへり。村の西、路の右に駒形明神の社あり。夫等の遺跡なる舞。社の造も甚古風にて社の地は青山村に属すれば柏生ひ茂りて奇絕といふべし。岩の上に作りかけて觀音の堂あり、高く舞台作りにしたれど毀されたり。又行けば世界にて吾妻郡市城村に入る。延喜式拾芥抄等に上野国九牧の内、市代の牧あるは此地なりといへり。村の西、路の右に駒形明神の社あり。夫等の遺跡なる舞。社の造も甚古風にて社の地は青山村に属すればとも、市城青山昔は一村なりしといへり。青山村の北の背に青山といへる大山あり、頗る高し。其の北なる十二が岳最高し。奈久田川(土人はなぶた川といふ)橋あり、北より来りて吾妻川に入る。此川筋夏時は盤多く發合戦といふものいと目ざましといへり。此辺の山路の上より東南を顧れば吾妻川の南岸連山の缺けた所より水沢山(ツカ岳)相馬岳など突兀として列び見え、榛名山の前に梓山見え甚高し。伊勢町に入り六七町、町並をなせど賀駅なり。南に伊勢の城址あり、天正伊勢伊氏居れど云。名和抄吾妻郡名に長田伊勢(伊佐良)あり、伊勢郡は即伊勢伊町なり、或は山田川より原町西入まで伊勢の郷にして、又長田の郷は山田川より東中野北入なりとも言へり。又或云、長田は今の大井長野原と伊勢町の出口路の右に曹洞宗林昌寺あり。文安中建立水塔、一年再建なり。門堂に真田氏の六文銭の紋をつく。今は寺を小学校とす。十時半にして中野条駅に着く(五町田駅より二里十町町あり)。伊勢町中野条は家統きいて間に小川あるのみ。共に姓家などあり。殊に中野条は此近傍にして堅革なる駅なり、村に田畠多く駅に

商家も多く、近村の綿糸麻布、その外雜貨など月の一六に市立ちて賑はしく、土人は吾妻郡の都など言ひあへるも可笑し。又伊香保より此近傍すべて天保錢多く、物価も天保錢にて幾枚と定むるも異なり。駅の西南五六町反町古城址あり、古へ眞田氏の居る所、今鎮守太神宮ありと云。駅の西の出口にて路二つに分れ、西北へ行けば上沢渡村へ武里半草津路なり（南原町駅へ三十町あり）。北へ行けば四萬路にて三里半なり（土人は四里八丁と云）。馬を貸し昼飯販へて行く。四萬路に折れ、西中野桑村を過ぎ三十町にして弁天坂一町登り大なる原に出づ、三野原といふ。東五反田、西沢渡、北四萬三村入会の地なれば名とす。原中に茶屋一軒あり。今年県度より牧羊の地にて此地を候せられしと云。東に嵩山といふあり、五反田村に属し甚高し。山の上に城跡あり、唐沢氏という者古へ此に居れりと云。原路凡三十三町にして坂あり、天狗坂という。此辺より四萬村分なり坂の下り口に、福荷の祠あり。此坂路六町頗然し。下れば人家茶屋あり、小名君を尾の尾という。是より温泉へ二里八丁と云。此処より南へ踏あり、老里にて近く下沢渡村に出づ。四萬温泉より上沢渡草津へ赴くには、此地まで戻りて此路を出づるなり。此爲四萬川に沿ひて君尾橋あり、景色好し。四萬川は当村の北の山々より出で、南に流れ、山田川となり吾妻川に合流なり。此地より一里余の間通山東西に通り、走りて、間に磯に四萬川一条の谷水を通するのみ。路は橋を渡り川の西岸に沿ひて大抵登りなり。湯原人一家あり、駒岩と云立場あり（此より温泉へ老里八丁と云）。上に山あり、駒が岳と名づく、駒岳とへる岩ありといへり。川の向山の高き峠に、農家見ゆ。寺社平と云。又行けば秋葉といふにあり、橋ありて川を東に渡りて渡戸亦人家あり。午後五時に山口の温泉に着く。暫し田村八平の家の息ひて湯の熱戸にて、間に穂に四萬川の東岸に沿ひて人家十三戸あり。浴店は二軒にて田村八平、田村長九郎といふ。山口新湯両地の民皆田村氏にて、宗家は山口にあり、凡二十四戸あり。其中にて異るは関氏一戸あるのみ。その世系を開へど、皆旧地を失へりとて知れず、山口の湯は源義丸七ヶ處ありて、山の峠の岸等より湧けり。皆私有地にして浴場は七棟あり。皆路傍に設く。

山口の温泉。四萬川の東岸にて西より新湯入り川落ち合ふなり。源流の方を山口新湯の温泉。四萬川の上北地にて西より新湯入り川落ち合ふなり。源流の方を日向見川又表川ともいひ。新湯入り川ともいひ。新湯の温泉は此の新湯入り川の方の岸にありて急より上二町の間ににつき、两岸より湧き出づるなり。此辺地下二三尺も掘れば皆温泉なりと云へり。落合の地より川の两岸に僅ばかりなる平地あり、人家を構ふ。此地も戸敷數十三戸、浴店は三戸。上流東岸にあらはる田村茂三郎（四萬戸長）。下流西岸なるは関善平といふ。各温泉の涌く所に付れて家居するなり。源泉は浴場用ゐるもの田村氏に一處あり。一は岩間より出づ、岩根の湯といひ。一は川の中に出で水車にて巧にあぐ、滝の湯といふ。関氏に一處あり、岸に出づるを引く、明治湯と云。何れも泉の量多く大半は流れ川に付する。浴場も第根伊香保などとはばかり、皆路端に作りかけて内場は無し。此の外に上流の岸に湧きて直に川中に入るを川中の湯といひ、これは用ゐず、又落合の川原に湧くを河石にて開ひ池として入るあり、河原の湯と云。眼病に

よしといへり。すべて新湯の池は四方皆山にて高野山、小倉山など繞り、其間兩流域同して地勢縦に打開け川は浅く岸低く、水殊に清く橋など渡し、家は川に臨みて作りかけたれば、東京王子萬葉川の酒樓の状ありて、温泉場には箱根の塔の沢に似て水石の奇風致あり、愛すべし。泉質は好し、地勢水石の勝は奇なり、いかで此温泉今少し。人里近くあらましかばと思ふばかりなり。宿に着きて座敷に入れば、主出で来りて種々の話す。此より西北八町に蠟石山と言へる。依りて田中君と三人蠟石を出すと聞き一覽せんといへば主人導を為さんといふ。依りて田中君と三人連立て山に登る。半腹の坂路崎しく山甚高し。頂の腹面に坑あり、甚深からず、方間許に掘りて採る。石は色白きに淡み緑色を帯びて下等の品なり。面積畠算九百坪と云。先年より掘り採りしに、明治九年廃す。然るに去年の暮より信州高井郡平穂村（波村番野村の新称）の人、開東平といふ者、官許を得て再び採る。大切出して東京飯田町なる弘盛社といへるに送り、皆蠟石の石筆に製作し出すと云。一年に千百冊六貫目許採る。石の中に蠟色したる处もあり。此色の多くあらば美しき印材となるべし。今少し深く採らば尚美坑ともならん。山を降り宿に帰り家の前なる湯に入る。塩氣ありて微しく匂あり、焦げくさしともいはん類。湯は誠に透明無色にして針を中に投するも見ゆと人々言ひあへる。實に然り。毎夜旧き湯を去りて槽を掃除すといへば清潔なり。両地の湯、元來は甚熱く百七八十度に及ぶ。されど湯槽には寛にて増減し、程よくさまで入る。百十度位なり。晚酌に主人の話すを聞くに、此地古は河原にて湯小屋一軒あり。真田伊賀守沼田城主の頃、此地を領し、其領土地の庄屋共温泉を守り、浴客一人一錢づゝ取り十年平均取上にて、湯小屋湯槽など修理し、残金を領主へ上納す。十年の間は領主より修理料貸下げなしとなり。斯く元は河原の湯小屋なりしに、何時頃より駒入家も出来たり。関氏の先祖は、關勘解由左衛門といふ者にて、子孫初めは君の尾の下なる駒入戸といへる處に居りしに、元禄五年に此に移れりと云。田村氏も同時に少し早く移れるもの歟。真田伊賀守は留政にて天明二年（天保二年の誤なるべし、真田信幸天正十八年沼田に封せられ天和中城廃すとあり）断絶し、その後村は若鼻典と名なる（竹村左衛門無武平代官の始とす）。田村氏の祖先は甚九郎といひ山口の畠中に墓ありといふ。年代を聞き漏したり。其本宗は今八左衛門といひ甚霧落して山口にあり。此の外に村の家々に旧き事伝らず云々と主の話を記し、やがて要旨して臥しぬ。

七日晴。初余等一人旅立つ時先四萬（甲陽軍鑑天文十六年武田信玄信州上田原の戦に死没ひ三十日島の湯に入り愈ゆ。武田三代記天文十七年七月唐民の戦に信玄率衆なり直に島の湯に入り十日にして愈ゆとか。或は甲信の中にあるか、又夫木集しまのみゆ神祇伯顯仲の歌「よともに下にたく火になけれども志まぬみゆはさむるともなし」とあるを和調樂に此の湯とす。四萬歳の意味、或は要州（鳥根）に廻り、夫より沢渡の湯を歷て草津に行き（四万より草津へ十里、船路は吾妻川の南岸なる河原湯を過ぎて伊香保に帰らんと心に定めしに、前の夜宿の主の云、今度我等発起して四萬より西の山に三里の新道を開き、入山村に出で夫より草津へ二里的近道を作り過半は落成したり。今日入山村より初めて牛四疋牛一頭、信州の米を載せて新道を越え此に至れり、明日は其牛元の路を帰るべしと。依りて余等詔らひ、其新道と面白かるべし、その牛に騎りて行かんも亦一奇ならんとて主の人に話しあり。草津への路も五里なれば、何程の難所なるも昇立ちて得行かんべしと、今日は朝暗きに疾く起きて湯に入り、新湯の地を通り北なる小高き地に薬師堂あるに至る。堂は數十年前焼け失せて再建なく山の下の仮殿にませり。宿に帰り朝食食ふ。田中君は此より東北八町なる水晶山に水晶を出すと聞きて、案内連れて打立たる。余は此より北八町日向見山といへるに古き薬師堂ありと聞きて、一覽せんと宿の男伴ひて山に入り、日向見川を彼方へ渡り、又此方へ渡りて薬師堂に至る。此の処日向見川の源流へ西より又一条の溪水落合ふ。その落合の間の山を日向見山といふなり。堂は西の崖にあり。日向山定光寺といふ。土人云、何時の頃にかありて、堂は西の崖にあり。日向山定光寺といふ。土人云、何時の頃にかありて、其の地に落ち来る。其の地の内に納めたる守本尊なる薬師にして黄金仏なりと云、之を祕仏とす。余が至りし時は守備外出でて居らず。家の老嫗に請ひて像を借り内陣に入る。祕佛は左甚五郎の作なりなどいへど、金剛なる金切りのぼろにぐるぐる巻きして思ひ、丈二寸許黒くして鐵仏かと思へば足の彫れたる兎頭の光あり。又上杉謙信の納めたる雨露鏡の香炉ありと聞きしかば採りたる、古く毀れたる鐵香炉の灰と埃とに塗れたるあり。是なるべくとも思はれず、後に聞けば本尊等の眞物は盜を恐れて近地なる何某寺にあづけおけりと云。今の守備無賴にして什物など売代なすと聞え、又堂内も何時とて掃除せし事もなく證明なども絶えてあげずと。堂内の暗さ、きたなさ、いはんやう

なし。然れども當は土人鎌倉時代の建物なりと言ひ、方三間許、いかにも柱井に天井の板など鉛なき頃の製と見えていと古し。天井板に画きし竈など古奇なり。又堂内に幾つともなく小き古仏像あり、皆甚奇にして且古色あれど、皆掛け損じ彩色剥げて全きは無し。但し壁板は桃敷居唐草などは近き頃の修復と見ゆ。屋根は茅葺なり門も茅葺にて去年修め作られたるに、棟板に慶長の年号ありしとなり。門の額曰向山定光寺と一行に刻る書も古く、竈の刻物金箔など時代あり。旁なる湯手の家にあり。堂の下より湯泉三ヶ湧出。此にも湯槽を設けて人を浴せしむ。厭病に宜しなどいへり。熱くて透明なり。すべて此の崖下の川岸に湯泉出づる事數ヶ所あり。土人の云、此日向見山より北の山中一里に木根の宿といふ処あり。古は四萬の東の方の山に鎌倉より三国路ありて、木根の宿より^は越後の浅見に出でたりと。木根には今に人家の跡を存せりとぞ。その頃此日向見山は其筋にてありしとなり。されば堂の古きも故ある歟。後に今に三国峠の路出来て此の路塞るといへり。險しきが故なり。天正年間、長尾氏比路より上野武藏に出づと物の本に見えたり。その頃まではありしか。されど今三国路を天正より前に開けたるなり。稻裏山は木根の宿の北の背、信濃の界三国峠の西南にあり、山の頂に小石の社あり。今も土人時々登る。史記、元應五年五月廿五日、上野国正六位上稻裏地神に、徒五位下神十二等を授くとあるは此神なりと云。此深山に此神あるは古の鎌倉路なりし証ともすべき歴。此より南なる原町^は稲裏地神あり。里宮なりと言へり。四萬川にて湯布多し。日向見山の奥に眞谷^はの滝(高七丈二尺九寸)日向ノ滝(高四丈八尺巾三寸)あり、又新湯入川の上に委煙ノ滝(高四丈二尺巾一丈八尺)あり、下流底鹿の下に途中ノ滝(高一丈六尺)あり、その下に洗沢の滝(高四丈五尺巾一大二尺)あり川にやまめ、いはな等の魚あり。其他此地産物なし。余が來りし頃、生椎茸多く出づ。地に僅許の晶あるのみ。米は皆信越より来り、他の雜物は高崎より来る。湯晒しの干飯としを売る。前いへる蠟石を盛に採り出さば一廉の產ならん歟。日向見山より宿に帰れど田中君は未帰らず、依りて又湯に入る。四萬の湯には蒸湯といへるあり。浴場の内にて湯槽の旁の一方に高さ三尺許なる袋戸^はのものを作り列ね、下に熱湯の流れる上に簀の子を渡し、むしろ敷き内に入り戸を閉ぢ、木枕ありて伏し、背より蒸すなり。余も一度、試みんと入ったるに感覚などは忽に緩ゆべしと思ふなり。但し随分に苦しく余は二三分時間にして喉を発したれば、肺の閉塞せんを恐れて出

でたり。此の蒸湯の事は平沢元澄が漫遊文書に委しく記せり。午前十一時頃田中君山よりやう／＼帰られたり。早星の飯食ふ。水晶山は基礎しく水晶は山腹の大なる岩につきてあり、打抜きて採るといへり。皆細小にして大なるもの牙程なり、用には当らず。大く缺けて床の間の置物などとすべし。尚尙深く掘らば美質なる岩を出すべきか。岩の質を見れば珪石にて却りて金銀坑にあらざれず。尚尙深く掘らば美質なる岩を出すべきか。岩の質を見れば珪石にて却りて金銀坑にあらざれず。主に朝に牛糞を撒る。古く撒けたる坑の跡にて草木も踏みぬきせんを恐るのみ。川筋に牛糞を撒くの事告ぐるを忘れたりとて牛は疾くに立ちたりといふ。例の牛の事なれば未遠くは行かし、いて追付かんと幸に牛糞の一人、未此に居りしに荷物負はせて宿を出づ。新道は新潟より西北の向きにて崖に依り新潟入川を徒渡りし川筋に沿ひて源に溯るなり。新道の方向新潟より入山村へ西稍南なり、水を渡り小坂を昇降する事三十町許にして大峰にかかる。間の倉山と云、四萬入山の村界の高山なり。誠に此辺は信濃界の深山幽谷始開闢以来、無人の境なるべく、姉の坂路迂回旋して息もつきえぬ程の難所なり。姉の頂は此日霧靄四塞して遠く望む事能はず、姉の路凡一里には遠しと見えたり。下り坂より入山村に入るに路未落成せず、只茅隠窓を切り払いたる許にて草木も踏みぬきせんを恐るのみ。少し下りて溪水あり、辛うじて喉を潤す。姉石と水晶と許多を產したらば、姉の坂路迂回旋して息もつきえぬ程の難所なり。姉の頂は此日霧靄四塞して遠く望む事能はず、姉の路凡一里には遠しと見えたり。下り坂より入山村に入るに路未落成せず、只茅隠窓を切り払いたる許にて草木も踏みぬきせんを恐るのみ。如き牛糞も跡路にて息切れて、下坂は路端の木切りて天平桿とし、やうやうに肩げ行く。牛を追はんと引かれて何程行くも声だに聞えず。入山よりは善光寺路ありと聞き、牛に引かるも可笑し。尚追ひ行くに山半下りたる頃、遂に牛追ふ声聞えたり。趙しくて坂をひた降りてやう／＼追ひつく。伴ひたる牛糞も喜びあひて、乃ち荷物を牛に負はす。牛は屢路なれば四疋共に空身なる。余も殊に疲れれば其の内の一疋に騎れり。田中君は乗じて尚歩まる。漸く行きて山を下り、溪谷あり、白砂川と云。渡りて又山に登れば大なる高き原に出づ、京が原と云。此地も今年典官の來りて牧場に検せしといへど、水乏しければ如何にあるべきか。原路二十町許過ぎ又降りて水を渡り、又登れば初めて畠あるを見て、やう／＼にして和光原といへる処に着きぬ。現此の四萬よりの新道は三里といへど余が来りし心にては間の食の峠を村界として前後一里づつありと覚えたり。路は未成らず、且如何にも難所なれば此地に着きたる頃は早午後五時半なりき。此新道に牛は昨日始めて通りて水を渡り、又登れば初めて畠東の人居なり。家の数二十戸許あり。伴へる牛糞どもは此の地の者なり。牛に騎

りたるまことに怪しき家に宿を入れらる。家の主の酒飲み居たるを見て、求めて飲む。看なきやといへば無しといふ。強ひて求めれば、やがて湯に落し味増して、米麦に醸元豆の薑のままなるをませて雜炊として出す。田中君は食はず、余は腹減りたれば二碗を喫す。香の物はといへば、生なる野荷の子刻み醤油かけて出す。此入山村は上野国の西北の端、信濃に界し、南北十里東西六七里なる大村なれど全村皆深山幽谷にして、北は信州より直に越後に通り、彼の異風に名高き越後の秋山の里も此の村の北なる野反の地より北に流るる川の两岸にあるなり。当村も常に他の人の入らぬ處にて異風多し。一村百七十戸八百余戸小名八箇に分れ、多きは四十戸より、少きは十戸位。皆谷間の傍ばかりになるなれの地に畠などを作り、丸々に集り住めり。白砂川此の山脈の谷より發して南に流れ、村内の衆水を併せて草津川に合ふ。全村の山皆肥えて樹木多く材木に伐出し下駄の甲など多く出で、地高寒にして固より山谷あるのみ田畠無ければ飢を業とす。熊鹿猪狼あり。羚羊兎猴多し、去年の雪中に一洞穴より熊三匹獲て価百円程に売れたりなどいへり。風俗の古撲奇異なるは、村中に夜具持てる者は數ふる許にて家々の席毎に炬ありて、闇より薪に乏しからぬ地なれば、夜は衣着たるま終夜背をあぶりて臥す。又一家内に親子夫婦兄弟各寝て足を異にし、今尚陰唇を用ひ、益幕五節目には親子夫婦の間違など互に贈り出すと云。異なりといふべし。村中に互通する者は舟乗りで夫婦にはせさせず、依りて私事少しと云、是は良風俗といひほくべし。又近年までは元結といふものなく、皆緋縫にて髪結へりと。客来れば「デンジ上ヲタグロ巻」といふ。席に入り坐れといふ意なり。「デンジ」の意解げがたし。「トグロ」とは腰坐の意ならんか。往年草津の旅失したる頃、区長の宅へ夙急に見舞ふと村の男女揃の衣服にて来る。何かと聞けば、羚羊の毛皮の袖無を捕へ着たりと云。山民の異俗想ひやるべし。此地より草津まで幾里ありやと宿の主に問へば、西の方にて三里ありと云。時に日もはや暮れんとすれば急ぎて馬二疋はんとする宿の主人、家を廻り求めしに一疋の外なしと云。明朝は朝霧にも出立させ申さん、今夜は泊りてたまはれといふ。日は暮れ、路は難所にして遠し。さりとて此地には宿るべからず、困じ果てたり。さればとて詫びて泊めんとはあらじなど心を苦め居しに、田中君はやがて馬なくは人夫雇ふべし、いかにあるとも草津まで行くべしと言ひ放たれければ、やがて馬届り来れりとて支度。夫より一人打乗りて此地を

立ちちける頃は日は既に暮んとす。谷川に橋二ヶ所あつて彼方へ渡り又此方へ渡る。路は暗し、橋の状能く見分けねど頭長くして下に橋柱なく巧に架けたりと見えたり。引沼といへる處にて一人の馬子提燈取り出でて人家に火を求めて点す。左なる川の邊に彼方へ燐火見ゆる處を問へば花敷といふ地なりと云。そこには温泉あり、小学校あり。是より川下一里的庵徳といへる地にも温泉あり、戸長役場を置くといへり（両処の温泉共に硫酸アルカリ、碧玉、塩酸鐵にて研磨精物によしと云）。余が馬索けの男は元は戸長を勤め、今は其の姪の某戸長なりとぞ。此の男少しは文学読むと見えて、越後の秋山の話したりしに、僕も北越雪譜を所蔵せりなどいふ。後に聞けば村中の物語なりとぞ。引沼より程歴て京坂といへるを過ぐ。此の間前後の路はすべて崎坂にて登りつむれば直に降り、谷に降りつむれば直に登り、凡昇り降りする事三四度にして最後の谷に人家ある処を品木といふ。提燈一つにて路暗く其難み、時に雨降り出しければ、此處にて一人の馬子人に入り提燈又一ツ借りて行く。谷川を品木川と云。左に流るる川上は大沢といへる処より来るといへり。渡れば坂ありて、登りつむれば入山と草津との村界なる桃あり。是より高く広き原に出づ、草津の原と云。原類に隣りて原路甚寒し。余は伊香保を立ちける頃深山の中如何に寒くとも夏の事にあれば單衣着て、下に莫大の股引一枚穿き、是も伊香保にて鳥田三郎ぬしが、山路は草深からんとて借されしなり。上に拾羽衣ひたらんにはなどか防がざらんやで山に入るに寒さに堪えず、別に寝衣に携へたる单衣一枚重ねたるも尚寒く、依りて田中ねし甘肃に来られし筒靴の肌着あるを、田中ぬしは洋服なればとて和光原にて肌着を借り得て此に来つるに、此原は深山中なる高寒の平地なるに、夜も深け雨も烈しき事なれば寒甚堪へ難く手足冷えたり。後に寒暖計を見たるに六十度なりき。高寒思ふべし。原路二十町許にして、夜の十一時に辛くして草津の湯元山本十一郎が家に着きぬ。途中の寒に感冒し、体も疲れぬれば、旅店につくや夜具引きがべき、その夜は湯にも入らず酒飲みて臥しぬ。田中は元來現今世に名高き博物学の學士にして、此度の遊歴も專門植物の研究の為めなれば、今朝は四万にて水晶山の峠を涉られ、夫より入山村の新道難所四里の間を歩まれ、途中何くれと目に触れる草木石塊など皆採りて歩み疲れたるに、宿に着きて夜深くるに尚草木の葉は一々に紙の間に挿みて押し、石塊などはそれぞれ紙に包み分けらるなど務めてするにはあらで、樂みてするを見受けらる。其學に志す學士は斯くありてこそ其道

に明に且博かるなれど弱に感歎するばかりなりか。くて二人眠につきぬるは午夜の頃なりき。

○高崎

三里廿丁

神山

三里

三の倉

廿七丁

椎田

一里十七丁

戸

川原湯

一里

長野原

草津

一里半

伊香保

五丁田

一里半

中野条

二里半

一里

幕坂峠

小雨

一里

二里

沢渡

一里

三里十八町

草津

一里半

一里半

五丁田

一里半

一里半

一里

より、世人も酷なる湯の適当せる病の外體に浴すべからざるを知れるにや、稍滅じて一年平均一万入盛なる時は三五千人一時に宿する事ありと云。本年も國中にコレラ病ある故か近年にて盛なりといへり。客は東京の人昔より多しと云。但し此の地の浴家は盛夏四ヶ月の間にて、其他は土人皆空手にして日を送り、殊に冬は寒さに堪へず冬住にて皆日向き籠の里に家居を作りおきて、十月より三月までは住處を捨て冬住に移りて住み僅に残る數十人のみ。然るに近き頃は種々に工夫し、水豆腐水餅水蕎麥切練饅頭の細工などにて冬の間の業と殊に數年来は馬鈴薯を盛に植え、葛粉を製する如く粉を製し、滓にて焼餅など醤々産業を起し、これは今は冬も百余戸は地に留るる云。氣候は暑中は日中九十度位に昇る事もあれど其の間僅に一時半許にして、朝夕七十五度位なり。又極寒なれば十五八里あり。伊香保よりは十三里なり。地勢は尤来幅一二町長さ十五六町也あらんとおもふ。河原にしてその河原の中、何地も皆温泉湧き出で湧々たるあり、満々たるあり。下流は両山共まり一条の湯川となり白砂川と合ひて南に流れ吾妻川に入る。是地勢の大略なり。その古此の河原の地の下の方四五町許の処に置土して僅ばかりなる泉は押へ、その上に家居せらる。尚土を穿ち湧き出づるもの数处あるを浴場とするなり。涌口に就きて湯槽を設ぐる事十数处にして町家はそこのあはひ／＼に町並直ぐ建てつらね、月三町方もあるなり。この故に地下は度に降る云々本村の村高は五十石皆宅地にて村内山なく、牧場等あれど皆は轟地黒駄にして古墳開きて、大根蒲麦櫻馬鈴薯などのみ作る。米は皆信州地より入稚貨は高崎邊より来る。物価の高き事驚くべし。ほねぬき泥漿の鍋に煮たるもの、伊香保も何より此處にても直に湯川といへり。東京柳川屋の名高き知らぬる。娼婦は無し、芸妓は僅一人あれば流行る云。料理する家も四五戸あり。和の湯金比羅の湯などいへる湯の邊には、楊弓場——市中に三処——などありて、譽ばなる女出で客を呼ぶ。町の西の隅に薬師堂あり、建築古し。傍に寺あり、今は学校となる。東の岡に白根神社あり、郡社とす。村の北三里なる白根山にも白根神社あり、その里宮なるべし。白根山は高三千尺硫黃を産する處七千四百坪、一年八千貫と云。此の温泉はその硫黃の脈に源すと見えた。白根山の東に北の方信州高井郡芦村へ越ゆる路あり、渡跡七里と云。信州の人は殊に此路を頼む。此路昔よりあり、初め入山村より此路を越ゆるを三等難道と定めたりしが、止みて今、草津路の方を修むといへり、草津町の北の方高き岡の上に琴平神社あり、眺望好し。夫より周りて北の方は即前にいへる河原の源にして市一二町長七八町許、一面の小石河原にて河原の中急として、温泉の沸かざる処なし。此の河原を鬼の温泉といへり。是等の湯は皆一条の溝に集り市中を過ぎ、市中なる温泉の末と合ひて湯川となりて南に流るるなり。河原の源なる岸の岩に円き穴ありて湯の湧くを鬼の釜といふ。今は埋れたり。その上に賽の河原とて大石多数あるに小石を積み上げたる処なり。大なる岩の人の手して押せば動くあり、掘き石と云。その上の方に鬼の角力場といへるあり、平なる地に天然に土俵場の跡あ

じて此の危厄を踏めり。強ひて制するも遂には此地繁昌にも関するがと、今は默許の要なり。此の熱の湯は市街の中央湯垣の西北路旁にあり。涌口の旁に浴場を作る。湯槽方三四間、中を三槽に分ち、極めて熱きは涌口にして次第に稍ぬるし。泉色透明にして硫黄臭じ浴する時は數十人擁ひて入る。浴者の中に久しうく浴治して熱に慣れたる者頭目となる。率無病の者なり、衆人これを隊長と呼べり、隊長の合団に入り又出づるなり。浴者隊長に踏送る。然せざる時は種々に妨げ或は熱に苦ましむる者あり。隊長は其の初来り秋の季に財を蓄へ更に人に選びて世話人と称せしむるより云。然るに今年よりは其の弊を改め、更に人に選びて世話人と称せしむる所ぞ。初めて此に来る者は失。此湯に入り慣れて、次第に此湯に移るなり。此の湯夜は新宿終夜流れて朝には新宿交番す。早朝浴場を開かんとする時、隊長先出でて湯の差口を塞ぎ訴を撃ちて人を呼べば、市中遠近の旅店より浴者若衆來り集る。其体を見るに身の内皆爛れて陰部殊に甚しく、皆詰などあてであり、詰て汗津の湯は蒸氣熱きに係はらず、湯にて爛れ湯にて治すなり。一、皆よろ／＼と歩む。男女裸体となり交り騒がしく入り立つ。初め各一枚の板をとり湯槽の四辺に立ち、声立てて湯をかきませ熱を殺ぐ。これを湯を揉むといひ板を揉板といふ。揉む事凡十分間許にして隊長掌を鳴らして止むれば、長き板を数枚槽の上に亘し皆板の上に構まり、柄の短き柄杓にて皆俯して頭部に熱湯を汲み上げ／＼注ぐ。初めに斯くして後に入らざれば、体のみ熱して眩迷すと云。頭に庄村凡三百盃程なるべし、皆頭も面も真赤になりて潔であげたるが如し。隊長又柄杓にて湯の乾を叩けば皆湯に入るの裝を為す。弱き者、新参の者は足袋をはき、又は肩身上に布など纏ひ皆持ひて、板に両手を突き張り足りそろ／＼と入るなり。入る時に隊長聲をあげて「三国の名湯——」といへば皆異口同音に「有り難い」と和す。隊長を首として一隊長は湯の差口の鬼に入る。一同に身の調子をめずして沈むべしと思へり——といふを合団に一同我先にと躊躇ね出づ。其熱き事如何ぞやと思ふばかりなり。余が見たる時は、此一度に入りたる者凡五六十人許なり。尚其余なるは旁に其出づるを待ち居るなり。盛なる時は此浴場の四辺に三

百人も集まる。最初に入るのを一番と云ふ、次なるを二番、三番と云ふ。二番の群よりは湯を保まず直に頭に注ぎ入りなり。四番程にして止ぬ。婦人は多く二番三番に入る。陳腔湯を凡塘より湯の半程かい出して差口を開き、新なる湯に入るなり。湯満つれば又初の如く折撃ちて様み入るなり。斯くすること一日に五六度なりと云。後に湯を揉み中より御書業紙の浮など浮くを挙揚気にてすぐふ識極まる。熱湯に沈む間に堪へず、又一人先出づる事能はずして遂に敗れる者あり。興るれば「アガツタ」といひ一同に板の間の上へ引き上げ、水注ぐ。蘇する者は蘇し、体弱き者は速に死ぬるものあり。実に此の熱湯の現状を見て、余、田中君と且驚き且呆れ醜見野安残醜。本これに超ゆるもの無かるべし。正法念經には焦呼叫喚阿鼻の八大地獄を説きたれば、よもや是には異らじと肝を冷やす事一時なりき。野口常共（前に太政官の官員）といひ學士の、湯元安平が許に浴治してあるを、伊香保にて森春壽しが添書をくれたれば訪ひたり。余は此地に来りて此の温泉の臭きと酷なるとに恐れて未一度も浴せざりしに、野口君が宿に内場に引きたるに甚ぬるきあり。一度は試みるべしとの勤めにやがて入る。熱度百七八度許なれば、顔洗へず眼に染み乘けば衝突き、体を沈むれば何となく肌を刺さるるの思あり。無病の身のかかる危き湯に入るべきにあらずと一浴の後は再入らず。草津の地名は臭水なりといふ説あり。大般若經に南方有三名湯は草津湯あるに據りて名づけたりともいへど、附会にて偶暗合せる事論なるべし。草津温泉由來記といへる書には、養老五年行基善應して其の效驗を試み初めしと云。又草津錄記といへる書には右大將領胡公、建久四年八月三日信州三原御遊の時、白根明神の鳥居の前まで狩らせ給ふに硫黄臭氣して烟立てり、依て其地の住人、御殿助に仰て叢を刈らせ其地を掘らせて見給ふに、自然と好き温泉涌き出づ、これ必病を治すべしと足利駒王丸が病を試み給ふに七日に至て平癒す。右大將感激ひ御身も浴し給ふに御心地快然たり。これ無双の温泉なりと貯ひて平癒す。右大將感動に顯ふ云々とあるとなり——今この御殿の湯その跡なりといへり。此説に拠れば頼朝の発見せしとせるなり。東國には建久四年月廿一日、持軍家為^ノ覽下野国那須野信義三原等狩倉へ今日進発とありて、其の次に武藏國入間野の追島狩は入間野より三原に狩して那須野に狩せる事を記せり。偽書なれば如何にや。然

れど上野の国より遷るとあれば、其の事もありたるにや三原の地は信義にはあらず、今草津の南なる河原、長野原、鎌原の地にて狩宿村は、狩地なるべしと言へり（小宿村、村原南ヲ御所平ト云）。物見坂、露張、萬騎場。右等ノ地名ヘリ（其頃村民ノ勢子ヲレシ者數百人皆ニ銀豆ノ如キモノ賜ハレヒト云）。草津の名の正しく書に見ゆるは文明十七年発憲法印が此に二七日湯治せし事、北國紀行に見え（其頃鎮守の明神云々など見えて既に盛に開けたりしと見えたり）。文龜三年叔宗長が此に來りし事、宗祇終焉記に見え、永正六年宗長再此に至りし事、東路の要に見えたり。その他永禄天正の頃、武将武士の此に湯治せし事諸書にあり。其頃上杉謙信が関東へ供奉せし近衛關白竜山公の訣なりとて、「里はまだ紅葉の秋を知らぬ白根に今朝は雪は降りける」といへる歌を言ひ傳へたり。葉簡堂の板橋に竜山公の歌なりとて書けるに天正十五年とありとなり。古來撰津有馬の湯と草津と併べて称して海内に名高し。

九日。早朝に衝き山駕籠二十丁隠ひて草津の山本の家を立つ。桐油紙にて包まれたれば何地も見えず、鍛しき坂を下る事三十丁許にして立場あり。駕籠の中より聞ければ六本松といふ處なりと。やがて小雨村をすぎて草津川の小雨橋を渡りて生須村の茶屋に憩ふ。草津より一里にして沢渡へは四里ありと云。此處両村を隔てて八町あり。草津は湯川と入山村の白砂川と合ひて南に流れ、長野原にて吾妻川に入れるなり。然れど此處の土人、草津川の方も吾妻川の源なりと云へり。されど西の国界鳥居峰に発するを吾妻川の本源とすべし。長野原に橋ありて須川橋（醉川とも）といふとて、今は草津川を須川と改称せしめらるゝとぞ。生須を免るる兩甚しく夢をてて行く。この間架り坂にて二里にして近く暮峰に至る。頂は上沢渡村入山村の界にて茶屋一軒あり。四方雲霧にて見えず。飯飯など食ひて是より上沢渡まで一里八町、下り坂甚急なり。四十町許にて大岩といふ立場あり。又少しう止む。桐油紙を去る。縫の下左に細見山あり、右に谷川を隔てて頂へと出したる岩山あり「ありかさ山」といひ俗に大岩といへり。大岩の麓といへるは、高十六丈余、巾六尺ありと云。其水皆上沢渡川に入るなり。午後二時上沢渡村に着き湯元太十郎の家の憩ふ。本村は上下に分れ、温泉あるは即此の上沢渡村の方なり、村家は谷間の坂路の両旁を狹みてあり、地甚狭隘にして家作も善からず、人家四十戸あり、其中浴店五戸許ありて、太十郎の家浴客最多し。福田宗貞といへる洋医あり、此辺に名あり、亦浴店を兼ね業とす。漫遊文章に

田（正）とあるは、今の宗直の祖父にもあるか。路急けば訪ははず、温泉は太郎の宅地の背なる崖より出づ。涌く匂五匁ありて、湯槽を四匁に設け引く。熱度は百十五六度なるべし。雨には濁み晴には白く清り味に蛋白の気味あり、泉質は硫酸カルシウム、塩酸苦土、碧土なりと云。腫瘍、癌、潰瘍などに好しといへど、泉質主治未審なる試験なし。浴客一年七八百人、夏の盛なる時は百余人同宿する事もありと云。然れど退宿の客は少く大抵は草津の湯治人の往来に一宿する者多し。草津に入る者は帰路に必沢渡に入る。体を洗ふを喜びとすと云。湯の上なる間に湯前明神、善堂あり。万葉歌末勘園に「左和多里の手兒にい行き合ひ、赤駒が足搔を早み言間はず米ぬ」とあるは此沢渡の事なるべしと云。窓の庭に此歌を石に彫り立てたりといふ。田中君は徒歩と云。余はまた愛馬を雇ひて打立つ。程行きて鍾しき下り坂あり、老里にして下沢渡村に至る。此處に北より四方用來り西より上沢渡用來りて落合ふ。四方用の新橋といふを渡る川に沿ひて北へ四万路あり三十町許にして前にもいへる君尾に至る。路平易なりと云。高台より下流は東南に流れて山田川と云。川の南に山田村といへる。原町と中野条の間に至り吾妻川に合ふ。折田村の辺は右に吾嬬山といへる、その南に薬師が岳あり、皆頗る高し。午後四時半、中野条駅に着き——上沢渡より一里半なり——見屋といへる旅店に宿す。余が馬は駄馬には甚だかりしかば田中君は連れに後れて暮に着かる。此の家の座敷の額に家業の書かれたるが二枚までもあり。伊香保も八日より霖雨にて、十三日まで日に降れり。此の間徒然なるままに机に免りて、此の四万草津沢渡の遊記を記し、其中を抄録して岸田氏に示したれば大に喜び、やがて東京なる日日新聞に寄す（廿二日より廿九日まで出づ、後に見たるに然り）。帰京の翌して同宿の人々に贈乞す。

十四日。晴。人力車にて立つ。人々門まで送らる。數日来の晴なれば殊に心地良し。此時まで伊香保まだ客満ちて後より来る客も多い。渋川駅に出で堀口藍園老人を訪ぶ。染屋を業とす。読書ありて博聞なり。伊香保志の料にて古き事など聞きて別る。金吉駅は鎮守の神社祭なりとて騒がし。星雲たべうて午後二時に高崎駅に着く。此路程も伊香保志に幸げたれば渡らす。旅店越後屋といへるに憩ひて聞けば、連日の雨に鳥川神流川水増して、昨日より川留なりと云。大に困じて大手前の馬車屋なる広運舎に至り問へば、今日の晴にて今川は明きたりと答ふ。さらば明朝の馬車に乗合はんといへば、退宿の客多く買ひ切られたれど、今夕に立つべき夜馬車はありといふ。やがてその手形買いて旅店に一酌し暫く眠れば六時にて、夕飯して七時に馬車に乗り合ひて出づ。乗組六人なり。路は、はや、暗。鳥川神流川皆水嘗増して水音烈しく、夜中にはあり幸く船にて渡る。熊谷駅過ぐる頃は午夜なり。終夜行きて上尾駅の邊にて夜明く。

十五日。晴。午前九時、東京内神田淡路町なる広運舎に着き十時半に浅草北富坂町なる家に帰る。明治十二年九月三十日燈下に淨書す。

此夜仲秋なり。

調查委員一覽

氏名	役職等	調査地区
相葉井今上都萩矢関小大磯湯山田原富美子	葉井善一郎勇進巳吉畔正善福義達貞治	仲伸夫雄堆前沼立沼田女子高等学校教諭
タ	文学博士、群馬大学学芸学部長 県立博物館学芸係長 前橋市立女子高等学校教諭 群馬県文化財専門委員 県立沼田女子高等学校教諭 群馬県文化財専門委員 立沼田女子高等学校教諭	八幡、荷付場、根広、京塚 廣池、太子、田代原 湯久保、品木、小倉、京塚 日影、小雨、引沼 日影、生須、京塚
タ	藤岡市立第二小学校教諭 民家研究家 群馬大学学芸学部助教授 県教育委員会社会教育主事	赤岩、品木、世立 赤岩、沼尾、和光原 赤岩、梨木、花敷、世立
タ	湯久保、生須、長平 赤岩、太子、世立	赤岩、太子、世立
タ	六合村教育委員会教育長	

索

引

(總說・前編)

卷之三

秋のとしとり
秋 祭り
秋山記行
あけび(肴唄)
麻えびす

10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31

1986年，中国科学院植物研究所的王其华、王金凤、王金凤等在《植物分类学报》上发表文章，指出“毛脉蕨”是错误的名称，应将“毛脉蕨”改名为“毛轴蕨”，并指出“毛脉蕨”一名已为日本学者所使用。

110. 111. 112. 113. 114. 115. 116. 117. 118. 119. 120. 121. 122. 123. 124. 125. 126. 127. 128. 129. 130. 131. 132. 133. 134. 135. 136. 137. 138. 139. 140. 141. 142. 143. 144. 145. 146. 147. 148. 149. 150. 151. 152. 153. 154. 155. 156. 157. 158. 159. 160. 161. 162. 163. 164. 165. 166. 167. 168. 169. 170. 171. 172. 173. 174. 175. 176. 177. 178. 179. 180. 181. 182. 183. 184. 185. 186. 187. 188. 189. 190. 191. 192. 193. 194. 195. 196. 197. 198. 199. 200.

| | | | | | | | | | |
|-------------------|-----------------------|------------------|-------------|--------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|
| 因
鏡
キヨウカタビラ | 旧
キユーデ仕物
ユードシモノ | 教逆
荒作
キミハセ | キモヒツ | 木木木木
ミモヒツ | キキノ
ノモヒツ | 木祈狐
モクモク | キモキツ | 木北
モクヒツ | キモキツ |
| 荒
作
キモヒツ | 学
ユードシモノ | キ
荒
モ | ミ
作
モ | ビ
團
モ | ノ
の
コ | の
地
コ | ノ
地
コ | シ
ジ
ヤ | シ
ジ
ヤ |
| 作
物
モ | 院
ユードシモノ | 事
チ | 事
物
チ | 佛
ミ | 實
ミ | 益
モ | 類
ム | 師
モ | 飯
ス |
| 物
モ | 院
ユードシモノ | 事
チ | 事
物
チ | 佛
ミ | 實
ミ | 益
モ | 類
ム | 師
モ | 印
ゴ |
| | | | | | | こ
リ | り | 師
モ | 車
ゴ |

| 日期 | 时段 | 时段内总人数 | 时段内进站人数 | 时段内出站人数 |
|------------|-------------|--------|---------|---------|
| 2023-10-10 | 00:00~06:00 | 111 | 100 | 100 |
| 2023-10-10 | 06:00~12:00 | 111 | 100 | 100 |
| 2023-10-10 | 12:00~18:00 | 111 | 100 | 100 |
| 2023-10-10 | 18:00~24:00 | 111 | 100 | 100 |

在這裏，我們將會遇到一個問題：如果我說「我會說中文」，那麼我說的中文是誰說的？這就是所謂的「自我指涉」（self-referentiality）。

| 年 | 月 | 日 | 天候 | 風向 | 風速 | 氣溫 | 露點 | 氣壓 | 降水量 | 水位 | 潮汐 |
|------|----|----|----|----|----|------|------|--------|-----|------|----|
| 1910 | 10 | 10 | 晴 | 東 | 弱 | 20.0 | 16.0 | 1010.0 | 0.0 | 10.0 | 低潮 |
| | 11 | 1 | 晴 | 東 | 弱 | 20.0 | 16.0 | 1010.0 | 0.0 | 10.0 | 低潮 |
| | 12 | 2 | 晴 | 東 | 弱 | 20.0 | 16.0 | 1010.0 | 0.0 | 10.0 | 低潮 |
| | 13 | 3 | 晴 | 東 | 弱 | 20.0 | 16.0 | 1010.0 | 0.0 | 10.0 | 低潮 |
| | 14 | 4 | 晴 | 東 | 弱 | 20.0 | 16.0 | 1010.0 | 0.0 | 10.0 | 低潮 |
| | 15 | 5 | 晴 | 東 | 弱 | 20.0 | 16.0 | 1010.0 | 0.0 | 10.0 | 低潮 |
| | 16 | 6 | 晴 | 東 | 弱 | 20.0 | 16.0 | 1010.0 | 0.0 | 10.0 | 低潮 |
| | 17 | 7 | 晴 | 東 | 弱 | 20.0 | 16.0 | 1010.0 | 0.0 | 10.0 | 低潮 |
| | 18 | 8 | 晴 | 東 | 弱 | 20.0 | 16.0 | 1010.0 | 0.0 | 10.0 | 低潮 |
| | 19 | 9 | 晴 | 東 | 弱 | 20.0 | 16.0 | 1010.0 | 0.0 | 10.0 | 低潮 |
| | 20 | 10 | 晴 | 東 | 弱 | 20.0 | 16.0 | 1010.0 | 0.0 | 10.0 | 低潮 |
| | 21 | 11 | 晴 | 東 | 弱 | 20.0 | 16.0 | 1010.0 | 0.0 | 10.0 | 低潮 |
| | 22 | 12 | 晴 | 東 | 弱 | 20.0 | 16.0 | 1010.0 | 0.0 | 10.0 | 低潮 |
| | 23 | 13 | 晴 | 東 | 弱 | 20.0 | 16.0 | 1010.0 | 0.0 | 10.0 | 低潮 |
| | 24 | 14 | 晴 | 東 | 弱 | 20.0 | 16.0 | 1010.0 | 0.0 | 10.0 | 低潮 |
| | 25 | 15 | 晴 | 東 | 弱 | 20.0 | 16.0 | 1010.0 | 0.0 | 10.0 | 低潮 |
| | 26 | 16 | 晴 | 東 | 弱 | 20.0 | 16.0 | 1010.0 | 0.0 | 10.0 | 低潮 |
| | 27 | 17 | 晴 | 東 | 弱 | 20.0 | 16.0 | 1010.0 | 0.0 | 10.0 | 低潮 |
| | 28 | 18 | 晴 | 東 | 弱 | 20.0 | 16.0 | 1010.0 | 0.0 | 10.0 | 低潮 |
| | 29 | 19 | 晴 | 東 | 弱 | 20.0 | 16.0 | 1010.0 | 0.0 | 10.0 | 低潮 |
| | 30 | 20 | 晴 | 東 | 弱 | 20.0 | 16.0 | 1010.0 | 0.0 | 10.0 | 低潮 |
| | 31 | 21 | 晴 | 東 | 弱 | 20.0 | 16.0 | 1010.0 | 0.0 | 10.0 | 低潮 |

三月三十日，余在北平，忽接上海電報，知其母已病危，急返上海。四月一日到上海，即往復旦大學，見其母，母已不省人事，但尚能聽人語。四月二日，母歸上海，同母往復旦大學，見其母，母已不能吃飯，但尚能聽人語。四月三日，母歸上海，同母往復旦大學，見其母，母已不能吃飯，但尚能聽人語。四月四日，母歸上海，同母往復旦大學，見其母，母已不能吃飯，但尚能聽人語。四月五日，母歸上海，同母往復旦大學，見其母，母已不能吃飯，但尚能聽人語。四月六日，母歸上海，同母往復旦大學，見其母，母已不能吃飯，但尚能聽人語。四月七日，母歸上海，同母往復旦大學，見其母，母已不能吃飯，但尚能聽人語。四月八日，母歸上海，同母往復旦大學，見其母，母已不能吃飯，但尚能聽人語。四月九日，母歸上海，同母往復旦大學，見其母，母已不能吃飯，但尚能聽人語。四月十日，母歸上海，同母往復旦大學，見其母，母已不能吃飯，但尚能聽人語。四月十一日，母歸上海，同母往復旦大學，見其母，母已不能吃飯，但尚能聽人語。四月十二日，母歸上海，同母往復旦大學，見其母，母已不能吃飯，但尚能聽人語。四月十三日，母歸上海，同母往復旦大學，見其母，母已不能吃飯，但尚能聽人語。四月十四日，母歸上海，同母往復旦大學，見其母，母已不能吃飯，但尚能聽人語。四月十五日，母歸上海，同母往復旦大學，見其母，母已不能吃飯，但尚能聽人語。四月十六日，母歸上海，同母往復旦大學，見其母，母已不能吃飯，但尚能聽人語。四月十七日，母歸上海，同母往復旦大學，見其母，母已不能吃飯，但尚能聽人語。四月十八日，母歸上海，同母往復旦大學，見其母，母已不能吃飯，但尚能聽人語。四月十九日，母歸上海，同母往復旦大學，見其母，母已不能吃飯，但尚能聽人語。四月二十日，母歸上海，同母往復旦大學，見其母，母已不能吃飯，但尚能聽人語。四月廿一日，母歸上海，同母往復旦大學，見其母，母已不能吃飯，但尚能聽人語。四月廿二日，母歸上海，同母往復旦大學，見其母，母已不能吃飯，但尚能聽人語。四月廿三日，母歸上海，同母往復旦大學，見其母，母已不能吃飯，但尚能聽人語。四月廿四日，母歸上海，同母往復旦大學，見其母，母已不能吃飯，但尚能聽人語。四月廿五日，母歸上海，同母往復旦大學，見其母，母已不能吃飯，但尚能聽人語。四月廿六日，母歸上海，同母往復旦大學，見其母，母已不能吃飯，但尚能聽人語。四月廿七日，母歸上海，同母往復旦大學，見其母，母已不能吃飯，但尚能聽人語。四月廿八日，母歸上海，同母往復旦大學，見其母，母已不能吃飯，但尚能聽人語。四月廿九日，母歸上海，同母往復旦大學，見其母，母已不能吃飯，但尚能聽人語。四月三十日，母歸上海，同母往復旦大學，見其母，母已不能吃飯，但尚能聽人語。

子育ての神
コゾロッバチ
ゴタジル(おぎりこみ)
小づかいどり
デ
事 納 カトノモチ
事 始 カミハメ
琴 子供 チキコ
琴 子供 チキコ
ことば遊び
子供の遊び
子供の虫除け
子供のヤブ入り
コナキリ
コネバチ(こね詠)
木 挽 ビリエ
木 挽 ビリエ
古 古事記
小間物屋
小麦粉団子
虚無僧
コメダワラ
コモチモチ
子 守 守

| | | |
|----|-----|-------------|
| 15 | 卷之三 | 大哉，天地萬物之靈也！ |
| 14 | 卷之二 | 天地萬物之靈也！ |
| 13 | 卷之二 | 天地萬物之靈也！ |
| 12 | 卷之二 | 天地萬物之靈也！ |
| 11 | 卷之二 | 天地萬物之靈也！ |
| 10 | 卷之二 | 天地萬物之靈也！ |
| 9 | 卷之二 | 天地萬物之靈也！ |
| 8 | 卷之二 | 天地萬物之靈也！ |
| 7 | 卷之二 | 天地萬物之靈也！ |
| 6 | 卷之二 | 天地萬物之靈也！ |
| 5 | 卷之二 | 天地萬物之靈也！ |
| 4 | 卷之二 | 天地萬物之靈也！ |
| 3 | 卷之二 | 天地萬物之靈也！ |
| 2 | 卷之二 | 天地萬物之靈也！ |
| 1 | 卷之二 | 天地萬物之靈也！ |

| 日期 | 星期 | 事件 | 地点 | 时间 |
|------------|-----|----|-------|-------|
| 2010-10-10 | 星期一 | 出发 | 北京 | 10:00 |
| 2010-10-11 | 星期二 | 到达 | 上海 | 11:00 |
| 2010-10-12 | 星期三 | 参观 | 上海博物馆 | 13:00 |
| 2010-10-13 | 星期四 | 休息 | 酒店 | 14:00 |
| 2010-10-14 | 星期五 | 出发 | 上海 | 10:00 |
| 2010-10-15 | 星期六 | 到达 | 南京 | 11:00 |
| 2010-10-16 | 星期日 | 参观 | 南京博物院 | 13:00 |
| 2010-10-17 | 星期一 | 返回 | 南京 | 14:00 |
| 2010-10-18 | 星期二 | 到达 | 北京 | 11:00 |
| 2010-10-19 | 星期三 | 结束 | 北京 | 12:00 |

寺テデ手鉄テ手デ手出でツ爪ツツツツツツツツツツ作月ツツ通鎮チヨウ
 ハムン砲ツツキ稼ギ切入ガウダヌビトゲ作物占カニ夜様
 スのぶベコゴ(つり)りれニトゲ(だん)ゴ
 講ビシ拭ちんいロメトギイ
 ハシマキ

| 年 | 月 | 日 | 天候 | 風向 | 風速 | 氣溫 | 露點 | 濕度 | 氣壓 | 降水量 | 雲量 | 能見度 |
|------|----|----|----|----|----|------|------|-----|--------|-----|----|------|
| 2011 | 11 | 25 | 晴 | 東北 | 微風 | 15.5 | 12.5 | 50% | 1012.5 | 0.0 | 0 | 10km |
| 2011 | 11 | 26 | 晴 | 東北 | 微風 | 15.5 | 12.5 | 50% | 1012.5 | 0.0 | 0 | 10km |
| 2011 | 11 | 27 | 晴 | 東北 | 微風 | 15.5 | 12.5 | 50% | 1012.5 | 0.0 | 0 | 10km |
| 2011 | 11 | 28 | 晴 | 東北 | 微風 | 15.5 | 12.5 | 50% | 1012.5 | 0.0 | 0 | 10km |
| 2011 | 11 | 29 | 晴 | 東北 | 微風 | 15.5 | 12.5 | 50% | 1012.5 | 0.0 | 0 | 10km |
| 2011 | 11 | 30 | 晴 | 東北 | 微風 | 15.5 | 12.5 | 50% | 1012.5 | 0.0 | 0 | 10km |
| 2011 | 11 | 31 | 晴 | 東北 | 微風 | 15.5 | 12.5 | 50% | 1012.5 | 0.0 | 0 | 10km |
| 2011 | 12 | 1 | 晴 | 東北 | 微風 | 15.5 | 12.5 | 50% | 1012.5 | 0.0 | 0 | 10km |
| 2011 | 12 | 2 | 晴 | 東北 | 微風 | 15.5 | 12.5 | 50% | 1012.5 | 0.0 | 0 | 10km |
| 2011 | 12 | 3 | 晴 | 東北 | 微風 | 15.5 | 12.5 | 50% | 1012.5 | 0.0 | 0 | 10km |
| 2011 | 12 | 4 | 晴 | 東北 | 微風 | 15.5 | 12.5 | 50% | 1012.5 | 0.0 | 0 | 10km |
| 2011 | 12 | 5 | 晴 | 東北 | 微風 | 15.5 | 12.5 | 50% | 1012.5 | 0.0 | 0 | 10km |
| 2011 | 12 | 6 | 晴 | 東北 | 微風 | 15.5 | 12.5 | 50% | 1012.5 | 0.0 | 0 | 10km |
| 2011 | 12 | 7 | 晴 | 東北 | 微風 | 15.5 | 12.5 | 50% | 1012.5 | 0.0 | 0 | 10km |
| 2011 | 12 | 8 | 晴 | 東北 | 微風 | 15.5 | 12.5 | 50% | 1012.5 | 0.0 | 0 | 10km |
| 2011 | 12 | 9 | 晴 | 東北 | 微風 | 15.5 | 12.5 | 50% | 1012.5 | 0.0 | 0 | 10km |
| 2011 | 12 | 10 | 晴 | 東北 | 微風 | 15.5 | 12.5 | 50% | 1012.5 | 0.0 | 0 | 10km |
| 2011 | 12 | 11 | 晴 | 東北 | 微風 | 15.5 | 12.5 | 50% | 1012.5 | 0.0 | 0 | 10km |
| 2011 | 12 | 12 | 晴 | 東北 | 微風 | 15.5 | 12.5 | 50% | 1012.5 | 0.0 | 0 | 10km |
| 2011 | 12 | 13 | 晴 | 東北 | 微風 | 15.5 | 12.5 | 50% | 1012.5 | 0.0 | 0 | 10km |
| 2011 | 12 | 14 | 晴 | 東北 | 微風 | 15.5 | 12.5 | 50% | 1012.5 | 0.0 | 0 | 10km |
| 2011 | 12 | 15 | 晴 | 東北 | 微風 | 15.5 | 12.5 | 50% | 1012.5 | 0.0 | 0 | 10km |
| 2011 | 12 | 16 | 晴 | 東北 | 微風 | 15.5 | 12.5 | 50% | 1012.5 | 0.0 | 0 | 10km |
| 2011 | 12 | 17 | 晴 | 東北 | 微風 | 15.5 | 12.5 | 50% | 1012.5 | 0.0 | 0 | 10km |
| 2011 | 12 | 18 | 晴 | 東北 | 微風 | 15.5 | 12.5 | 50% | 1012.5 | 0.0 | 0 | 10km |
| 2011 | 12 | 19 | 晴 | 東北 | 微風 | 15.5 | 12.5 | 50% | 1012.5 | 0.0 | 0 | 10km |
| 2011 | 12 | 20 | 晴 | 東北 | 微風 | 15.5 | 12.5 | 50% | 1012.5 | 0.0 | 0 | 10km |
| 2011 | 12 | 21 | 晴 | 東北 | 微風 | 15.5 | 12.5 | 50% | 1012.5 | 0.0 | 0 | 10km |
| 2011 | 12 | 22 | 晴 | 東北 | 微風 | 15.5 | 12.5 | 50% | 1012.5 | 0.0 | 0 | 10km |
| 2011 | 12 | 23 | 晴 | 東北 | 微風 | 15.5 | 12.5 | 50% | 1012.5 | 0.0 | 0 | 10km |
| 2011 | 12 | 24 | 晴 | 東北 | 微風 | 15.5 | 12.5 | 50% | 1012.5 | 0.0 | 0 | 10km |
| 2011 | 12 | 25 | 晴 | 東北 | 微風 | 15.5 | 12.5 | 50% | 1012.5 | 0.0 | 0 | 10km |
| 2011 | 12 | 26 | 晴 | 東北 | 微風 | 15.5 | 12.5 | 50% | 1012.5 | 0.0 | 0 | 10km |
| 2011 | 12 | 27 | 晴 | 東北 | 微風 | 15.5 | 12.5 | 50% | 1012.5 | 0.0 | 0 | 10km |
| 2011 | 12 | 28 | 晴 | 東北 | 微風 | 15.5 | 12.5 | 50% | 1012.5 | 0.0 | 0 | 10km |
| 2011 | 12 | 29 | 晴 | 東北 | 微風 | 15.5 | 12.5 | 50% | 1012.5 | 0.0 | 0 | 10km |
| 2011 | 12 | 30 | 晴 | 東北 | 微風 | 15.5 | 12.5 | 50% | 1012.5 | 0.0 | 0 | 10km |
| 2011 | 12 | 31 | 晴 | 東北 | 微風 | 15.5 | 12.5 | 50% | 1012.5 | 0.0 | 0 | 10km |

仲人親人
仲・大根の年取り
草
七草ゾーセイ
七草のおじや
七草びき
七升まき
ナナツキヨ
ナナツボーズ(七
名広め
ならの廣め
なり果物の呪い
成田山
繩と
ニカラミ
にぎだんご
にこみうどん
二十三夜様シ
二丈ツギ
光さん
の
ヤモチ
二日午
ニニニ
二百十日祭り
二夜セリ

| 年 | 月 | 日 | 天候 | 風向 | 風速 | 氣溫 | 露點 | 氣壓 | 降水量 | 積雪 | 水位 |
|------|----|---|----|----|----|------|-----|--------|-----|----|------|
| 1925 | 11 | 1 | 晴 | 東 | 弱 | 10.5 | 8.5 | 1013.5 | 0 | 0 | 10.5 |
| | 2 | | 晴 | 東 | 弱 | 10.5 | 8.5 | 1013.5 | 0 | 0 | 10.5 |
| | 3 | | 晴 | 東 | 弱 | 10.5 | 8.5 | 1013.5 | 0 | 0 | 10.5 |
| | 4 | | 晴 | 東 | 弱 | 10.5 | 8.5 | 1013.5 | 0 | 0 | 10.5 |
| | 5 | | 晴 | 東 | 弱 | 10.5 | 8.5 | 1013.5 | 0 | 0 | 10.5 |
| | 6 | | 晴 | 東 | 弱 | 10.5 | 8.5 | 1013.5 | 0 | 0 | 10.5 |
| | 7 | | 晴 | 東 | 弱 | 10.5 | 8.5 | 1013.5 | 0 | 0 | 10.5 |
| | 8 | | 晴 | 東 | 弱 | 10.5 | 8.5 | 1013.5 | 0 | 0 | 10.5 |
| | 9 | | 晴 | 東 | 弱 | 10.5 | 8.5 | 1013.5 | 0 | 0 | 10.5 |
| | 10 | | 晴 | 東 | 弱 | 10.5 | 8.5 | 1013.5 | 0 | 0 | 10.5 |
| | 11 | | 晴 | 東 | 弱 | 10.5 | 8.5 | 1013.5 | 0 | 0 | 10.5 |
| | 12 | | 晴 | 東 | 弱 | 10.5 | 8.5 | 1013.5 | 0 | 0 | 10.5 |
| | 13 | | 晴 | 東 | 弱 | 10.5 | 8.5 | 1013.5 | 0 | 0 | 10.5 |
| | 14 | | 晴 | 東 | 弱 | 10.5 | 8.5 | 1013.5 | 0 | 0 | 10.5 |
| | 15 | | 晴 | 東 | 弱 | 10.5 | 8.5 | 1013.5 | 0 | 0 | 10.5 |
| | 16 | | 晴 | 東 | 弱 | 10.5 | 8.5 | 1013.5 | 0 | 0 | 10.5 |
| | 17 | | 晴 | 東 | 弱 | 10.5 | 8.5 | 1013.5 | 0 | 0 | 10.5 |
| | 18 | | 晴 | 東 | 弱 | 10.5 | 8.5 | 1013.5 | 0 | 0 | 10.5 |
| | 19 | | 晴 | 東 | 弱 | 10.5 | 8.5 | 1013.5 | 0 | 0 | 10.5 |
| | 20 | | 晴 | 東 | 弱 | 10.5 | 8.5 | 1013.5 | 0 | 0 | 10.5 |
| | 21 | | 晴 | 東 | 弱 | 10.5 | 8.5 | 1013.5 | 0 | 0 | 10.5 |
| | 22 | | 晴 | 東 | 弱 | 10.5 | 8.5 | 1013.5 | 0 | 0 | 10.5 |
| | 23 | | 晴 | 東 | 弱 | 10.5 | 8.5 | 1013.5 | 0 | 0 | 10.5 |
| | 24 | | 晴 | 東 | 弱 | 10.5 | 8.5 | 1013.5 | 0 | 0 | 10.5 |
| | 25 | | 晴 | 東 | 弱 | 10.5 | 8.5 | 1013.5 | 0 | 0 | 10.5 |
| | 26 | | 晴 | 東 | 弱 | 10.5 | 8.5 | 1013.5 | 0 | 0 | 10.5 |
| | 27 | | 晴 | 東 | 弱 | 10.5 | 8.5 | 1013.5 | 0 | 0 | 10.5 |
| | 28 | | 晴 | 東 | 弱 | 10.5 | 8.5 | 1013.5 | 0 | 0 | 10.5 |
| | 29 | | 晴 | 東 | 弱 | 10.5 | 8.5 | 1013.5 | 0 | 0 | 10.5 |
| | 30 | | 晴 | 東 | 弱 | 10.5 | 8.5 | 1013.5 | 0 | 0 | 10.5 |
| | 31 | | 晴 | 東 | 弱 | 10.5 | 8.5 | 1013.5 | 0 | 0 | 10.5 |

モモ木モツ木餅 餅モ木メ飯メ村村村村村村村村ム武無
ン一ノコツラシ大カ寄ママ足人足村へ入つて来る旅人村への新入者
ビヨレンドモヘチ炭巴拉ゴ合役りりテケ尽
イウン綿ビシ工き

ヤヤ安夜夜ヤや屋屋屋屋ヤヤ厄厄ヤヤ厄厄ヤヤ
セ原食シやしや數數ケドの呪いタカタ落タカ
ツマんだんウジんの呪いラケ年子エシ業マ
チボケご食マ実神神荷号号

| | | | | | | |
|----|----|----------|--------|------------|----------|----------|
| 10 | 十六 | 三月三日、其の夜 | 吉野大峯神社 | よそいき | ヨコザ(よに) | 与喜屋のアラ神 |
| 11 | 十七 | 四月七日 | 世立の枝垂葉 | ヨバイ(夜這い) | ヨコサ(ヨコサ) | 与喜屋の荒益さん |
| 12 | 十八 | 四月八日 | 四日坊主 | 夜なべ | ヨコサ(ヨコサ) | 与喜屋の荒益さん |
| 13 | 十九 | 五月一日 | 嫁の里 | 嫁入り | ヨコサ(ヨコサ) | 与喜屋の荒益さん |
| 14 | 二十 | 五月二日 | 嫁の里始 | 嫁入り始め | ヨコサ(ヨコサ) | 与喜屋の荒益さん |
| 15 | 廿一 | 五月三日 | 嫁の里 | 嫁のうでだめし | ヨコサ(ヨコサ) | 与喜屋の荒益さん |
| 16 | 廿二 | 五月四日 | 嫁の里 | 嫁むこの泣き上げ節句 | ヨコサ(ヨコサ) | 与喜屋の荒益さん |

| | |
|-------|----------------|
| 若者 | 若山牧水と入山別れ(童劇) |
| わがんじき | わがんじき(別れ塔婆) |
| 人会 | 人会(シンドウ) |
| 草鞋 | 草鞋(スリッパ) |
| 渡り | 渡り(タマラグ) |
| わらじ鉄砲 | わらじ鉄砲(麻鉄砲) |
| わらび | わらび(わらび・蕨) |
| 粉 | 粉(ミズベ) |
| わらび粉 | わらび粉(蕨粉) |
| わらびとり | わらびとり(わらび籠・蕨籠) |
| わらびの | わらびの(わらび根・蕨根) |
| わらべ娘 | わらべ娘(童劇) |
| ワラビ | ワラビ(ワラビのび) |
| のび | のび(根) |
| ワラビの根 | ワラビの根(ワラビのび) |
| ザロ | ザロ(口) |

六合村の民俗

昭和三十八年三月二十八日印刷
昭和三十八年三月三十日発行

非売品

編集兼発行者 群馬県教育委員会編

印 刷 所 前橋市前代田町二八二一
朝日印刷工業株式会社
電話(2)四三六七番